



# Volunteer Center

明治学院大学

ボランティアセンター報告書

第21号

VOLUNTEER CENTER YEAR-END REPORT

2024

明治学院大学ボランティアセンター

MEIJIGAKUIN UNIVERSITY VOLUNTEER CENTER

# 目次

# 明治学院大学 ボランティアセンター報告書 第21号 2024

学長挨拶	今尾 真.....	1
ボランティアセンター長挨拶	猪瀬 浩平.....	3

## I. 特集

1. レインボーフェス.....	6
2. 能登半島災害復興支援ボランティア（夏季・冬季）.....	8
3. Let's RAP ラップワークショップ.....	10

## II. 2024 年度活動報告

1. 2024 年度ボランティアセンター行事一覧.....	14
2. 2024 年度来室者数.....	16

### <全学プログラム>

3. 明治学院大学ボランティア大賞.....	17
総括.....	17
受賞学生報告	
大賞 「タイで人身売買の危険から子どもたちを守る ～支援の実践と継続と拡大～」	
法学部グローバル法学科3年/丸山 智義.....	19
審査員特別賞 「クルドの子どもの将来のために～学習支援活動を通して～」	
国際学部国際学科4年/大栗 夢加.....	21
奨励賞 「国際ボランティア活動への挑戦 -国内外における教育・環境・再生支援ボランティアの実践-」	
国際学部国際学科4年/関本 詩音.....	23
奨励賞 「「生きる」を支えるボランティア」	
心理学部心理学科4年/小室 閑.....	25
奨励賞 「異文化コミュニケーションを生かした海外ボランティアの実践～フィリピンのセブ島での 困窮者支援活動～」	
文学部英文学科3年/植木 聡美.....	27
4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム.....	29
総括.....	29
修了生報告	
「手話でつながるボランティア」	
心理学部心理学科4年/井上 和奏.....	33
「「Do for "Others"」から得られた「ボランティア」についての見解」	
社会学部社会福祉学科3年/渡邊 葵衣.....	36

<ボランティアセンター主催プログラム>

5. ボランティアファンド学生チャレンジ.....	41
総括/助成団体一覧	
バヤオプロジェクト .....	43
ベトナムの子どもたちにより良い衛生環境を.....	46
コンポスト活動で循環型キャンパスへ！.....	48
6. いつでもボランティアチャレンジ.....	50
総括/助成企画一覧	
五感で感じるフェアトレード@戸塚まつり .....	53
不登校児童とものづくり体験や自然観察をする .....	54
音楽の国際交流～中華と日本～ .....	56
まつりでHAPPY！新体験.....	58
教科書を寄付してタンザニアへ支援しよう！！ .....	60
四万十ええとこPRプロジェクト .....	62
高齢者施設での傾聴・レクリエーションボランティア .....	64
パタゴニア “Worn Wear College Tour” .....	66
第3回映画上映会「ガザ=ストロフ -パレスチナの吟（うた）-」 .....	68
認知症についての理解を地域住民に広めよう！ .....	69
A week for Palestine .....	70
持とう！自信！守ろう！体！明学コンドーム設置プロジェクト.....	72
1923年関東大震災時の虐殺を「記憶」するためのプロジェクト.....	74
ニューヨークから横浜キャンパスへー核兵器禁止条約を知るー.....	76
新生活スタートダッシュプロジェクト .....	77
明学×能登 つなぐプロジェクト.....	79
四万十町 雁皮紙再生プロジェクト .....	81
7. 1 Day for Others .....	83
総括.....	83
これまでの参加者数.....	84
プログラム一覧.....	85
8. ボランティア・カフェ.....	88
総括.....	88
各回報告.....	90

9. 災害ボランティア助成金.....	99
総括.....	99
実績.....	99
10. ボランティアフェア.....	100
総括.....	100
開催概要.....	100
11. 国際機関実務体験プログラム.....	102
総括.....	102
派遣学生活動報告.....	103
12. キャンパス別プロジェクト.....	111
白金キャンパス：TAKANAWA HOP WAY.....	111
横浜キャンパス：畑やろうじゃないか.....	112
<b>III. 新入生アンケート</b>	
新入生のボランティア意識とセンターの課題「2024年度新入生ボランティア活動アンケート」.....	116
<b>IV. ボランティアセンター資料</b>	
1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま.....	124
2. 2024年度マスコミ報道一覧.....	124
3. 2024年度委員等一覧.....	125
4. ボランティアセンター 2024年度基本方針.....	126
5. 明治学院大学ボランティアセンター規程.....	129

# 明治学院大学 2024 年度ボランティアセンター報告書の刊行に寄せて

学長 今尾 真

このたび、「明治学院大学 2024 年度ボランティアセンター報告書」が刊行される運びとなり、大変嬉しく思うとともに、本学のボランティア活動に取り組まれた学生はもとより、ご指導やアドバイスを賜りましたコーディネーターおよびスタッフの皆さまに、心よりお礼と感謝を申し上げます。

明治学院大学ボランティアセンターは、1995 年に発生した阪神・淡路大震災の支援活動に携わった学生・教職員の声をきっかけに、1998 年学校法人明治学院のボランティアセンターとして開設され、1999 年に大学に移管後、2023 年度には設立 25 周年を迎えました。この間、2015 年度から大学が推進してきた「MG DECADE VISION」の 3 つの重点政策（ボランティア活動、グローバル教育、キャリアサポート）の 1 つの大きな柱として、ボランティアセンターを中心に、さまざまなボランティア活動の実践（例えば、学生によるタイ、クルドの子供たちの保護活動やフィリピンの貧困問題への支援等）、日本赤十字社との連携や東日本大震災に際しての岩手県大槌町との協働、2024 年元旦に発生した能登半島地震に対する募金・支援活動など、国内外においてボランティア活動を展開してまいりました。ボランティア活動は、本学創設者のヘボン博士が生涯実践した、“Do for Others(他者への貢献)”の教育理念を体現するものです。年を追うごとに多様な活動が展開され、多くの学生および教職員がこれに関わり、大きな成果をあげていることをとても誇りに思っております。

さて、2024 年度の報告書の中では、次の 3 つの活動が特筆に値すると思われました。

1 つは、先にも述べたように、2024 年元旦に起こった能登半島地震に対する支援活動です。募金活動とともに、夏季と冬季に復興支援ボランティアがコーディネーター・スタッフの引率のもと実施されただけでなく、その後に参加学生が報告会を開催し、現地での活動の様子やそこで感じた課題や問題などを共有し互いに考えを深めたということは、大きな意義があることと思います。

次に、ボランティアセンターで初めて「レインボーフェス」を開催したことも注目には値します。SOGIE（性的指向・性別アイデンティティ/表現）に関連する支援体制整備の観点から、人権問題として LGBTQ の学生や教職員が公正に取り扱われるべきとの意識転換の必要性を確認し、そうした学習・学校環境の整備構築を目指すというメッセージの発信は、本学ボランティアセンターがマイノリティ問題を含めた社会課題に積極的に取り組むという姿勢を鮮明にしたという点で重要な第一歩を踏み出したといえます。

最後に、ボランティア・サティフィケート・プログラムについてです。ボランティア実践と大学での学びを融合させた本学独自のプログラムは、本学の教育理念である“Do for Others（他者への貢献）”を具現化し、共生社会の実現に資する人材育成を目標とするまさに本学ならではのプログラムといえます。そして、このプログラムのスタート時（1 年目生）の登録者数が、2023 年度の 40 名から 2024 年度は 60 名へと大幅に増加したことは、大変評価すべきことと思います。もっとも、2 年目以降の継続者の減少と修了に至るのが難関であることも課題のように見受けられますので、継続・修了までのサポート体制の工夫等により、このプログラムの拡充・深化を期待するところです。

これら以外にも 2024 年度は多数・多様なボランティア活動・実践はありましたが、紙幅との

関係および私の独断により 3 つの取組みを紹介いたしました。いずれにしましても、ボランティア活動は、本学の伝統であるとともに、未来に向けた大きな可能性のある取組みであると思っています。大学として、また学長として、この活動をこれまで以上に拡充すべく、支援していく所存です。多くの在學生・関係者の皆さんの積極的参加により、この活動のさらなる拡大展開と発展を期待しております。

以上をもって、「明治学院大学 2024 年度ボランティアセンター報告書」の刊行にあたっての学長の挨拶とさせていただきます。

## 2024 年度ボランティアセンター報告書の刊行にあたり

ボランティアセンター長 猪瀬 浩平

明治学院大学ボランティアセンター（以下、ボラセンと略する）の 2024 年度報告書が完成しました。

ボラセンでは 2021 年度の基本方針から、ボランティアを「人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである」と定義しています。しかし、世界に大きな声や、わかりやすい言葉、目を引く映像があふれて、小さい声や、弱い声を聴くことが年々難しくなっているように感じます。そして世界に抱いた不安や不満、怒りや悲しみといった感情が、忘却されてしまうか、あるいは短くて力強い言葉に吸収されていきます。そんなだからこそ、ボランティアということの意味がますます大きくなっているように考えます。

2024 年の元旦に能登半島地震が起き、ボラセンでは募金活動と平行し、コーディネーターを現地に派遣するなどの情報収集を行いました。これを踏まえて夏季（8 月 9 月）、および冬季（2 月）に、コーディネーターやスタッフが引率する形での現地活動を行いました。またボラセンの活動を待たずに、災害ボランティア助成金を使って被災地に駆けつけ、支援活動を行う学生の姿も見られました。6 月には震災時においてもすべての人の人権を保障するために、平時においても何が必要なのかについて議論するため、ゲストを呼び災害という人権というテーマでの対話の場も持ちました。これらの活動の成果の一つとして、能登活動に参加した学生たちの報告会を開催するとともに、活動の様子を伝える映像を作成しました。

一方、6 月のプライド月間に合わせて「レインボーフェス」を開催し、LGBTQ や SOGIE（性的指向・性別アイデンティティ／表現）への理解を深めるため、本学の教員や卒業生、そして図書館などの協力を受けながら、シンポジウムやブックフェアや、資料展などを実施しました。直接的に支援を行う活動ではありません。しかし、わたしたちの日常の中で奪われている尊厳に気付くこと、それを回復するための思想や活動にふれることは、この社会に暮らす全ての人々がより良く生きるために自ら行動を起こすための力を与えるものだと考えます。

以上、2024 年度のボラセンの多様な活動のなかの二つを取り出しました。

スタッフでボラセンを振り返ると、活動をダイナミックに展開するというよりは、忘れられがちな問題にも目を向け、学生の自発性を待ちながら、丁寧に支援を行っていくのが、明学ボラセンの特色なのではという話をしています。このことは、上記二つの活動においても現れているように感じます。学生の自発性を待つなかで、今年度はいつでもボランティアチャレンジを活用する、学生のプロジェクトがこれまでで最も多くの件数に上りました。

一方で、ボラセンの活動が明学内部においても、一部の学生や教職員のみには届いておらず、多くの関係者にとって「自分とは関係のないもの」という認識を持っているという点も、反省点として指摘されています。ボラセンの基本方針にも、「あらゆる職業、研究・学習、日常生活の中にボランティア・スピリッツは存在している」と示していますが、そのことの意味を深め、そして多くの人たちにとってボランティア・スピリッツをもとにして行う活動の後ろ盾になる組織となることが、2025 年度のボラセンの目指すべきものだと考えます。

本報告書はボラセンの「今」をお伝えし、忌憚ないご意見をいただきながら、この時代にボラセンが果たすべき役割を考え、そして実行するための手掛かりにできればと考えています。どうぞよろしく申し上げます。

# I. 特 集



## I. 特集

### 1. レインボーフェス

6月は、「プライド月間」として、世界各地でLGBTQの人権に関する啓発活動が盛んにおこなわれている。

これに合わせ、ボランティアセンターでも、2024年度に初めて「明治学院大学レインボーフェス」(以下、フェス)を開催した。



明治学院大学では、SOGIE(性的指向・性別アイデンティティ・性別表現)のマイノリティ性は、まだ支援の問題としてしか扱われていない。しかし、多くの大学のSOGIE/LGBTQに関する宣言に記されているように、SOGIEは、そのありように関わらず全ての学生や教職員が(すなわちLGBTQの学生や教職員も)公正に扱われるべき問題である。支援はそのための合理的配慮の、とても重要ではあるが、あくまで一部である。

フェスの最後に開催したシンポジウムでは、2016-17年に、教員や相談員職員、当事者学生によって働きかけがおこなわれた「SOGI(性的指向・性自認)」に関連する学生支援体制整備を振り返り、人権問題としてLGBTQの学生や教職員を公正に扱う意識への転換の必要性が確認された。その中で、ある学生から、学内でLGBTQに対する差別的な発言を耳にすることがあることに言及しながら、「先生方は何をしているのか」という問いが投げかけられる場面があった。この問いは、職員も含めた大学全体に向けられたものとして受け止める必要があるだろう。シンポジウム後のLGBTQの卒業生との交流会では、残った学生や職員がリラックスした様子で交流し、終了時間が過ぎても名残惜しそうに話していたことが印象的だった。参加した卒業生4人からは、このイベントが明学で開催されたことの喜びとともに、在学中にあったらどんなに良かったかという声も聞かれた。

フェスのオープニングイベントとなったボランティア・カフェ(ボラカフェ)は、授業と連携していない企画としては普段のボラカフェより多い16名が参加し、このテーマへの関心の高さがうかがえた。ボラカフェでは、皆の前で自ら性的マイノリティであることを表明しながら質問する学生もいた。また、資料展でも、自身がゲイであることを砂川に伝える学生がおり、安心して話せる空間があれば、LGBTQの学生の姿が見え、その声が聞こえてくることを痛感したフェスとなった。

フェスは、LGBTQの学生や教職員が公正に扱われる学校環境をめざすメッセージを発信することで、SOGIEに関する問題だけでなく、マイノリティ問題を含めた社会課題に取り組むボランティアセンターの姿勢を示し、多様な学生がアクセスしやすい場であることを印象づけた。さらに、カトリック新聞(2024.7.21)でも大きく取り上げられたことで、学外へもメッセージを届けられた。

また、大学図書館の協力、シンポジウムへの社会学部附属研究所の後援が得られたことで、この問題に大学全体で取り組んでいくイメージを作ることができた。そして、そのやりとりなど準備の過程で、この問題に関心を持つ教職員が少なくないことが感じられたことも大きな収穫であった。

実施内容

- 6月17日(月) 12:45~13:20  
ボランティア・カフェ「今さら聞きづらいLGBTQの基礎知識」(参加者数 16名)
  - 6月17日(月)~29日(土)  
レインボーブックフェア 協力・開催場所: 明治学院大学図書館  
横浜…SOGIE/LGBTQの入門書 / 白金…専門分野別おすすめ本
  - 6月17日(月)~28日(金)  
LGBTQ資料展(横浜/白金) @ボランティアセンター(横浜/白金)  
白金…LGBTQに関する様々な活動紹介 / 横浜…LGBTQテーマのマンガや絵本
  - 6月17日(月)~28日(金)  
LGBTQポスター展 @パレットゾーン2階「さん・サン」入口
  - 6月28日(金) 17:00~18:30  
シンポジウム「大学を変える、社会を変える~性別・性的指向をめぐって~」  
後援: 明治学院大学社会学部附属研究所  
@白金キャンパス本館10階 大会議室(参加者 63名)
- シンポジスト  
石原英樹(社会学部教授) / 松永美佐寿(総合支援室) / 渡邊咲良(社会学部4年)  
鈴木比呂(社会学部卒・セクシュアルマイノリティサークル「カラフル」元代表)  
砂川秀樹(進行: ボランティアセンター)

18:40~19:40

**交流会「LGBTQ卒業生と話そう」**

卒業生は4名が参加。またLGBTQ卒業生のバンドの演奏動画の上映もおこなった。



シンポジウムの様子

(ボランティアコーディネーター 砂川 秀樹)

## 2. 能登半島災害復興支援ボランティア（夏季・冬季）

令和6年能登半島地震に際し、学内での募金活動や学生・教職員の現地への渡航費等を助成する災害ボランティア助成金の交付、被災地での復興支援活動を行っている。また、夏季派遣（8月、9月）ではNPO法人パルシック、冬季派遣（2月）では公益財団法人共生地域創造財団の協力のもとボランティア活動を行った。

パルシックでの夏季活動では、被災した家屋の片付けや支援物資の配布活動のほか、能登の伝統文化である輪島塗の保存活動、仮設住宅での地域住民とのサロン活動や児童館での子どもたちとの交流活動などを行った。さまざまな地域の活動に参加させていただき、高齢化と過疎化が深刻化する能登の状況を知り、能登のことを考える「関係人口」を増やすことの重要性を確認した。それを受けた学生たちが能登から帰ってもさまざまな形で能登に関わり続けようと、活動報告会の企画や再び自分たちだけで能登に行くために自主的にグループを立ち上げるなど、活動を続けている。



共生地域創造財団での冬季活動では、支援物資の配布活動のほか、仮設住宅での地域住民と個別訪問、地震による隆起や輪島塗の仮設工場の視察などを行った。共生地域創造財団は東日本大震災を契機に発足された公益財団法人であるが、母体にホームレス支援全国ネットワークがあり、一人ひとりの生活に密接に関わる「伴走型支援」の理念のもと、被災地にて活動を行っている。仮設住宅ができて住む場所が確保されても、元々のコミュニティを離れ、新しい環境で孤独・孤立が問題となっている中、集会所での拠点型の居場所支援だけでなく、そこに来ることができない人たちへの個別訪問などにも随行した。“被災者”という言葉だけでは括ることができない、多様な背景や困難さを個々人が抱えていることを知ることができた。参加学生たちとの振り返りでも、「物資配布はただものを配っているだけではなく、そこに集う人たちにとってコミュニティになっている」、「食料配布やサロン活動に集える人たちだけではなく、もっと出会えていない人のことを考えたい」などさまざまな声が上がった。



## 2. 能登半島災害復興支援ボランティア（夏季・冬季）

夏季・冬季それぞれの活動について映像をまとめ、明治学院大学 HP の「ボランティア」ページに掲載している。



夏季・冬季の活動を通じて、1年経っても山積する（フェーズごとに変わる）地域の課題を見て、能登の復興をサポートするためには継続的な関わりが必要であることがわかった。ボランティアセンターでは、課内に能登プロジェクトチーム（能登 PT）を立ち上げ、継続的な活動をするための仕組みづくりを検討している。現地での活動の様子を映像でまとめ、学生たちを中心に学内外で報告会を行い、ボランティア実践と大学での学びと結びつけ、能登の復興のために自分たちに何ができるか、大学で何を学ぶかを考えながら活動を続ける。

### ●夏季派遣

活動期間：[第一クール]2024年8月5日（月）～8月8日（木）

[第二クール]2024年9月3日（火）～9月6日（金）

活動地域：能登町、輪島市、珠洲市

受入団体：NPO 法人パルシック（パルシック能登）

参加学生：（10名）1年生4名（社会、法、国際、心理）、2年生2名（社会、心理）、3年生3名（法、心理）、4年生1名（社会）

\* 学生アシスタント（1名）大学院1年生（社会学研究科）

### ●冬季派遣

活動期間：2025年2月12日（水）～2月16日（日）

活動地域：輪島市、能登町

受入団体：公益財団法人 共生地域創造財団

参加学生：（6名）：1年生1名（文）、2年生3名（心理、国際）、3年生2名（社会）

\* 学生アシスタント（1名）大学院1年生（社会学研究科）

### ●2024年度に開催した報告会

- ・学内活動報告会(2024/10/24)
- ・東洋大学で行われたパネルセッションにて活動報告(2024/11/17)
- ・横浜女学院にて出張報告会(2024/12/16)



（ボランティアコーディネーター 田中 悠輝）

### 3. Let's RAP ラップワークショップ

ラッパーであり詩人として活躍する FUNI (郭正勲) 氏を招き、白金キャンパス・アートホールにて、2024年12月17日(火)に「ラップワークショップ」を開催した。

<FUNI (郭正勲) 氏 プロフィール>

川崎南部の在日韓国、朝鮮人多住地域で育つ。

2002年ラップユニット「KP(KOREAN POWER,KOREANPRIDE)」を結成。

2004年NHKハンゲル講座ラップで講師。

磯部涼『ルポ川崎』/ノーナレ『川崎サウスサイドラップ』/

毎日新聞『にほんでいきる』

MOT アニュアル 2022にて高川和也の「そのリズムに乗せて」出演、磯部

涼の「ルポ川崎」にてインタビューや、漫画『ヤミ川崎〜もがきの境界線〜』のラップ監修、

社会運動など、音楽だけにとどまらないラップを通じた活動を精力的に続けている。



「マイノリティーもマジョリティーも自分を語ることができない社会は生きづらい。本当は誰にもいうつもりなかったんだけどというようなことがきっとあるはず。誰からもバカにされない空間で、リズムに乗せながら本音をアートで表現してみよう！」という FUNI 氏のメッセージとともに参加者募集し、学部生や院生、さらには教職員も含め、計18名が参加した。

当日は、まず冒頭で、各参加者が RAP に対してどのようなイメージを持っているかを共有した。そして、FUNI 氏によるクリスマススペシャル RAP ライブが行われ、FUNI 氏の魂がこもったパフォーマンスに一同魅せられた。その後、各参加者は自身の MC ネームを考え、さらに、実際に RAP を作成し、一人一人レコーディングを行った。

多くの参加者は、RAP に対して当初「一般人は近寄りづらい(プロのもの)」「怖い」「難しい」などのイメージを持っていたが、FUNI 氏による「自分の想いをストレートに表現すれば良いというメッセージ」や「このワークショップで聞いた内容は心の中にとどめ、持ち出さないという場の作り」から、RAP に対するハードルが下がり、安心した気持ちで RAP 作りにチャレンジしていた。一人一人レコーディングした音源は、ワークショップ後に FUNI 氏が編集し1つの RAP 作品としてまとめあげ、期間限定で参加者のみに共有した。



FUNI 氏からは、「みなさんが、あんなに想いを込めて RAP を歌ってくれると思わず、想像以上だった」とのコメントもあった。

“音楽として RAP を作る”というよりも“曲を BGM にして想いを言葉にする”というワークショップであり、お互いの想いを知ることによって参加者同士の距離感がグッと縮まり、相互理解にもつながっていた。ワークショップ終了後に参加者同士で話が弾み、名残惜しそうな様子が散見されたことも、まさにお互いの距離感が縮まったことを物語っていた。SNS 等でお互いの顔が見えないコミュニケーションが当たり前の昨今、顔が見える形で自分の想いを自身の表現力で表していく機会は貴重であり大切な時間であると感じられるワークショップであった。

(職員 熊澤 瑞)



## II. 2024 年度活動報告



## II. 2024 年度活動報告

## 1. 2024 年度ボランティアセンター行事一覧

月	主な行事・イベント	通年プログラムと活動内容	授業 協力
4 月	ボランティアセンターガイダンス開催 (3 回) 1 Day for Others 実施 (2 回) いつでもボランティアチャレンジ受付 (採用 2 件、 保留 1 件)	白金 PJ:ホッププロジェクトスタート (TAKANAWA HOP WAY 参加) <u>校舎別 PJ (以下白金 PJ,横浜 PJ)</u>	3 回
5 月	1 Day for Others 実施 (13 回) ボランティア・カフェ:①開催 戸塚まつり 第 1 回ボランティアセンター運営委員会	ボランティア・サティフィケイト・プ ログラム:ガイダンス、インテグ レーション講座開催 白金 PJ:ホッププロジェクト (TAKANAWA HOP WAY 参加) 横浜 PJ:畑やろうじゃないか (開始/水 やり)	2 回
6 月	1 Day for Others 実施 (21 回) ボランティアファンド学生チャレンジ 2023 中間 報告会開催 いつでもボランティアチャレンジ受付 (採用 2 件、 不採用 1 件) 災害ボランティア活動助成金 (採用 1 件) ボランティア・カフェ:②③開催 レインボーフェス開催 (ボラカフェ、ブックフェ ア、シンポジウム、展示)	ボランティア・サティフィケイト・プ ログラム:交流会開催、追加インテグ レーション講座開催 白金 PJ:ホッププロジェクト (ラベル デザイン勉強会、ラベルデ ザイン案作成、TAKANAWA HOP WAY 参加) 横浜 PJ:畑やろうじゃないか (調理大 会/水やり)	2 回
7 月	1 Day for Others 実施 (5 回) ボランティアファンド学生チャレンジ 2024 募集 開始 いつでもボランティアチャレンジ受付 (採用 1 件) ボランティア・カフェ:④⑤開催 ボランティアフェア (9 団体参加) 横浜校舎近隣自治会等役員との懇談会	白金 PJ:ホッププロジェクト (ラベル デザイン勉強会、ラベルデ ザイン案作成、ラベルデ ザイン案投票、TAKANAWA HOP WAY 参加、養蜂見学、ホッ プ収穫①) 横浜 PJ:畑やろうじゃないか (水やり)	4 回
8 月	いつでもボランティアチャレンジ受付 (採用 1 件) 災害ボランティア活動助成金活動 (採用 4 件) オープンキャンパス協力 (横浜/白金) 1 Day for Others 実施 (2 回) 国際実務体験プログラム:夏期プログラム実施 (IUC・1 名) 能登半島地震復興支援ボランティア夏季第 1 クール 実施)	白金 PJ:ホッププロジェクト (ラベル デザイン学内候補確定、一般投 票、養蜂見学、TAKANAWA HOP WAY 参加、ゲートウェイ工事現 場見学) 横浜 PJ:畑やろうじゃないか (水やり)	-
9 月	1 Day for Others 実施 (1 回) いつでもボランティアチャレンジ受付 (採用 3 件) 災害ボランティア活動助成金活動 (採用 1 件) サティフィケイト・プログラム:インテグレーション 講座追加対応 (3 回) /交流会	ボランティア・サティフィケイト・プ ログラム:追加募集、交流会 白金 PJ:ホッププロジェクト (ラベル デザイン決定、TAKANAWA HOP WAY 参加)	-

1. 2024 年度ボランティアセンター行事一覧

	<p>関東地区大学ボランティアセンターネットワーク研究会開催（横浜校舎） 能登半島地震復興支援ボランティア夏季第2クール実施</p>	<p>横浜 PJ:畑やろうじゃないか（水やり） たかなわ子どもコミュニティカレッジ単発イベント①</p>	
10月	<p>1 Day for Others 実施（14回） いつでもボランティアチャレンジ受付（採用3件） ボランティアファンド学生チャレンジ2024開始 ボランティア・カフェ：⑥開催 能登半島大雨災害募金活動 フェスティバルーン（港区立生涯学習センターイベント）参加</p>	<p>白金 PJ:ホッププロジェクト（収穫②、TAKANAWA HOP WAYへ参加） 横浜 PJ:畑やろうじゃないか（水やり）</p>	-
11月	<p>第5回ボランティア大賞開催 ボランティア・カフェ：⑦開催 第2回ボランティアセンター運営委員会赤十字献血協力（白金） 能登半島地震復興支援ボランティア：東洋大学での発表</p>	<p>ボランティア・サティフィケイト・プログラム：インテグレーション講座 白金 PJ:ホッププロジェクト（石鹸づくりWS） 横浜 PJ:畑やろうじゃないか（お昼ご飯交流会/水やり） たかなわ子どもコミュニティカレッジ連続講座①開催</p>	2回
12月	<p>1 Day for Others 実施（6回） いつでもボランティアチャレンジ受付（採用3件） ボランティア・カフェ：⑧開催 ラップワークショップ開催</p>	<p>ボランティア・サティフィケイト・プログラム：交流会 たかなわ子どもコミュニティカレッジ連続講座②③④開催</p>	1回
1月		<p>ボランティア・サティフィケイト・プログラム：最終報告書提出 白金 PJ:ホッププロジェクト（株分け、TAKANAWA HOP WAY参加） 横浜 PJ:畑やろうじゃないか（調理大会/水やり） たかなわ子どもコミュニティカレッジ連続講座⑤開催</p>	-
2月	<p>1 Day for Others 実施（13回） 第3回ボランティアセンター運営委員会国際実務体験プログラム：春期プログラム実施（ITTO・1名） 能登半島災害復興支援ボランティア冬季実施</p>	<p>白金 PJ:ホッププロジェクト（TAKANAWA HOP WAY参加） たかなわ子どもコミュニティカレッジ単発イベント②</p>	-
3月	<p>1 Day for Others 実施（1回） オープンキャンパス協力（横浜/白金）</p>	<p>ボランティア・サティフィケイト・プログラム：認証委員会、修了証授与式実施 白金 PJ:ホッププロジェクト（2025メンバー募集）</p>	-

## 2. 2024 年度来室者数

今年度の来室者数は、全体としては微減であった。個別に見ると、コロナ禍を越えた時期にもかかわらず、オンラインによる来室者数が増加しているが、これは各プログラムにおいて、オンラインの適切な活用が進み、オフライン（対面）との棲み分け（使い分け）が定着してきたことも大きいと思われる。

2024 年度は教員の授業協力や他部署との連携、留学生の参加呼びかけなど、力を入れてきたが、学生たちの自主グループによる打ち合わせや活動などでの使用がまだまだ少なく、個別の情報収集や相談などに比べ、基本方針にある「学生・教職員のボランティア活動支援機能」という側面をさらに強化していきたい。

2024 年度月別来室者数

月	2024 年度			＜参考＞2023 年度		
	(白金)	(横浜)	(オンライン)	(白金)	(横浜)	(オンライン)
4	101	212	15	92	313	26
5	93	341	13	75	357	12
6	101	260	19	125	415	8
7	85	331	16	94	401	19
8	12	11	34	13	12	20
9	25	103	5	44	121	20
10	103	389	25	83	369	10
11	61	316	19	80	207	12
12	54	326	13	64	172	4
1	34	138	17	34	138	6
2	19	84	32	19	84	21
3	37	21	43	37	21	33
計	725	2,532	251	760	2,610	191

単位：名

(プログラムディレクター 菅沼 彰宏)

### 3. ボランティア大賞

#### (1) 総括

ボランティア大賞とは、大学での「学び」と、社会課題とを「ボランティア実践」を通じて結びつけることにより、それぞれを深化させてきた学生を表彰し、その成果を学内外に広く発信することを目的とする賞奨励である。2020年度より開始し、今年度は5回目の開催となる。

第5回の実施概要は、以下の通りである。

応募資格	(1) 本学在学生(院生含む)による活動であり、明治学院大学入学後の活動を審査対象とする。 (2) 応募は個人によるものとし、科目等履修生および団体からの応募は除く。 (3) 教育理念(Do for Others)の具現化を図る活動であること。 (4) 応募者は一次審査を通過した場合、必ず二次審査で発表ができること。
応募期間	9月20日(金)～10月3日(木)
募集広報	7月下旬より大学ウェブサイト、ポータルサイト(ポートヘボン)、ポスター掲示を実施
審査	(1) 一次審査(書類審査) 10月9日(水)～10月21日(月) (2) 二次審査(プレゼンテーション審査) 11月9日(土) (3) 最終審査(合議審査) 11月9日(土)
審査結果	<p><b>【大賞】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タイで人身売買の危険から子どもたちを守る ～支援の実践と継続と拡大～ 丸山 智義(法学部グローバル法学科3年)</li> </ul> <p><b>【審査員特別賞】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クルドの子どもの将来のために～学習支援活動を通して～ 大栗 夢加(国際学部国際学科4年)</li> </ul> <p><b>【奨励賞】※発表順</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国際ボランティア活動への挑戦-国内外における教育・環境・再生支援ボランティアの実践- 関本 詩音(国際学部国際学科4年)</li> <li>・「生きる」を支えるボランティア 小室 閑(心理学部心理学科4年)</li> <li>・私が見たフィリピンの貧困問題 植木 聡美(文学部英文学科3年)*</li> </ul> <p>*受賞時の発表タイトルと報告書のタイトルは異なる</p>

今年度は応募が5件あり、全件が一次審査(書類審査)を通過し、二次審査(プレゼンテーション審査)および最終審査(合議審査)に進んだ。すべての応募に共通する点は、長い時間をかけてボランティア実践を行っていること、また活動のフェーズが変わるにつれて結びつく学びも変容しているという点である。そして、活動時に感じた喜びや苦悩は、二次審査(プレゼンテーション審査)の場面で多くの観覧者の心を動かし、特にボランティア実践を行う人を勇気づけるものであった。

なお、昨年度からの変更点としては、①賞の見直し(優秀賞の廃止)、②大学における学びの定義を、書籍・論文・記録映像等、授業以外の学びを表現できるよう応募用紙を変更 ③二次審査(プレゼンテーション審査)における発表者の持ち時間の変更(発表8分・質疑応答6分→発表10分・質疑応答5分)、④二次審査(プレゼンテーション審査)のハイブリッド実施、などが挙げられる。

特に昨年度(第4回)の実施では、ボランティア実践と特定の授業科目を対で結びつける学び

のかたちだけではなく、複数の授業科目が横断的・立体的に結びついたり、授業以外の様々な要素が学びとして作用していることを認識し、今年度（第5回）は、学生の学びを広義にとらえるというひとつの方向性が見えたことは大きな成果であった。

次年度（第6回）開催に向けては、より多くの学生に応募をしてもらうこと、またプレゼンテーションの観覧をしていただくことが課題である。特に観覧に関しては、本学の学生・教職員だけでなく学外の方を巻き込みながら、様々な立場から社会課題を感じ、考える場としていきたい。

（職員 菊池 範子）



## ◆タイで人身売買の危険から子どもたちを守る ～支援の実践と継続と拡大～

受賞	大賞
受賞者	法学部グローバル法学科3年・丸山 智義

## 1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は現在、タイ・パヤオ県にある「YMCA パヤオセンター」と交流・支援をする活動をしている。このセンターは人身売買や貧困、虐待などのリスクから子どもたちを保護するシェルターである。私は2019年に明治学院高校に入学し、聖書の言葉に出会い、それらに影響され、明治学院中高大連携「パヤオプロジェクト」に参加した。2020年に始まり、2021年まで継続して交流・支援は行われていたが、日本側の都合により2022年、私の本学への入学と同時にパヤオプロジェクトは廃止された。勝手な都合で交流・支援を止めてはならないと考えた私は、同年の夏に中高大連携1 Day for Othersを企画し、人身売買の問題の発信と同時に、この問題に興味のある学生を募った。その後2022年秋にこのイベントで出会った学生とともに学生団体「Be with Phayao」を設立し、現在「YMCA パヤオセンター」と交流・支援をする活動を実施している。

## 2. ボランティア実践の内容

活動を実施する上で、目的として1.センターへの継続的な支援と交流、2.タイの人身売買に関する日本国内での認知の拡大、の2点を掲げている。目的達成への具体的な実践として①パヤオセンターへの訪問、②パヤオクラフトの販売、③中高大連携ワークショップの開催、の以上3点を実施してきた。目的として①・②が目的1、②・③が目的2に結びつく。

## ①パヤオセンターへの訪問

私はこれまでに3度訪問をしてきた。訪問時は、センターで暮らす子どもたちと日本とタイの言語や料理、遊びなどの文化の交流、壁のペンキ塗りや下駄箱作りなどのセンターの修繕も行ってきた。また訪問のたびに、少数民族アカ族やモン族の村、ゴールドトライアングル経済特区、タイ最北端の町メーサイなど色々な場所に足を運んできた。時に人身売買の「出発点」となる村、「通過点」となる国境の町、「現場」となる経済特区、に足を運び、自分の目で見て、子どもたちの家族の心境や関係者の話を伺い、当事者の声を聞くことができた。また、訪問のたびに一部の子どもの支援不要となり、センターから離れる一方で、また保護を必要とする新しい子どもが入ってくるという入れ替わりを認識し、センターによる支援の必要性を改めて感じた。

## ②パヤオクラフトの販売

パヤオクラフトとは、少数民族の伝統的な刺繍をあしらったクラフトで、センターの子どもたちや家族、コミュニティの方々が作ったものである。これらを2023年と2024年の本学横浜キャンパスで開催された戸塚まつりで販売し、売り上げと募金合わせて74,533円をパヤオセンターに全額寄付することができた。2年連続で出店したことで、昨年度買ってくださった方が今年度も再度購入して下さったり、お声がけ頂いた。活動に興味をもって下さった方には、人身売買問題の周知も行き、発信の場としても活用している。

## ③中高大連携ワークショップの開催

人身売買問題の認知の拡大の実践として最も力を入れたのが、中高大連携のワークショップの開催である。団体設立前の「1 Day for Others」を含め3回実施してきた。特に、私がパヤオセンター滞在中にオンラインでパヤオセンターと日本を繋ぎ行った交流では、系列校の高校生と大学生、学院関係者（教職員、前学院長）合わせて10名ほどが参加して下さい、このイベントに参加した高校生が本学にその後入学し、入学後に私たちの団体に加入した。大変価値のあるイベントとなったと思う。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は法学部グローバル法学科に所属し、1年次から国際法や憲法を履修して、国内外の人権に関する

る規則を学んだ。2年次には、「国際人権法1」の授業を履修し、国際法の知識を基礎として、人権分野に特化して様々な人権条約の存在や主体、また条約下の委員会の役割、通報制度について知識を得た。実践では、机上では学べない新たな気づきを現場で得ることができた。例えば、法規制が不十分であったり、当事者が無国籍者で保障の対象でなかったりした。また、汚職による司法の一部の機能不全も実態として存在することを知った。このような気づきを自身の学びに結びつけ、NGOや市民による働きかけや役割などを学んだ。学びと実践を相互に補完している。

#### 4. 今後の課題、方向性

今後の課題として最も重要視しているのが、人身売買問題の認知の拡大である。その一環として現在検討しているのが、「パヤオミールプロジェクト」である。広く知られているタイ料理を学食で提供し、「食」を切り口としてより多くの方々に人身売買問題をポスターや口頭で周知し、その中で問題に関心をもって下さった方にセンターとの支援・交流に携わって頂き、活動を継続したいと考えている。この活動を私たちの代で留めないよう継続した活動となるように努めていきたい。

また、現在、国際法ゼミに所属しているため、国籍を問わずグローバル社会における様々な人権問題に焦点を当てて学び、実践に活かしていきたいと考えている。

#### 5. 私にとっての Do for Others とボランティア

ボランティアとは、声をあげにくい立場、社会の発展の陰に置かれた人たちに目をむけ、自発的にアクションを起こすことで、支援の方法に正解はないと私は考える。今回紹介した、人身売買から子どもたちを守るこの活動を行って来て、周りからポジティブな発言をいただいたこともある一方、ネガティブな発言を受けたこともある。そんな中でも私がいつも心においている言葉がある。「ボランティアって“チリ積も”」誰も聞いたことがないだろう。決して有名な言葉ではない、私が作った言葉だからだ。人身売買という国際社会が抱える大きな課題に対して、一大学生ができることは限られているかもしれない。しかし、そのできることを実践し、自分が出会った一人、また一人を助けること、その積み重ねが大きな課題の解決に一步、また一步、と近づくことを確信している。

## ◆クルドの子どもの将来のために～学習支援活動を通して～

受賞	審査員特別賞
受賞者	国際学部国際学科4年・大栗 夢加

## 1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は幼いころから、地元のショッピングモールで見かけるクルド人の存在に関心があった。埼玉県川口市住民であれば、クルド人は身近な存在である。しかしその当時、学校にはクルドルーツと思われる生徒はあまりいなかった。そのため私にとって彼らは“近くて遠い”存在だった。

国際学科に入り、多文化共生について学ぶようになると、私は外国ルーツを持つ子どもの教育問題に関心を持つようになった。講義では横浜市南区に拠点を置く「わたぼうし教室」での学習支援実習を通して外国ルーツの子どものと直接出会い、彼らが言語・文化の壁によって抱える学校生活でのストレスを目の当たりにした。講義履修後も継続的に活動を行う中で、私はふと地元のクルドの人々を思い出し、クルドの子どもにも学習支援をしたいと考えるようになった。クルド人を対象とした支援活動をいくつかサーチしたのち、子どもに特化した支援がない点に着目し、「わたぼうし教室さいたま」として新たな学習支援活動を始めることに決めた。

## 2. ボランティア実践の内容

わたぼうし教室の活動方針は言語や文化の壁によって相談相手を失いがちな外国ルーツの子どもの相談場所づくりである。主な支援内容は母国語及び優しい日本語を用いた宿題等のサポートと日本語講座であり、その他七夕等の日本文化を題材にした文化的学習支援も実施している。また高校や大学の入試を控えた学生には受験勉強のサポートに加え、学校説明会への付き添いなどの進学サポートも行っている。さらに子どもたちが悩みを打ち明けやすい関係性を築くため、年齢が近い大学生のスタッフが中心に活動している点も教室の特徴であり、30分程度の自由時間でゲームを通じたスタッフとのかかわりを積極的に持つようにしている。横浜の活動は公共施設を使用した教室型運営である一方、埼玉では家庭訪問での学習支援を行っている。ここでは横浜の教室と同様の学習支援を行う傍ら、市民手続の支援等、家庭の生活支援も実施している。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私にとって大学での学びは実践に向けた原動力であった。「多文化共生各論 1・2」や「グローバルシチズンシップ入門 2」といった講義を通して私は外国ルーツを持つ子どもやクルドの方がどのようにして日本へ来ることになり、どのように生活しているのかを事前知識として身に付けることができた。そこで言語化されていた課題意識をもとに、支援活動で学んだ課題に直接触れ合い、解決に取り組むという流れが、私にとっての社会課題へのアプローチであった。

また交換留学先での講義実習でボランティアプロジェクトの立ち上げを経験したことで、支援活動の基盤を維持することの難しさにも直面した。これを契機に帰国後は子どもを直接的に支援するスタッフとしての活動に限らず、活動資金や人員を集めるための活動にも意欲的に参加している。

さらに持続的な活動に向けて取り組む中で得た気づきが、問題意識を言語化することの重要性である。自身は課題を目の当たりに直感的に支援をしてきたことであっても、その活動に他の誰かを巻き込もうとするときは、同じ活動目的をもって動くためにまず自身の問題意識を言語化して共有する必要がある。先人たちが同様の問題意識をいかに言語化し、共有してきたかを再度座学に戻って学び、また実践に移すことを今後も繰り返していくと思う。

## 4. 今後の課題、方向性

これらの活動を通して私が感じた課題意識は、支援者の増員と支援分野に対する支援者の学習機会の2点である。まず支援対象の子どもが増えつつある現状に対し、満員となる支援教室は多く見受けられ、支援が不足している。原因としてそもそもこの社会課題が広く知られていないことが考えられ

る。また支援対象者たちの現状や彼らを支える制度に関して、支援者たちも学びを深める必要もある。特に入試のような場合はビザや在日期間によって適用制度が異なるため、手続き面での支援も複数存在する。またクルドの子どものように外国ルーツの子どもとしての課題と難民申請者としての課題が複雑に絡みあい、多角的な支援が必要とされる場合もある。一方でこれらの仕組みや問題の複雑性を把握している支援者は限られており、より多くの子どもを支援していくことを考えると、知識が整理された資料の共有が必要であると考えられる。支援初心者の人にも分かりやすい形で資料を作成し、SNS やホームページに掲載することで広範囲に知識を共有できると考える。さらに複数の活動を並行して行う事が多い大学生のスタッフを中心に活動するわたぼうし教室において、これらの活動をボランティアとして行うことが、活動の持続可能性を問う課題であるという現状もある。この点に関して、子どもの学習支援を維持していく活動方式についても引き続き模索していきたい。

### 5. 私にとっての Do for Others

他者の悩みを自分事として捉え、ともに取り組むことであると考え。私のボランティア活動においては、社会課題を自分事として捉え、支援現場で直面した課題の解決に向け、最善を尽くすことであった。外国ルーツを持つ子どもについて講義を通して学んだ時点では知識として自分自身に身についた段階であった。そこから課題の当事者に思いを馳せ、継続的な活動参加や埼玉での活動拡大を通して Do for Others を実現することができたと思う。今後は現場の様子を知る者として、市民への課題意識の共有にも力を入れていき、Do for Others の精神を伝播させることができる人間に成長したい。

## ◆国際ボランティア活動への挑戦-国内外における教育・環境・再生支援ボランティアの実践-

受賞	奨励賞
受賞者	国際学部国際学科4年・関本 詩音

## 1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は幼少期から両親の影響で海外ボランティアに興味を持っていた。両親が寄付活動をしている姿を見て自然と国際支援に関心を持つようになり、高校時代には地域の代表として海外ボランティア活動に参加することが決まった。しかし、新型コロナウイルスの影響で渡航が中止となってしまう、大きな心残りになった。その後も海外活動への関心を持ち続けていたが、渡航の目処が立たない中、国内でできるボランティア活動を探すことを決意した。

2021年に明治学院大学に入学し、授業を通じて外国にルーツを持つ子どもたちが直面する学習や進学の課題を知った。ボランティアセンターを訪れた際、外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援ボランティアを知り、活動を始めることにした。大学1年次から参加し、国内での活動から自分にできる支援を始めることにした。

## 2. ボランティア実践の内容

私は大学生活の中で主に5つのボランティア活動に取り組んだ。

1つ目は、長期的に行った国内での学習支援ボランティアである。中国にルーツを持つ小学生を対象に、週1回の対面授業で約1年間にわたり学習をサポートした。

残りの4つは短期の海外ボランティア活動で、それぞれ夏季や冬季の休暇を活用して参加した。

カンボジアでは、孤児院の子どもたちに対して英語とアートを教える活動を行った。日本でアルバイトとして英語講師とアート講師をしていたため、自分の得意分野を生かして子どもたちが楽しく学べる環境作りを心がけた。

ポーランドでは、薬物依存症患者の社会復帰を支援するボランティアに参加した。療養施設で患者たちと共同生活を送り、アートを活用してコミュニケーションを図った。最終日には患者それぞれの個性に合わせたイラスト入りのメッセージカードを手作りでプレゼントし、涙を流して喜んでくれる姿に感動した。

アイスランドでは、環境保護ボランティアとして自然保護活動に取り組んだ。ゴミ拾いやゴミのリメイク活動などを行い、自然環境の大切さを学ぶ機会となった。

モンゴルでは、孤児院の子どもたちを対象に英語教育ボランティアを行い、彼らが将来の可能性を広げられるようサポートした。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私はボランティア活動に関連する授業として、「多文化共生入門」、「グローバル社会と市民活動」、「ボランティア学」などの授業を履修した。これらの授業では、ボランティアの定義から移民や外国籍の人々が直面する社会的課題、多文化共生の意義について学んだ。授業で得た知識を実際のボランティア活動に活かすことで、活動の意義や取り組み方を深く考えるようになった。

また、授業を通じて学んだ「多文化共生」という概念が、実際のボランティア活動でどのように実践できるのかを考える機会を得た。例えば、異なる文化背景や言語、価値観を持つ人々とのコミュニケーションでは、言葉だけでなく、相手の立場や背景を尊重しながら関わるのが大切だと実感した。このような学びを活動に反映させることで、より相手の気持ちに寄り添った支援ができるよう努力した。

全体の活動を通じて気付いたのは、彼らの抱える課題が言語や学習のみに限らない点である。例えば、異文化適応の困難や家庭環境の違いによる心理的な負担など、彼らが直面する多様な背景を理解し、その上で支援を提供する必要性を強く感じた。このような経験を積む中で、多文化共生の実践は単なる表面的な理解や対話ではなく、深い共感と相手の全体像を捉える視点を持つことが重要だと学んだ。

この経験を通じて、理論と実践の間にあるギャップを埋めることの重要性を感じた。授業で学んだ知識を単なる理論として終わらせるのではなく、実際に行動に移すことで、自らの理解がより深まるとともに、支援する側と支援される側の関係性においても信頼関係が築かれていくことを実感した。

#### 4. 今後の課題、方向性

これまで私は、自分自身がボランティア活動に参加することを主な目標として取り組んできた。しかし、活動を通じて感じたのは、ボランティア活動の重要性をもっと多くの人に伝え、活動の輪を広げる必要性だ。

今後は、自分の経験を共有することで国内外のボランティア活動に関心を持つ人を増やし、彼らが参加するきっかけを作りたいと考えている。さらに、ボランティア活動を一時的な体験で終わらせるのではなく、持続可能な形での活動につなげる方法を模索していきたいと考えている。

#### 5. 私にとっての Do for Others

ボランティア活動を始めた当初、私は「無償で何かを与えること」がボランティアだと考えていた。しかし、実際に活動を進める中で、私の方がボランティアに関わった人たちから多くの学びや気づきを得ることができた気がする。

ポーランドでの患者との交流や、カンボジアやモンゴルの孤児院の子どもたちとの対話を通じて、「ボランティアは一方通行ではなく、相互の関係性で成り立つもの」であると実感した。この経験を通じて、ボランティア活動とは「相手と共に成長し、学び合う機会」であるという考えに至った。

私にとって「Do for Others」とは、自分が得た学びや経験を社会に還元し、他者とともに未来を築く行動を指す。今後もこの信念を大切にしながら、社会に貢献する活動を続けていきたい。

## ◆「生きる」を支えるボランティア

受賞	奨励賞
受賞者	心理学部心理学科4年・小室 閑

## 1. ボランティア活動に至るまでの経緯

大学入学時、コロナ禍で授業も全面オンラインかつ初めての一人暮らしが始まった。その中で、せっかく籍を置いているのだから大学に居場所を作りたい、ボランティア活動が盛んな大学で何かをしてみたい、コロナ禍を言い訳にしたくないという気持ちから、横浜のボランティアセンターに通うようになった。

大した用がなくても行き、職員の方々と他愛もない会話をしながらも、1 Day for Othersなどの活動とにかく参加した。そして、1年の10月に心理学と関係するのではないかと一般社団法人 Thoughtful Gift の活動を紹介していただいた。

その年の3月に設立された団体ということで、事業開始時から関われるということ、オンラインで活動できるということ、今まで行われていない新しい活動というところに惹かれて参加するようになった。

## 2. ボランティア実践の内容

この活動では、物を通じて気持ちを届けたいという想いのもと、精神科病院へ入院することになった人のうち、さまざまな事情で入院生活に必要なものが揃えられずにいる人に向けて、必要な物資を無償で提供している。

私は、人間の心理がテーマに入っている外部講演会や講座に足を運び、そこで得た気づきや感想をその都度、リアクションペーパーのように登壇者に書いて送った。その結果、団体初の自主企画イベントにゲストとして登壇していただけることになった。

また、手書きのメッセージカードの封入と、大学でのボランティア・カフェの実施を他のボランティアメンバーと一緒に発案し、団体全体で形にした。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

まず、上記でも挙げたゲスト外部講演会への参加とゲストへの働きかけが挙げられる。

精神疾患のことを中心に、学科での学びが基本的な知識となり、Thoughtful Gift での活動への理解を深めることに繋がったほか、知識理解を積み重ねていくことによって、人間の心理が関係しているような社会の課題をキャッチする力がついたと考えている。そして、学ぶことへの好奇心と外に出向く行動力が合わさったことによって、団体へと還元することができたのではないかと考える。

そして、学びと実践は自分自身をも支えてくれたと考えている。

私は大学2・3年生時に心の健康状態を崩し、授業への参加が精一杯で、ほとんど活動に携われないう時期があった。その時に、団体の代表理事やボランティアセンターの方々が連絡をくださったり、声をかけてくださったりしたことによって、戻る場所がある安心感を得ることができた。また、入院の有無など形は異なるが、「あなたの回復をゆっくり待っています」という団体の想いが直接私に向けられたことによって、心強さを感じるとともに活動の意義を再認識することができた。そして、コミュニティ心理学の授業にて、ボランティアというコミュニティと自分との関わりについて考えてみたり、公認心理師の職責を学ぶ授業にて、支援以前に、自分はどのような人間なのかと自分自身と向き合い、捉えなおしたりする時間を作ることができた。

このように、ボランティア活動における人々との関わりという精神的な部分と、学びという理論的な部分の両方があったことによって、より強く自分という存在が支えられて、前に進むことができたと考えている。

## 4. 今後の課題、方向性

卒業後は、今の頻度で関わることはできなくなってしまうが、ボランティアメンバーの募集や、団体の活動への参加など働きながら自分のペースで続けていきたいと考えている。

また、福祉の現場で働くことから、身体を動かすことで得られる経験と、学習を通して知識を身につける行動の両方を重視し、学び続けていきたいと考えている。

そして、自分自身という存在、ケアと環境による支えを感じながら、今後も様々なことに興味関心を持ち、前向きに取り組んでいきたい。

## 5. 私にとっての Do for Others

本学の教育理念は「Do for Others (他者への貢献)」であるが、聖書では「what you want them to do for you.」と続く。この後半部分を含めた全文の直訳は「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたも人にしなさい」である。

ボランティア活動においてこの全文は、単にしてほしいかほしくないかということではなく、この隠された後半部分に「私」という主体の存在が表現されているのではないかと考えている。

振り返ると、最初のころは、とにかく他者へ貢献することだけを考えて活動していたように思う。その結果、私は「私」をおろそかにしてしまったことによって、心身の健康を長期にわたって崩してしまった。

これに関して、他者への貢献も、誰かのためにやっている一方で、「私」とその「私」を支えてくれる環境がそこにはあるということ、当時は見落としてしまっていたからだと考える。この経験から、ボランティア活動という他者への貢献の場において、「私」という存在についてもっと気にする必要があるのではないかと考えるようになった。

これは、当たり前すぎて意識しないようなことかもしれないが、私はこの4年間にボランティア実践と大学での学習の両方があったからこそ、気づくことができたのだと思う。また、当時は目の前のことを一生懸命やっている状態だったため、ボランティアと学びの関係性、私への影響について気づくことができたのは、4年生になって、このボランティア大賞で振り返る機会を得たからだと考えている。

### ◆異文化コミュニケーションを生かした海外ボランティアの実践～フィリピンのセブ島での困窮者支援活動～

受賞	奨励賞
受賞者	文学部英文学科3年・植木 聡美

#### 1. ボランティア活動に至るまでの経緯

元から国際協力への関心があったためである。きっかけは2つある。1つ目は、中学時代のアメリカ、高校時代のオーストラリアへの留学経験である。2つ目は、中学生から日々学内で行っていた献金活動である。2つの活動を通じて現地を訪れ、現地の方々と深く交流したいという思いがあった。高校時代はコロナ禍の影響で渡航ができなかった悔しさから、大学2年生の夏休みを利用し海外でボランティアを行うことを決めた。

#### 2. ボランティア実践の内容と気づいたこと

現地ではゴミ山や海上スラム、2箇所の山村地域、都市のスラム街、子どもの障がい者施設、そしてSOS子どもの村という孤児院やマザーテレサの高齢者施設の計8箇所に赴いた。ゴミ山や海上スラム、2箇所の山村地域、都市のスラム街での主な活動として、子ども達と関わる活動と現地の方々の悩みに寄り添う在宅訪問の2つを行った。1つ目の子ども達と関わる活動については、パスタを作って提供したりスナックやジュースを提供したりする食糧支援と、事前に作ってきた折り紙のメダルを渡したりクレヨンで塗り絵をしたりして子ども達と交流する活動をした。その他にも現地独自のチキンダンスを披露してくれたお礼に、日本独自のマルマルモリモリのダンスを披露した。これは現地でバディの方に突然頼まれ、咄嗟に思いついたダンスだった。小学2年生の時に壇上で全校生徒の前で披露したあの頃を思い出しながら皆を先導し踊った結果、現地の方々と笑顔にすることができた。2つ目は現地の方々の悩みに寄り添う在宅訪問である。ゴミ山や海上スラム、2箇所の山村地域や都市のスラム街等、現地の方々に共通する悩みは、経済的理由によるものだった。経済的理由により学校に行けないことや毎日体に良い食事をするのが難しいことをお伺いした。しかし現地の方々にとって最も辛いことが、家から目的地までの距離が遠い分、交通費が高くなってしまふことであった。住む場所によってアクセス等の利便性が大きく異なり、時間的・金銭的負担が生まれてしまうなど距離が経済的格差を生んでしまう。そこでネット環境で距離の格差を無くすことを考えた。実際に現地で携帯を所持していた子ども達が数人いたことから、e-learningを通じて学習できたり、医師とチャットができるようになれば、このような格差は少しずつ改善されるのではないかと考えた。また、子どもの障がい者施設、SOS子どもの村という孤児院、マザーテレサという高齢者施設での主な活動として、子どものオムツの取り替え作業や折り紙で鶴を教えたりした。これらの地域では在宅訪問はなく、主に現地の方々と触れ合う活動をした。子ども達とおもちゃやフィギュア等の遊具で遊んだり、高齢者の方々に「世界に一つだけの花」という日本の歌を披露した。関わる全てのボランティア活動を通じて、現地の方々と仲良くなれたことや施設の方々に礼を言われたことがとても嬉しかった。

#### 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

子ども達と接する上で言語の壁にぶつかった。現地には英語が話せる方が少なく、バディの方を通してコミュニケーションを取っていた。バディの方々の英語は現地特有の英語であり、ここでは、英文学科ならではの「英語学特講 A」で学んだ国毎に英語の発音やイントネーションが異なることを実感した。また、子ども達と話そうとした際は、話を通じず、上手く接することができなかった。そこで、大学で学んだ「異文化理解1」のコミュニケーションスタイルの違いを意識して実践した。言葉に重きを置く「ローコンテキスト」と言葉以外に重きを置く「ハイコンテキスト」の中で、「ハイコンテキスト」を用いた。言葉が通じない中でも、オープンマインドの姿勢で笑顔やジェスチャー、サークル活動で得た手話等を通して、ハイコンテキストを使ってコミュニケーションができたと考える。繰り返し行うことでお互いの以心伝心につながり、忖度や阿吽の呼吸等のハイコンテキストを用いた会話ができたと

思う。最初はあまり話さなかった子も最後の方には私に話しかけに来てくれて、帰るまで手を離さなかったことがあった。

#### 4. 今後の課題、方向性

この活動で培った異文化コミュニケーションを今後のボランティア活動にも活かしていきたいと考えている。当初は英語が通じない等の言語の壁を感じながら子供達と接することに私自身慣れておらず、現地の方々と仲良くなれなかった。しかし授業で学んだ「ハイコンテキスト」と手話やジェスチャー等を使いこなすことで仲良くなれた。この経験を元にボランティア経験を積み、異文化コミュニケーションの精度を高めていきたいと考えている。今回の活動では、フィリピンでハイコンテキストを用いたが、今後ボランティアをする際には、言葉以外を重視する「ハイコンテキスト」がふさわしいのか、言葉を重視する「ローコンテキスト」がふさわしいのかをよく分析してからボランティア活動におけるコミュニケーションに取り組みたい。次回また海外ボランティアへ行く際には、以前よりも異文化コミュニケーションの精度を高めた上で、ボランティア活動をしたいと考えている。

#### 5. 私にとっての Do for Others

私にとっての「Do for Others」は「お互いに幸せを共有できること」だ。子ども達と関わる中で言語の壁にぶつかったり、トイレ事情や交通整備が日本と異なる環境でのボランティアはうまくいかない部分もあった。しかし、行く度に見た子ども達の笑顔に励まされ、私自身も勇気付けられた。ボランティアには、他者を幸せにすると同時に自身も幸せになれるという「Give and Take」を孕んでいると学んだ。

## 4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム

### (1) 概要

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム（以下、サティフィケートあるいはプログラム）は、ボランティア実践と大学での学びを融合させた明治学院大学独自のプログラムである。全学の正課教育と連携した取り組みであることから、明治学院大学教育連携という言葉が冠されている。

このプログラムでは、学生が、実践の意味や人の想いを読み取る「観察する力」、自身の考えを言語化し発信する「デザインする力」、専門性と現場の経験を深める「理解する力」を身につけることを目指している。そして、それらの力によって、本学の教育理念“Do for Others”を具現化し、共生社会を実現（他者との共生を意識し守ること）していく学生を育成することが最終的な目標である。

このプログラムを修了するには、入学年度より5年以内に、以下の3つの要件を充たす必要がある。①ボランティア実践（入学後135時間以上）、②インテグレーション講座（全4回）の受講、③ボランティア実践と結びつけた科目の単位修得（3科目以上）である。また、活動をおこなった場合は毎月、おこなわなくても最低3か月に一回、報告書を提出し、コーディネーターのフィードバックを受ける。要件を充たしたのち、最終報告書を提出し、運営委員会、認証委員会での承認を経ることで修了証（サティフィケート）が与えられる。

### (2) 総括

2024年度の修了者は、2022年度登録生（3年目生）3名、2021年度登録生（4年目生）1名、あわせて4名だった。2022年度登録生は、4名がプログラムを継続していたが、うち1名は実践時間がまだ135時間に達していなかったため翌年度（4年目）に持ち越した。2021年度登録生は、4年目に入っていた2名とも、2023年度で3つの要件を充たしていたが、それぞれの事情により最終報告書だけが持ち越しとなっていた。最終的に提出に至らなかった1名のケースでは、前年度のやりとりの中で、最終報告書の提出期限が厳密であることについての情報提供が十分でなかったことを痛感した。そのため、本年度から、第1回インテグレーション講座で最終報告書は公的要素が高いこと、よって期限が厳密であることを強調するようになっている。今後も、修了に至るプロセスについては確認を繰り返しながら進めていく予定である。

また本年度、課題として感じられたのは、登録者の継続の問題である。ボランティア実践が135時間（2025年度から100時間）を超えるためには、継続的に参加できる活動を見つけることが鍵となるが、それが実現せずにプログラムの登録を解除する学生が少なくない。さらに、このプログラムの目的として掲げている力を身につけるために重要な毎月の（最低3か月に一回の）報告書の提出は、その意義を感じられないと提出しなくなり、次第にプログラムから遠のいていくことにつながる。モチベーションを高める伴走の方法、できるだけ書きやすい報告書フォーマットの開発、書くという行為が苦手な学生の報告と振り返りの代替方法の検討が、コーディネーターの大きな課題となっている。

（ボランティアコーディネーター 砂川 秀樹）

### (3) 2024年度修了生と最終報告書タイトル

心理学部心理学科 4年	井上 和奏	手話でつながるボランティア
文学部英文学科 3年	植木 聡美	異文化コミュニケーションを生かした海外ボランティアの実践 ～フィリピンのセブ島での困窮者支援活動～

社会学部社会福祉学科 3年	渡邊 葵衣	「Do for “Others”」から得られた「ボランティア」についての見解
心理学部心理学科 3年	藤堂 夏希	長期ボランティアだから気づいたこと — 就労支援施設での活動と障害者心理学の学びを通して—

\* 植木のサティフィケート・プログラム最終報告書に関しては、「明治学院大学ボランティア大賞」の発表報告と重なることから、この章での掲載は省略している。

#### (4) プログラム登録者数

下図は、11月に開催される第2・3・4回インテグレーション講座開催時点での登録者数である。1年目生の( )内の数は、その年のスタート時の登録者数だが、図1と図2を見比べてわかるように、本年度は前年度の40名から60名へと大幅に増加している。これは、新入生に配布する資料として、ボランティアセンター全体の案内からサティフィケート・プログラムのチラシを独立して作成したことによる効果と思われる。また、1年目生の、スタート時からこのインテグレーション開催時までの残留率も、前年度72.5%から93.3%に上がっている。ただし、この残留率は、インテグレーション講座の出欠表明者の数であり、欠席を表明して受講を来年に持ち越す学生も少なくなかった。例年、2年目に入ると継続者が大幅に減ることから、今後のサポートが重要である。

(図1) 2024年度プログラム登録者数 (2024年11月9日時点)

	学部							合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	情報数理	
2024年度登録 (1年目生)	3	9	13	9	12	6	4	56
( )内はスタート時の登録者数	(5)	(10)	(14)	(9)	(12)	(6)	(4)	(60)
2023年度登録 (2年目生)			3	2	3	4		12
2022年度登録 (3年目生)	2		1			1		4
2021年度登録 (4年目生)						2		2
合計	5	9	17	11	15	13	4	74

(図2) 2023年度プログラム登録者数 (2023年11月11日時点)

	学部							合計
	文	経済	社会	法	国際	心理		
2023年度登録 (1年目生)	2	4	7	4	5	7		29
( )内はスタート時の登録者数	(2)	(4)	(12)	(4)	(9)	(9)		(40)
2022年度登録 (2年目生)	3	2	6	1	0	1		13
2021年度登録 (3年目生)	0	1	8	0	2	5		16
2020年度登録 (4年目生)					1			1
合計	5	7	21	5	8	13		59

2023年度の修了者…15名 (2021年度登録生14名 2020年度登録生1名)

## (5) 2024 年度の流れ

広 報	
3月	大学から新入生に郵送される配付物にサティフィケートについての簡単な説明とガイダンスの日程を記したチラシを同封した。前年度は、ボランティアセンターのチラシの中に情報が掲載されていたが、本年度は独立したチラシを作成した。
説明会	
5月7日(水)～ 9日(金)	サティフィケートについての簡単な説明と、第1回インテグレーション講座の案内。コラボレーションスペースで昼休みの後半の時間帯(13:00～13:25)に開催。「昼食をとりながらの参加可」とした。
ハンドブック改訂	
5月	第1回インテグレーション講座時に配布するハンドブックを改訂した。2022年度まで、内容は、サティフィケートの案内のみだったが、2023年度にボランティア活動を探す方法、ボランティアセンターの活動奨励金などの資金獲得先の提示などを加え、内容を充実させた。本年度は、プログラム概要図をわかりやすく修正し、イラストも増やしデザインを変え、読みやすく改訂した。
第1回インテグレーション講座(春学期)	
サティフィケート・プログラム修了要件の一つに、インテグレーション講座4回の受講がある。この講座はその初回である。受講後に登録書を提出し登録完了となる。本年度は受講した学生60名中、1名だけ登録をしなかった。	
5月27日(月)5限 28日(火)5限 29日(水)3限  日程の合わない学生 は個別対応	<p>【内容】</p> <p>①講義「ボランティア実践から学ぶとは？」(センター長 猪瀬 浩平) *動画 ②ボランティア入門(改訂した『ハンドブック』に沿って説明) ③学生同士の交流 「あなたが気になる社会課題は？」 ④質疑応答</p> <p>登録学生…51名(文学部4 経済学部8 社会学部12 法学部8 国際学部12 心理学部6 情報数理学部1)</p>
第1回インテグレーション講座(秋学期)	
2022年度まで登録機会となる第1回インテグレーション講座は春学期のみの開催だったが、2023年度から秋学期にも設けている。	
9月26日(月)4限 27日(火)5限 30日(水)5限	<p>【内容】春と同じ</p> <p>登録学生…9名(文学部1 経済学部2 社会学部2 法学部1 情報数理学部3)</p>
第2・3・4回インテグレーション講座	
午前の「ボランティア大賞」と、午後の「学部別分科会」から構成される。ボランティア大賞は、サティフィケート登録と関係なく応募できるもので、応募者のうち一次審査を通った6名がプレゼンテーションをおこなう(二次審査)。登録者全員を同一の講座とし、登録1年目生にとっては2回目なので第2回、2年目生にとっては(前年度休んでいなければ)同様な意味で第3回、3年目生(毎年受けていれば)第4回となる。分科会では、今年度修了予定の学生がプレゼンテーションをおこない、運営委員を務める各学部の教員がコメントをする。他の学生も、活動報告を共有し合う。	

<p>11月9日(土) 9:30~12:00 ボランティア大賞</p> <p>13:30~15:00 学部別分科会</p> <p>①1353 教室 ②1359 教室 ③1356 教室 ④1355 教室</p>	<p>【午前の部】 ボランティア大賞への参加 (発表 or 観覧) ▼二次審査を通過しプレゼンテーションをおこなった6名のうち、サティフィケート登録学生が1名、昨年度の修了学生が1名だった。</p> <p>【午後の部】 学部別分科会</p> <p>①経済学部/文学部…13名 (発表者1名) 運営委員：洪 潔清 (経済学部) / 梅澤 礼 (文学部) ボラセン：西原 博之 (センター長補佐、経済学部) 磯野 昌子 (コーディネーター) / 熊澤 端 (職員)</p> <p>②法学部/心理学部…21名 (発表者2名うち動画1名) 運営委員：波多江 久美子 (法学部) / 杉岡 千宏 (心理学部) ボラセン：砂川 秀樹 (コーディネーター) / 菊池 範子 (職員)</p> <p>③国際学部/情報数理学部…12名 (発表者なし) 運営委員：榎本 珠良 (国際学部) / 宮寺 隆之 (情報数理学部) ボラセン：宮崎 理 (センター長補佐、社会学部) 菅沼 彰宏 (プログラムディレクター)</p> <p>④社会学部…13名 (発表者1名動画のみ) 運営委員：稲葉 振一郎 (社会学部) / 吉岡 拓 (教養教育センター) ボラセン：猪瀬 浩平 (センター長/教養教育センター) 田中 悠輝 (コーディネーター) / 杉山 佳奈 (職員)</p>
最終報告書の提出・教員の指導	
<p>修了予定者は、修了証申請書を兼ねた最終報告書をボランティアセンターに提出する。ボランティアセンターは、その学生の所属する学部の運営委員(教員)に送付する。教員は必要に応じて加筆、修正の指導をおこない、最終版にサインをしてボランティアセンターに戻す。最終報告書は、ボランティア実践の内容、プログラムと結びつけた科目を記し、ボランティア体験で学んだこと、大学での学びとの結びつけ、今後の展開、自分にとっての「Do for Others」について書く。</p>	
<p>1月9日(木) 1月10日(金) 2月13日(金)</p>	<p>修了予定者…最終報告書提出〆切 → 各学部教員へ最終報告書を送付 → 教員からの戻し〆切</p>
認 証	
<p>学生の活動時間、内容に基づき、運営委員会での確認を経た後、認証委員会でプログラム修了認証の可否が検討され、決定される。</p>	
<p>2月26日(水) 3月4日(火)</p>	<p>運営委員会 → 認証委員会【構成：学長、副学長、各学部長、教養教育センター事務局長、ボランティアセンター長】(陪席：学長室長、ボランティアセンター次長、コーディネーター、プログラムディレクター)</p>
修了証 授与式	
<p>3月12日(水) 11:00~12:00 記念館小チャペル</p>	<p>修了生4名</p>

## ◆手話でつながるボランティア

心理学部心理学科4年 井上 和奏

## 1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名/活動先	活動時間
1年次	パソコンテイク/明治学院大学学生サポートセンター 学生手話団体 orange による手話講座/明治学院大学	19 時間 30 分
2年次	パソコンテイク/明治学院大学学生サポートセンター AZABU SPRING CAMP 2023 での子ども支援/麻布子ども中高生プラザ	159 時間 15 分
3年次		
4年次		
	合計時間	210 時間 45 分 活動時間 178 時間 45 分 〔ミーティング時間 32 時間〕

## 2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

大学生活の中で、学生手話団体 orange で行った手話講座、小学校での手話教室、パソコンテイクなど、手話と関連した様々な活動を行った。特に、パソコンテイクには最も力を入れ、合計時間の中で最も長く活動した。研修を通して学んだ、授業の内容をしっかりと伝えること、場の空気を共有することを意識し、人と人を「つなぐ」ことに貢献したいと考えながら活動を行った。入学するまではほとんど触れたことがなかったが、大学生活を振り返ると、サークル、ボランティアなど生活の大部分が、手話に関わっていたと感じる。また科目としても「手話2」を履修し、聴覚障害者の生活や歴史について考える機会があった。実際にろう者の方とお話することもでき、それまでの自分の認識が変わるきっかけとなった。このことから、自身の大学生活の大部分を占めるのは手話であり、ボランティア活動の基盤にもなった。したがって、テーマを「手話でつながるボランティア」として、自身の活動について振り返る。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は大学生活の中で、主に以下の三つのボランティア活動を行った。

第一に、1 Day for Others の一環として行った、学生手話団体 orange の活動である。一年次の春、授業が全てオンラインであったことから時間があり、何か大学のイベントに参加してみたいと考えていたところ、本プログラムを見つけることができた。元々、手話に興味があったことと、一日で手話を体験できるという点に魅力を感じ、参加することに決めた。当日は、先輩方が優しく、そして丁寧に手話を教えてくださり、非常に楽しく学ぶことができたことを覚えている。このことがきっかけとなって、学生手話団体 orange の先輩方が所属する、手話サークルぼっけへの所属を決めた。そして翌年には、学生手話団体 orange の一員としてイベントの企画にかかわり参加者の方々に手話を教え、プログラムを成功させることができた。教わる側として参加した翌年に、教える側として参加したことで、とても思い入れのあるプログラムとなった。

第二に、麻布子ども中高生プラザ主催の、AZABU SPRING CAMP 2023 の活動である。これは、二泊三日で新潟県の国立妙高青少年自然の家に宿泊し、小学校4年生から中学校3年生の子どもたちと、

冬のアクティビティを楽しむというプログラムであった。スキーやキャンプファイヤー、ナイトウォーク、雪遊びなどを通して子どもたちと触れ合ったことで、私自身、子どもたちから学ぶことが沢山あった。例えば、一日目の夜に喧嘩をしてしまった子ども同士が、二日目の昼頃には何事もなかったように一緒に遊んでいたことが挙げられる。大人の目線としては、次の日から二人はどのように振る舞うのか、という点で不安を抱える場面であったが、自然の中で時間を共に過ごすことで、元の関係性を再度構築することができたということである。この経験から、子どもの他者との関わり方が、大人と異なることに気付かされた。それ以前も、子どもと関わるボランティア活動には参加してきたが、寝食を共にしたことで、子どもとの接し方について、より理解することができたと感じる経験である。

第三に、大学内で行った、パソコンテイクの活動である。これは、学生サポートセンターが管轄している、有償ボランティア活動である。一年次の12月から、三年次の4月まで活動を行ったが、活動を始めるまでに、支援の方法に関する充実した研修を受けることができた。研修の中では、授業の根幹となる内容をしっかりと伝えること、また学生の発言や先生のジョークなど、場の空気を共有することが重要であることを学んだ。そのためこの点を特に意識しながら活動し、授業資料を事前に受け取って辞書登録をするなど、自分なりに工夫して、少しでも多くの情報を届けられるように努力した。

以上の三つの活動の中で、最も力を入れたのが、パソコンテイクの活動である。ボランティアを行った合計時間の中でも、最も長く活動した。人に、他の人の言葉をそのまま伝えること、これはその人同士の間を「つなぐ」ことであると考え。私はパソコンテイク活動に関して、先生と聴覚障害学生、そしてパソコンテイクを行うテイカーと聴覚障害学生を「つなぐ」ことに少しでも貢献したいと考えながら、この活動を続けた。具体的には、研修で学んだように、先生が発する言葉を、できる限りそのまま聴覚障害学生に伝えることを心がけた。こうすることで、授業が行われている教室内の雰囲気が聴覚障害学生にも伝わり、他の学生との一体感を感じることができると考えたためである。また、テイカーと聴覚障害学生を「つなぐ」ために、サークルと授業で学んだ手話を用いてコミュニケーションを図った。テイカーの中には聴覚障害学生とどのようにコミュニケーションを取ったらよいかかわからない、という人もいるのではないかと考え、特に教室への移動中など、デバイスを用いた文字でのコミュニケーションが難しい場面で、積極的に手話を用いて話をすることを心がけた。これによって、もう一人のテイカーと聴覚障害学生がコミュニケーションを取ることができ、テイク全体のチームワークが高まったと感じた。

手話を用いて人と人を「つなぐ」ために、結びつけられると考えた大学での学びは、「手話2」である。この授業では、少人数で実践的な手話を学ぶことができ、ろう者の方からお話を伺う機会もあった。この授業を受ける前は、主に手話を用いる場がサークルのみであり、手話の使い方や表現、コミュニケーションの取り方に関して、一つの方法に偏っていたように感じる。しかし授業という別の環境で手話を用いるようになったことで、視野が広がり、自身のコミュニケーションの取り方について見つめなおすきっかけとなった。特に、それまでサークルで使っていた「日本語対応手話」ではなく、ろう者独自の文法を持った「日本手話」を学んだことで、自分が積極的に学ぶ立場となって、他者から知識を吸収する姿勢でいることができた。

このことから、ボランティアに関する自らの意識を高めるために、一つの環境にこだわらず、積極的に学ぶことが重要であることを学んだ。そこで学んだことをボランティア活動での実践に活かし、自分と他者、他者同士を「つなぐ」ことが、私が活動を行うにあたって大切にしたいことである。

#### 4. 今後の課題、方向性

今後も、手話を用いたボランティア活動を続けたい。これまでは所属する集団、コミュニティにボランティアの依頼が投げかけられることが多かった。しかし、これからは自分から「何かできないか」という視点を持ち、主体的にコミュニティに参加して、様々な形でボランティア活動を続けていく必要があると考える。実際に、私は今年度から、地域の手話サークルに参加し、ボランティア活動を行っている。そこは地域のサークルであり参加者の年齢層が高く、自分が普段使っている手話表現では伝わらないということがあるため、日々新しい知識を得ることが求められる。地域のお祭りに道案内のボランテ

ィアとして参加した際は、沢山の方から「助かった」「ありがとう」というお言葉をいただいた。このように手話に関するボランティア活動を続けていくためにも、「手話2」で新しい表現やコミュニケーション方法を学んだように、より多くの知識を得ることが重要であると考えます。

子どもの頃から大学生になった現在まで、ボランティア活動は自らを形作る重要な要素の一つであった。したがって、今後もボランティア活動と授業での学びを通して得た、手話で人と人をつなげること、そのために自らの知識や技術をアップデートしていくことを心掛けながら、新たな場所で活動を続けていきたい。

#### 5. 私にとっての Do for Others

私にとっての「Do for Others」とは、人と関わることで、人と人とのつながりを広げていくということである。「Do for Others」を単純に日本語訳すると、「人のためになることをする」という意味になるが、私はこの「人のためになること」は、自らが積極的に関わり、相手との関係性を構築することであると捉えた。人は誰も一人で生きていくことはできず、どこかで人との関わりを求める。人と関わることで、嬉しい感情も、悲しい感情も経験することができる。そこでボランティア活動を通して人と人がつながることができるように尽力することが、最後には「人のためになること」として意味を持つようになるのではないかと考えた。したがって、本学の教育理念である「Do for Others」は、私にとって、ボランティア活動を通して学んだ、人と人とのつながりを広げていくことを指す。

## ◆ 「Do for "Others"」 から得られた「ボランティア」についての見解

社会学部社会福祉学科 3年 渡邊 葵衣

## 1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名／活動先	活動時間
1年次	子育て支援ボランティア	36時間30分
2年次	子育て支援ボランティア	46時間30分
3年次	子育て支援ボランティア 高齢者支援ボランティア	63時間
	合計時間	146時間 (ミーティング時間 4時間30分)

## 2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

私は子育て支援センターでボランティアを大学1年生から行っております。このボランティア・サティフィケートのおかげもあり、常に一つ一つの行動を自分の学びと結びつけながら、自分の学習活動と同時にボランティアを行うことが出来ました。

その中で、このテーマにした理由は主に3つあります。

1つ目は、高校生の頃、子どもの貧困について探求した経験から、子どもに対する支援に興味を持ち、何か学生のうちにそういった取り組みに携われないだろうかと思ったことです。これがボランティア活動をしたと思ったきっかけとなりますが、まだ世間ではコロナウイルスの流行によって活動自粛の風潮があり、思うように活動ができませんでした。

2つ目は、私は子育て支援センターのボランティアをするにあたり、求人サイトから支援員を募集しているのを見て、それならボランティアも募集しているのではないかと考え、自分から応募したことです。コロナ禍ということも重なり、活動に制限があり、求められていないボランティアをしているのではないかと不安がありました。

3つ目は、地域における関係性の希薄化が進む中で、行政では地域の資源を活用しようとしている現状があり、そこにきっかけづくりとしての「ボランティア」が有効ではないかと考え、ボランティアによる地域活性化の模索するにあたり、「ボランティア」とはどのようなことであるかを考えるようになりました。

以上から上記のテーマにしました。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は、子どもと触れ合うボランティアを中心にボランティア活動を行いました。そこでは、何カ月という月齢の低いお子さんが多く、はじめのうちは、コロナウイルス流行の中、人数制限もあり、本当にボランティアは必要なのかという葛藤がありました。しかし、見守りを行うということも支援員の方が急な電話対応の際や事務作業に専念するにあたり必要で、広場に運営している人がいるのといないのとでは保護者の方の安心感が異なることを教えていただきました。そこから、私は見守ることの意義を見出すことが出来たと同時に、ただ周りを見るのみならず、全体を俯瞰して子どもたちの次のアクションを予測して行動したり、はじめのうちに来館された保護者の方に挨拶や会話をして、お手洗いにいきたい場合に、すぐに声をかけてもらえる体制を自分から構築していったりすることが大切だと思い、そのような意図をもってボランティアの時間を過ごしておりました。

また、保護者の方と接する時、例えば、相談活動の理論と技法や心理学概論の大学の学びを活かして、

保護者の方と話す際の話し方、話す時の姿勢、聞き方、どのようなことを相手は話したいだろうか、どのような相槌が良いかなどということを考えながら実践することができました。ここでは、孤立状態に近く、家族以外との関わりを求めている方、子育てに不安があり相談したい方等、単に子どもを遊ばせるためだけではない方もいることをお話して感じ、必要な際に支援員の方に繋げるクッション的役割も担うことが出来ました。

さらに、自分は社会福祉学科ということもあり、子育て支援センターと地域という学問的観点からも考えるようになりました。支援センターでは、遊ぶスペースを設けているだけではなく、月初めには測定日を設けていたり、看護師の方、ベビーリトミックの講師やベビーマッサージの講師をお招きして無料で講座を行ったりと子どもとその保護者両方の身体的精神的健康のサポートを行っており、地域でサポートを行っている様子を窺えました。また、支援センターに行くことが出来なかったとしても、オンラインサロンと呼ばれる、センター長の方とのオンラインでのお話会がありました。そして、地域の音楽団体が演奏会を開いたり、近くに駅があるため、その駅とのコラボレーション企画で、電車で快適に乗るための方法を講座形式で駅員の方がお話しする機会や、その後の駅員さんの帽子を被って、電車などのパネルを背景に写真を撮るブースや、クラフト新幹線をつくるブースを設けて楽しんだりするイベントがありました。このように、地域の企業や団体とのつながりを子育て支援センターを通して、地域住民が交流できる場や機会の提供を行っていることを地域福祉論Aで学んだことを踏まえて実際に目で見て、自分もボランティアという身に関わることが出来ました。

このような経験をすることが出来たのも、自分からボランティアに参加したからこそであるし、学びとして深く考えることが出来たのはボランティア・サティフィケートのプログラム、そしてボランティアセンターでサポートして下さった先生方のおかげであると思いました。

#### 4. 今後の課題、方向性

今後、私は4年生でも引き続き子育て支援に関わるボランティアに参加したいと考えております。また、そこで学んだコミュニケーション能力や全体を俯瞰して積極的に行動することを活かして、4年生のゼミナールでの調査や卒業論文に活かしていきたいと考えております。今の時点では、地域福祉について取り上げようと考えており、その際にこのボランティア経験を繋げられたらと考えております。

現在、日本の社会保障制度が少子高齢化をはじめとする諸問題によって機能が難しくなっている中で、地域包括ケアシステムと呼ばれる地域の資源や人を福祉に組み込む政策が進められています。ここで、私はこの子育て支援センターのような地域住民同士の関係性を深める場所や、地域の企業や団体と地域住民を結びつけることができる機会を創出する機関が非常に重要であると思いました。保護者の方を起点にそのお子さんも地域に対して愛着が持てるようになると、地域のためにその子が成長した時にボランティアを始めるきっかけになる可能性があると考えます。そして、その地域愛が広がることで、地域全体の活性化につながり、支えて支えられる関係を構築できるのではないかと考えております。その考えをより具体的に論理的なものとするために、上記でも述べました通り、継続してボランティア活動を行い、自分の身をもって学び続けていきたいと考えております。

#### 5. 私にとっての Do for Others

「相手を思いやるものであり、その実践である」と思います。相手を思いやった行動が「大きなお世話」にならないようにするためには、相手が何を必要としているのか、自分がしたいことになっていないか、相手のことを知ろうとしているかというような点が重要になってくると私は考えます。特に、長期的に関わる相手であるとするならば、さらにそこに信頼関係の構築が必要なのではないかと考えました。

毎回のフィードバックを担当の先生からいただくのですが、この時に、「親戚の子どもだと一緒に遊んであげてもボランティアにならないのはなぜなのか、分かりますか？ Do for "Others"の"Others"とは誰をさすのか、ぜひ考えてみて下さい。」という言葉いただきました。私なりにこの others は「関係性がそれまでなかった人、気薄であった人」を指すのではないかと考えました。家族や友達であれば、

ボランティアをするのではなく、家族の機能を担う、または助けることで関係性を強くすることだけれど、ある意味で others は一定の距離にある、生活に深くは関わらない人のことをさすのではないのでしょうか。そして、本来なら関わる、助けることもない人々を支えるということがボランティアではないのでしょうか。

お手伝いとボランティアも私は違う言葉のように思います。ボランティア報告会の際に、親戚の子どもを預かることもボランティアであると思っているという方がいましたが、それは親戚を others として見ており、家族という認識の枠組みが狭いことから起因すると私は考えました。私は親戚を身内に近い存在と認識しており、ボランティアというどこか他人行儀な、others を意識させるものではなく、お手伝い、または一緒に遊ぶ時間に位置づけていました。

ここから、「ボランティア」で対象となる「others」は人によって異なり、それに伴い、「ボランティア」の概念も異なることを導き出しました。その中で、私にとって「Do for Others」とは「関係性がそれまでなかった人、気薄であった人」に対して「思いやるものであり、その実践である」と考えました。

## ◆長期ボランティアだから気づいたこと——就労支援施設での活動と障害者心理学の学びを通して——

心理学部心理学科3年 藤堂 夏希

## 1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名／活動先	活動時間
1年次	ワークサポートセンターアンジュでの作業の手伝い	85時間
2年次	同上	119時間
3年次	同上	47時間30分
合計時間		251時間30分

## 2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

私は、横浜YMCAワークサポートセンターアンジュ（以下アンジュとする）という所で、高校3年生の1月から現在に至るまでの約3年間、週に1回のボランティア活動を継続的に行っている。アンジュは、就労継続支援B型事業所という区分に属する福祉施設で、軽度の知的障害のある方、自閉スペクトラム症や注意欠如多動症などの発達障害のある方、うつ病などの精神疾患のある方が働いている。アンジュが行っている作業内容は大きく分けると、パンの製造・販売、清掃請負作業などの受注作業、卒業式用コサージュなどの手作り品制作の3つがあり、その中でもパンの袋詰め作業の手伝いが私の主な活動内容だ。

私がボランティアを始めたのは、大学が決まって時間ができた際に、ボランティアを始めたと言う友人の話を聞き、私もやってみようと思ったことがきっかけである。そして地元の社会福祉協議会のボランティアセンターに行き、アンジュを紹介してもらった。初めは大人の障害者支援に興味があったわけでもなく、軽い気持ちで始めたボランティアだったが、大学で心理学を学ぶにつれて次々と新しい発見があり、現在は意義を感じながら続けていることができています。

## 3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

ボランティアを始める前、私は障害に関してあまり知識がなかったため、利用者さんはどのような人達なのか、どのような話をすれば良いのか全く分からずかなり不安だった。しかし実際に関わると、アンジュの利用者さんはフレンドリーな方が多く、一見障害を持っていると分からないような方もいて、想像していた雰囲気とは違い驚いた覚えがある。そして、作業も手際よく進めている姿を見ると、一般就労も可能ではないかと思う場面もあったが、ボランティアを続けていると、障害の特性と思われる行動が見えてきた。具体的には、すぐに気が散ってしまい作業に集中して取り組めない、手順を理解するまでに時間がかかる、毎朝決まった時間に出勤できないことなどが挙げられる。そして、これらの特性や行動を理解し適切な支援方法を知るために、心理学の授業が非常に役に立った。心理学科には障害者に関する沢山の講義があるが、その中でも次に挙げる3つの講義は、アンジュのボランティア活動と特に関連のある内容だった。

1つ目は、障害全般の基礎知識を学んだ「障害者・障害児心理学」という授業で、軽度の知的障害は複雑な事柄や計算の理解は難しく感じるが、配慮があれば働くことができる、ということ学んだ。知的障害のある人が能力を発揮できるよう、作業手順などを工夫して説明することが大切であると感じたため、私は作業の1つ1つの段階でやるべきことを言語化して利用者さんと確認することを意識した。2つ目は、精神疾患について広く学んだ「精神疾患とその治療」という授業だ。この授業では、う

うつ病の症状には気分の落ち込みや集中力低下などがあり、1日の中でも気分の変動があること、特に朝に調子が悪くなる人が多いことを学んだ。この学びから、朝の出勤が遅くなってしまう利用者さんの中には、うつ病の症状が影響している人もいると考えた。そして、遅刻をして自己嫌悪になってしまう方がいることから、「〇〇さんが来て下さって助かりました。来週もよろしくお祈いします。」などと前向きな声かけをするように心がけた。3つ目は、発達障害を主に扱う「発達臨床心理学」という授業で、発達障害の症状は先天的な脳機能障害であり、本人の努力や訓練では改善が難しいことや、発達障害の支援目標は定型発達に近づくことではないことを学んだ。このことから、特性と上手く付き合えるように手助けすることが、障害者支援の基本であると考えた。

以上のような障害に関する知識を得たことによって、利用者さんが苦手そうなことを先回りし、さりげなく手伝うことができるようになった。また、それと同時に、アンジュでは1人1人の特性に合わせた役割分担をしていることに気がついた。例えば、すぐ気が散ってしまうが順序立てて作業ができる方は、他の利用者さんに指示を出しながら色々な作業を行っていたり、協調性を取ることが苦手だがパソコンが得意な方は、納品書を作ったりしている。このように全員が同じ作業をするのではなく、それぞれの得意、不得意に合わせながら仕事の分担をすることで、利用者さんに過度な負担がかからず、効率よく作業を進められていることに気づいた。

これらは、同じ施設で長期間ボランティアを続けたからこそその気づきだと思う。

#### 4. 今後の課題、方向性

私には、知的・精神障害のある人に対する偏見や社会的障壁をなくし、障害があっても暮らしやすい社会を作る、という大きな目標がある。アンジュで長期間ボランティアをする中で、障害のある人と密に関わるようになり、この目標を持つようになった。しかしながら、障害があっても暮らしやすい社会の実現は、社会全体の意識を変える必要があり、かなりの歳月を要するため、非常に難しい問題であると考えている。それでも、この目標に向かって、それぞれの段階で自分ができることをやっていきたいと思う。

その第一段階として、卒業論文を「知的障害者に対する受容的態度（障害者を理解し受け入れる態度）」を研究テーマに執筆することにした。この研究テーマにしたのは、知的障害のある方と関わったことで「知的障害者」の印象が変わった経験をし、障害のある人と実際に交流することの重要性を強く感じたことが影響している。

そして、次の段階としては、公認心理師になって障害のある子どもの支援を行うことを目指している。大学の授業で、子どもの頃の支援（療育など）は、その後の生きやすさに影響すると学んだため、将来的に障害のある人が社会で暮らしやすくなることに繋がると考えたからである。その際、大人と子どもという違いはあっても、障害のある人との接し方は共通するものがあると思うため、アンジュでの活動経験を活かしていきたい。

#### 5. 私にとっての Do for Others

アンジュのボランティアにおける私の Do for Others は、アンジュのパンを購入すること、パンの魅力を広めることだと思う。その理由としては、利用者さん達に支払われる「工賃」が関係している。就労継続支援 B 型の事業所は、雇用契約を結ばずに、利用者さんには給料ではなく工賃と呼ばれる作業手当が支払われている。アンジュの場合は1時間120円～160円となっていて、全国平均より低いという現状がある。そしてこの工賃は、パンの売上から材料費などを引いた額が分配されるため、工賃を上げるためには売上が上がる必要がある。したがって、アンジュのパンを買って僅かでも売上に貢献することは、障害者支援、そして Do for Others につながると考えている。

## 5. ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）

### （1）総括

「ボランティアファンド学生チャレンジ（以下、ボラチャレ）」は、学生が自ら企画した6か月以上1年以内の活動を応援する奨励金制度である。ファンドとなるのは明治学院消費生活協同組合で販売している「明治学院大学ボランティアファンド支援グッズ」の売上の一部で、教育理念“Do for Others”を実現するために、大学公式グッズの購入という形を通じて社会に貢献する仕組みとなっている。

ボラチャレ 2023 の募集要項は、以下の通りである。

募集内容	<p>テーマ：「社会課題にチャレンジ！」</p> <p>社会の課題を発見し、解決のためにアクションを起こすチャレンジ精神のあるみなさんを支援します。分野は問いません。</p> <p>奨励金：原則上限 20 万円</p>
応募資格	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 明治学院大学の学生による学生団体、ゼミ、サークル等による活動の企画であること。</li> <li>・ 個人の活動は対象外となるが、2人以上でチームを結成すれば申請できる。</li> <li>・ メンバーに卒業生や他大学生、社会人等が含まれる場合、メンバーの半数以上が本学学生であること。</li> </ul>
助成対象期間	2023年10月1日（日）～2024年9月30日（月）
応募方法	「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ応募用紙」をメールにて提出
選考	提出書類をもとにボランティアセンターと面談
援助対象	<p>活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など）、保険料</p> <p>※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用</p>
活動報告/ 提出物	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中間活動報告会（2024年春学期中）にて途中経過報告を行う</li> <li>・ 活動終了後、2024年11月末日までに、以下を提出             <ul style="list-style-type: none"> <li>（1）奨励金使途報告書</li> <li>（2）領収書等</li> <li>（3）活動報告書</li> </ul> </li> </ul>

ボラチャレ 2023 の採用団体は3件である。

Be with Phayao は、「明治学院中高大連携パヤオプロジェクト」に関わっていたメンバーを中心に、取組が終了した2022年度以降も自主的にYMCA パヤオセンター（タイ北部パヤオ県ドッカムタイ郡にある児童保護シェルター）との交流を行っている団体である。現地での交流活動だけでなく、人身売買という日々の生活でなじみの薄い社会課題を発信するため、学園祭でのパヤオクラフト販売等を通じて、社会課題の発信や支援の輪を広げることに挑戦している。

JUNKO Association は、1995年から発展途上国の子どもたちの教育支援を行ってきた団体である。2023年春に目視調査で訪れたベトナムの Song Tra 村民族半寄宿舎中学校では、清掃用具を用意する経済的余裕がなく衛生状態が劣悪であることに気づき、清掃用具の提供と清掃方法のレクチャーなどを学校側に提案し企画の実施につながった。また学校からの要望を取り込むかたちで一部計画を変更し、初潮やたばこなど性や健康がテーマの企画を考え取り組んでいる。

畑やろうじゃないか（コンポスト部門）は、横浜キャンパスのボランティアセンターの脇にある畑を運用する、環境問題に関心をもつ学生グループである。サーキュラーエコノミーの実現を目指してコンポストの運用をしている他大学の学生団体の活動をモデルとしており、横浜キャン

ンパスの食堂で出る生ごみをコンポストで堆肥化し、その堆肥を、野菜を育てる学内の畑で活用するという循環を通じて環境にやさしいごみの削減を目指している。まだ活動の規模は小さいが、学内や地域などさまざまな連携や広がりが期待できる取組である。

6月には採用団体が一堂に会し、中間報告会を実施した。ここでは活動を振り返り、専門性を持つボランティアセンター関係者（教職員）からのアドバイスを受けたり、他学生団体、一般学生との意見交換を行うなどした。各採用団体が抱える課題や苦勞などをシェアする場面もあり、互いにエンカレッジしあう良い時間となった。

各団体の活動詳細は、別頁の報告書にて確認いただきたい。

ボラチャレ 2024 は、4 団体が採用を受け活動を行う予定である。

## (2) 助成団体一覧

### 2023 年度助成団体一覧（期間：2023 年 10 月～2024 年 9 月）

プロジェクト名	団体名	奨励額	使用額
パヤオプロジェクト	Be with Phayao	¥200,000	¥179,245
ベトナムの子どもたちにより良い衛生環境を	JUNKO Association	¥200,000	¥22,884
コンポスト活動で循環型キャンパスへ！	畑やろうじゃないか	¥130,000	¥11,286

### 2024 年度助成団体一覧（期間：2024 年 10 月～2025 年 9 月）

プロジェクト名	団体名	奨励額
人をつなぐコーヒープロジェクト	学生団体 Umee Coffee	¥199,000
Do for children ～子どもの未来を開くスポーツ体験～	FLEUR	¥133,000
近隣のフリースクールと連携して学校によらない体験学習の機会を作る	Piece of Nature	¥200,000
Reading Promotion 企画	JUNKO Association	¥200,000

（職員 菊池 範子）

## ◆パヤオプロジェクト

団体名	Be with Phayao
企画の目的	人身売買のリスクから子どもたちを保護するタイの YMCA パヤオセンターと交流・支援をし、日本国内で人身売買の認知をさらに広める。

## 1. 実施概要

私たち Be with Phayao は1年を通して充実した活動を送ることができ、私たちの目的である、貧困や人身売買の危機にあった子どもたちを保護する YMCA パヤオセンターとの交流・支援をすることができた。団体立ち上げから2年目を迎えた今年、4月には新たに4名のメンバーが加わり、現在所属学生が10名となり活動を拡大している。

この1年間を通して、タイの YMCA パヤオセンターへの訪問、パヤオクラフト販売、2つのことを実施してきた。

## (1) YMCA パヤオセンター訪問

本制度実施期間内において2度の YMCA パヤオセンターへの訪問を実現することができた。1度目の訪問は2024年3月2日から3月12日に学生2名、2度目の訪問は2024年9月3日から9月12日に学生4名が訪問した。

- ・1度目の訪問時は、子どもたちと様々な交流をしたほかに、ゴールドトライアングル経済特区とアカ族の村を訪問した。

「ゴールドトライアングル経済特区」はメコン川の対岸のラオスに位置し、タイ・ラオス・ミャンマーの3カ国の国境沿いにあり、かつては世界最大の麻薬密造地帯だったが、現在では中国企業がラオス政府と99年間の「租借」の契約をして、カジノやホテル、高層ビルが建ち並び、中国資本が開発する経済特区となっている。同経済特区は一見輝かしい発展が遂げているものの、外国人旅行者が旅行中に拉致されたり、言葉巧みに勧誘された人たちが監禁され強制労働に従事させられるなどの人身売買の温床となっており国際的にも懸念されている地域で、東南アジアの近隣国の国民だけでなく、日本や韓国など東アジア諸国の国民の被害も確認されている。今日、国際社会で問題視されている同地域に実際に足を運ぶことで、人身売買の現状を間近に見ることができ、とても有意義な時間となった。

次にアカ族の村に訪問し、ホームステイを経験した。今回訪問した村は、チェンライ県の山岳地域にある村だ。約30年前にこの地域に移住した80人程度が暮らしており、インフラ整備は整っていなかった。具体的には水は山の湧水を使用しており、簡易的なソーラーパネルでバッテリーを充電し、夜間に屋内で使う程度の電力しかなく、スマートフォンも圏外で家は高床式の建物であった。村ではたくさんの方々から来た私たちを温かく迎えてくださり、直接暮らしに関する話も伺うことができた。



- ・2度目の訪問ではチェンマイの2つのNPO団体を訪問する機会を通じ、密輸や人身売買、違法労働といった問題を聞くことができた。日本では二次・三次情報にとどまるこれらの課題を現地で学べたことは、非常に貴重な経験であった。また、昨年に続き、子どもたちやスタッフとの交流を通じて得た温かさや気付きは心に深く刻まれた。タイとミャンマーの国境の街であるメーサイを訪れる中で、川一つ隔てただけで生活環境や情勢が大きく異なる現状を実感し、国境を超えたミャンマーの現状にも向き合うことの重要性を感じた。オンラインでは実現できない、パヤオセンターの生活を体験し、子ども達やセンター職員と直接対話・交流することで子ども達が興味を持っている日本のことを伝えたり、オンラインでは聞けなかった人身売買の事実の詳細や現状を聞くことができた。

## (2) パヤオクラフト販売

パヤオクラフトとは「バンコク YMCA パヤオセンター」に暮らしている山岳少数民族出身の子ども達や家族が刺繍したクラフトだ。販売売上の全額が YMCA パヤオセンターに贈られ、センターの運営と子ども達の自立に役立てられる。

### ・戸塚まつりで販売

2024年5月25日、26日に本学横浜キャンパスで開催された、戸塚まつりでパヤオクラフトを販売。2日間を通じて、売り上げと募金の合計 74,533 円を集めることができ、全額 YMCA パヤオセンターに寄付した。パヤオクラフトの購入、募金をしてくださった方々に改めて御礼申し上げたい。

## 2. 感想・活動を通して得た学び

- ・今年度は、大学キャンパス内でのクラフト販売のみならず、東村山中高出身の学生が同校でのクラフト販売への参加も実現することができた。東村山中高のキリスト教同好会の生徒たちの販売に協力できたことは OB としても非常に嬉しいことである。パヤオプロジェクトは、中高生と大学生が交流できる点においても非常に魅力的である。今後も積極的に活動の提案を行い、中高生との交流を深めていきたいと考えている。

(法学部グローバル法学科1年 岡本 伊織)

- ・昨年に引き続き、多くの学生や戸塚の地域の方々に私たちの活動を広めることができたと思う。昨年もクラフトを購入して下さった方や、横浜 YMCA を通じてパヤオクラフトを知って下さっている方もいらっしゃったため、地域の方々にはこのプロジェクトはかなり浸透していると思う。今後は学生をターゲットにした活動を増やしていきたい。

(文学部フランス文学科2年 三上 真歩)

- ・戸塚まつりを通じて、来場者や学生にパヤオ活動を認知してもらうことができた。また、活動に興味を持ち、話を聞いてくれた方もおり、今後のクラフト販売の継続やその効果を期待している。さらに、クラフト購入がオンラインでも可能となるようなサイト、SNSなどを活用すれば、より多くの人々に認知してもらえるのではないかと感じた。

(法学部グローバル法学科1年 秋山 奏芽)

- ・戸塚まつりの販売時には、もともと過去にパヤオの商品を買ってくれていた方や、人身売買の問題に関心がある人に出会うことができた。利益を出すだけでなく、そういった出会い自体に意味があったと実感できる時間になったと思う。

(国際学部国際学科3年 飯見 來未)

- ・戸塚まつりのパヤオクラフト販売では、実際にタイに行ったことがある人や国際問題に興味を持つ

人との会話を通じて、自分が知らなかった価値観や経験に触れることができた貴重な時間であった。販売を通じて感じたこととして、国際問題に関心を持つ40～50代の世代の大人が活動に興味を持ち、購入してくれることが多い傾向があった。また、親がそのような問題に関心を持っており、子どもに勧めて可愛い雑貨を購入してくれるケースも見られた。一方で、個人的には自分たちと同世代の人々にも、より一層この活動に関心を持ってもらいたいと強く感じた。

(法学部グローバル法学科1年 額賀 由真)

### 3. 今後に向けて

コロナ禍を乗り越え、可能な限り活動を続けてきた。今後は、センター訪問やクラフト販売だけでなく、新たな活動を通じて活動をさらに活性化させたいと考えている。今年度、パヤオミールプロジェクトを計画していたものの実施することはできなかった。また、パヤオ地域の実情を広く知ってもらうために、クラフト販売に留まらず、定期的で継続性のあるこの問題について周知する活動を展開する必要性があると感じている。

引き続き学生や同世代の関心を集めるための企画や高校との協力なども検討し、学内だけでなく学外向けの講演会の開催や関連企業の取材といった対外的な取り組みを通じて、メンバー自身の知識を深めることも今後の目標の一つである。

(法学部グローバル法学科3年 丸山 智義)

## ◆ベトナムの子どもたちにより良い衛生環境を

団体名	JUNKO Association
企画の目的	本プロジェクトは、ベトナムの山岳地帯の少数民族地域に住む子どもたちを対象とし、衛生環境を改善し向上させることで体、命の大切さを伝えることを目的としている。Song Tra 村民族半寄宿舎中学校（以下対象校と表記する）はベトナム中部のダナンから 100km 離れた Quang Nam 省 Hiep Duc 県の少数民族地域、Song Tra 村に位置している。この地域では、インフラやトイレなどの衛生環境が問題として挙げられる。子どもたちの衛生環境と意識を向上させることで、子どもたちが主体的により適切な方法で掃除ができる環境をつくるのが目的である。

## 1. 実施概要

## (1) 2024 年度春期お掃除プロジェクト

- ・日時：2024 年 3 月 1 日
- ・場所：Song Tra 村民族半寄宿舎中学校
- ・対象者：Song Tra 村民族半寄宿舎中学校生徒 60 名
- ・交流内容：

春期短期派遣では、子どもたちが掃除の大切さを知り、適切な方法で掃除することで心も体も大切にすることを目的として掃除の大切さを伝える劇や適切な掃除方法を伝授した。アクティビティに入る前には、ベトナムの子どもたちに馴染みのある手洗いダンスというダンスと一緒に踊り、シャイな性格の子どもたちと打ち解けられるようなアクティビティを行った。その後、掃除の大切さを伝える劇を行い、大事なキーワードは、クイズにするなど子どもたちに覚えてもらえるような工夫を行った。

掃除の大切さを伝える劇では、クイズを交えながら掃除がなぜ大切なのかを伝えることができた。掃除方法伝授では、当番表を導入することで掃除を現地主体で習慣化するためのシステムを導入することができた。



(掃除の伝授の様子)



(暗記テストの様子)

## (2) 2024 年度夏期健康教育・性教育プロジェクト

- ・日時：2024 年 9 月 11 日
- ・場所：Tran Quy CAP 中学校
- ・対象者：Tran Quy CAP 中学校生徒 60 名

夏期ベトナム短期派遣では、対象の生徒を男女に分けて企画を行った。企画を通して、思春期の生徒たちが自身の身体について理解し、自己はもちろん他者を含めた命の尊さを理解することを目的としている。企画内容としては男子生徒に対してタバコに関するレクチャーを、女子生徒に対しては初潮教育を行った。タバコに関するレクチャーでは過度な喫煙や受動喫煙の危険性を踏まえ、将来に及ぼす影響を伝え、実際に喫煙を続けた人の呼吸機能を体感できる COPD 体験も行った。初潮教育ではエピン

ードトークを交えて生理の基礎的な知識や、生理による症状、生理中の過ごし方について伝えた。また男女ともに企画の中でディスカッションを行った。具体的には、レクチャー前にタバコや生理に関する知識の共有、悩み事などを議論した。企画の中でクイズをしたり、質問を投げかけたりした際には積極的に発言している姿が見られた。また企画の最後に行った習熟度テストでは平均点数が9割を超えた。これらの企画内容を通して、目的である“自身の身体について理解し、自己はもちろん他者を含めた命の尊さを理解すること”に一步近づいたことがわかる。



### 2. 感想・活動を通して得た学び

Song Tra 村民族半寄宿舎中学校にて続けてきた掃除の企画では、春の渡航にて当番表や役割表を導入し、現地主体で動くようサポートができたことが校長とのミーティングからも伺うことができ、さらに健康教育・性教育という新たな試みを導入することができ、さらに一步進展した。性教育に関しては今後様々な課題があるが、現地と調整し現地に寄り添った形にしていきたいと思う。

### 3. 今後に向けて

掃除教育では、導入した当番表とチェックシートを活用し、現地主体で適切な掃除が継続できるようにしていきたい。具体的には、毎回の渡航で学校の衛生状況の確認を行い、足りない部分を企画に組み込んでいく予定である。新たな試みである性教育は、私たちのみで実施していくことは難しいため、現地協力者であるダナン大学の学生と内容を調整し、現地に寄り添った形で実施できる方法や形態を模索し、継続していきたい。

(心理学部教育発達学科2年 高間 結菜)

## ◆コンポスト活動で循環型キャンパスへ！

団体名	畑やろうじゃないか（コンポスト部門）
企画の目的	ゴミの削減と循環型キャンパスを実現することを目的とする

## 1. 実施概要

本プロジェクトでは、横浜キャンパス8号館インターナショナルカフェにて排出される生ゴミをLFCコンポストで堆肥化し、その堆肥を使用して新たに植物を育てるという「循環型キャンパスの構築」を目指した取り組みである。

具体的な作業内容としては、週に2回、横浜キャンパス8号館インターナショナルカフェに生ゴミを受け取りに行き、LFCコンポストに投入し堆肥化を行った。1回の活動で堆肥化した生ごみの量は約450gであった。なお、メンバーは主に4名で、交代制で作業を行った。

この活動を行うことで、本来生じてしまう生ごみの運搬・焼却時の温室効果ガスやCO2排出の削減に繋げることができたという点で、有効性を感じた。同時に、まだまだ学内ではたくさんの生ごみが生じているため、今後活動を拡大することで学内での循環系を創っていきたいと思っている。



## 2. 感想・活動を通して得た学び

活動を終えて感じていることとしては、まずは0から1に、この活動を始めるというスタートラインに立つことができ、非常に嬉しく思っている。しかし、まだまだ改善の余地があるため、白金での実装も視野に入れつつ、メンバーを募りつつ、活動を軌道に乗せていきたい。

達成できたこととしては、学内にコンポストを設置できたこと、インターナショナルカフェと連携し、学内で排出される生ゴミをコンポストで堆肥化できたことである。またイベントへの参加を通して私たちの活動を外部の人にも知ってもらうことができた。2024年9月29日に「City Green Fes.」というイベントに参加した。エシカルに関するイベントであったため、コンポストへの関心が高く、また、学内でコンポストを実践するというのは希少性が高いため興味関心を多く惹きつけることができた。

達成できなかったことは、コンポストで作った堆肥を使って、新たに植物を育てるという工程まで実行できなかったこと、学内の人にも知ってもらえる機会があまりに少なかったことである。前述したように、外部イベントに参加した際には多くの人が興味を持ち話を聞いてくれた。その経験もあり、学内においても、コンポストがあることや活動メンバーを募集していることをもっと周知できるよう、当初活動内容に含んでいた学内でのトークイベントの開催や大きなポスターの設置などできることがまだまだあったように感じている。

こうなってしまった要因としては、全て自分一人でやろうとする気持ちが先行したことや、他のメンバーにやりたいことや方向性が伝わっていなかったこと、勢いだけで動こうとしていたことなど、圧倒

的な計画不足と連携不足があったと考えられる。そもそもメンバーが4人しかいないため、動ける人員も時間も限られているという点で、まずは計画を詳細に立て定例ミーティングを設置すべきであったと感じている。自分ひとりで動こうとしすぎていた点については、プロジェクトリーダーとして、メンバーに役割や仕事を割り振ることも積極的に行うべきであったと学んだ。



### 3. 今後に向けて

今後活動していく上での新たな目標としては、第一にメンバーの確保、次に実践につなげるための具体的なスケジュールを立てることである。メンバー募集含め、学内での認知度をアップすべく、イベントを開催予定であったが、行動に移すまでに十分に時間が確保できず、計画を立てて満足したような形になってしまった。まずは既存のメンバーとの定期的なミーティングを設置することで、計画をたて、実行するところまで繋げていきたい。またインスタグラムを開設したものの全く動かせていなかったため、担当を決め、定期的に活動の様子を発信していきたい。

今回は横浜キャンパスでの実践であったが、今後はメンバー全員が白金キャンパスへ移ることもあり、白金での実践も行っていきたいと考えている。白金には畑がないため、高輪ホップなど外部との連携を行うことで、明学を起点に街の循環系も創っていきたい。

(心理学部心理学科2年 柴山 鈴花)

## 6. いつでもボランティアチャレンジ（通称：いつボラ）

### （1）総括

「いつでもボランティアチャレンジ（以下、いつボラ）」は、本学の在学生・教職員が自ら企画したボランティア（社会貢献）を実践したいと思った「その時」に申請できる奨励金制度である。年度内のいつでも申請ができ、ボランティアセンターの職員（含むボランティアコーディネーター）が面談を実施し、プロジェクトの採用可否を判断する。

募集要項は、以下の通りである。

テーマ	「社会課題への第一歩」 社会課題を発見し、解決のためにアクションを起こすきっかけとなるプロジェクトを支援します。これまで活動実績がないスタートアップ要素の強い取組や、単発の企画を歓迎します。
奨励金	個人：上限 20,000 円 団体：上限 50,000 円 ※減額して採用となる場合があります。 ※採択金額に未使用金が生じた場合は、未使用金額を返還する必要があります。
応募資格	・本学に在籍する学部生・大学院生・教職員（非常勤も可）が、一人、または複数メンバーで実施するプロジェクトであること。 ・活動開始から活動終了まで3ヶ月以内で完了するプロジェクトであること。 ・個人または団体の採用回数が、1年度で2回を超えないこと。
応募方法	「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」をボランティアセンターメールアドレス宛に提出
選考方法	応募書類（「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」）をもとに、面談（45分程度）を実施
援助対象	活動現場までの交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など） ※次の項目を除く：人件費（プロジェクトメンバー自身の給料やアルバイト雇用等）、会議会合費（「食」等をテーマとし飲食がプロジェクト遂行上必要な場合は使用可）、機器やアプリケーション購入費（パソコン、タブレット、プロジェクター、ビデオなど）、寄付に該当するもの

2024年度は16件の申請があり、14件が採用となった（うち1件は教員応募）。白金・横浜両校舎から、学年や学部も多岐に渡り、多文化共生、文化、環境、人権、福祉、貧困、地域など、扱う社会課題もバラエティに富んでいる。

前年度採用実績のある団体からの活動継続に伴う申請もあったが、その後ボランティアファンド学生チャレンジに申請して中長期的な活動につなげるケースや、教員からの紹介を受けて申請に至ったスタートアップ要素の強いプロジェクトも5件あった。近年はコロナ禍で思うような活動ができない時期が続いていたが、今年度はゼミや授業で学んだことを活かしながら社会課題に向き合っていく企画が続々と発足しており、今後に期待したい。一方、展示会や勉強会など、学内施設を利用してプロジェクトを実施した企画も多く、採用団体として活動を終えた後も、学外に向けて自分たちの活動をどのように継続し発信していくか、またそのフォローアップ体制の構築も今後の課題となっている。

本制度は、これまで学内での広報が課題となっていたが、昨年度新たに制作したチラシの配架や、SNSでの投稿に注力し、口コミなどもあって一定程度その効果が感じられる結果となった。次年度もこれらを継続しつつ、応募者の考える社会課題に寄り添い伴走しながら、質の高いプロジェクトが実現できるよう工夫していきたい。

（チラシ）ボランティアセンターの制度



（職員 杉山 佳奈）



2024年 12月2日	2024年 12月23日 ～1月7日	持とう！自信！守ろう！ 体！明学コンドーム設置 プロジェクト	¥47,000	¥40,457	明学生による明 学生のための性 の健康グループ
2024年 12月8日	2025年 3月12日～ 3月16日	1923年関東大震災時の 虐殺を「記憶」するた めのプロジェクト	¥20,000	¥41,504	佐伯 賢 (個人申請)
2024年 12月17日	2025年 3月3日～ 3月7日・ 3月12日	ニューヨークから 横浜キャンパスへー核兵 器禁止条約を知るー	¥50,000	¥50,000	KNOW NUKES TOKYO MGU
2024年 2月5日	2025年 3月27日	新生活スタートダッシュ プロジェクト	¥11,000	¥8,248	smlle (スマイル)
2025年 2月28日	2025年 3月14日 ～ 3月17日	明学×能登 つなぐプロジ ェクト	¥50,000	¥26,467	あなたとなり に。-SBC-
2025年 3月5日	2025年 3月15日 ～ 3月16日	四万十町 雁皮紙再生プ ロジェクト	¥50,000	¥45,401	四万十ええとこ 発信隊

※1 採用保留。

※2 審査の結果、不採用。

※3 プロジェクト内での奨励金の使用なし。



## 学生団体 Umee Coffee



### 五感で感じるフェアトレード@戸塚まつり

活動実施日：2024年5/25日(土) - 26日(日)

活動場所：明治学院大学横浜キャンパス

#### 《活動内容》

戸塚まつりでは2日間出店させていただきました。五感をテーマに

- ① 感じるブースとしてうめ〜ドリップコーヒー (hot)・うめ〜ドリップコーヒー (ice)・うめ〜のおいしいラテ (ice) の提供
- ② 見るブースのコーヒー焙煎見学
- ③ 聞くブースとしてカフェに来店いただいた方への説明
- ④ 話すブースとしてカフェに来ていただいた方を中心に哲学対話を行いました！



天候にも恵まれ、明学の学生のみならずたくさんの地域の方にお越しいただきました。ドリンクをただ販売するのではなく、私たち Umee Coffee がどのような経緯で立ち上がったのか、そして“オーガニックでフェアトレードのコーヒー”の魅力や重要性をお伝えすることができました。また、哲学対話では「関心を持つとはどういうこと?」「フェアとは何か?」「フェアトレードはやさしいか?」の3つのテーマを地域の方を交えて対話し、じっくりと物事を考える有意義な時間となりました。来てくださった方々に「フェアトレードについて興味を持った」や「考えるきっかけとなった」と言っていたいただき大成功に終わりました。いつでもボランティアチャレンジの助成金は電気ポットレンタル費やカップ等の購入費に充てることができました。

#### 《活動を通して得た学び》

2日間にわたって出店し、1日目の反省を踏まえて2日目は当日の流れやコーヒーのオーダーをいただいてからの作業を円滑に行うため、声かけとお客様への対応を重点的に改善し見事、すべてのドリンク(アイスコーヒー/ホットコーヒー/カフェラテ)を完売させることができました。まだまだ駆け出しの団体ですが、フェアトレードの「うめ〜・コーヒー」を通してこれからも大学内のみならず戸塚、横浜、神奈川、そして世界に持続可能な社会への気付きを発信していきます。

フェアトレードを広めたい、そして自分たちの活動でフェアトレード商品の生産者を支援したい、そのような思いが来店された皆様に伝わっていたら嬉しいです。



# PIECE OF NATURE

## 不登校児童とものづくり体験や自然観察をする

Piece of Natureは、近隣のフリースクールと連携し、主に不登校児童を対象に体験学習の機会を作ることを目的としたボランティアサークルです。

いつでもボランティアチャレンジをイベント参加費や材料費、交通費として活用し、2024年6月から8月にかけてホタル観察、水鉄砲づくり、海イベントを開催しました。

これらの活動を通して、自然を観察する・触る、自然の物でものづくりをする機会を作り、参加する子どもと学生の両者がその楽しさを実感し、成長の糧にすることを目的としています。

### ホタル観察

Date/Place: 6/16, 舞岡公園（横浜市戸塚区）

Participants: 32人

Details:

舞岡公園のことや、生息するホタルやトンボについて学んだのち、舞岡公園を散策しながらホタルを観察しました。1 Day for Othersとしても実施し、多くの学生が参加しました。

Thoughts:

学生・子どもともに、初めてホタルを見る参加者が多く、その発見や感動を共有する貴重な機会となりました。学生と子どもと一緒にホタルを探し、その種類について話し合う姿もみられ、コミュニケーションが深まり、楽しい活動にすることができました。



### 水鉄砲づくり

Date/ Place: 7/7, 舞岡公園

Participants: 4人(学生2人、子ども1人、保護者1人)

Details:

伐採された竹を使用して、自ら竹をカットするところから水鉄砲の製作をしました。

Thoughts:

試行錯誤しながらの挑戦でしたが、結果は大成功となりよかったですと感じます。参加した子どもにとって、ノコギリやキリを使用した工作は初めてだったようで、新しい挑戦に立ち会うことができ嬉しく思います。刃物による怪我の心配もありましたが、事前に耐切創手袋を用意するなどの工夫したことによって無事に終えることができました。



## 6. いつでもボランティアチャレンジ

### 海イベント

Date/Place: 8/4, 海の公園(横浜市金沢区)

Participants: 25人(学生12人、子ども8人、関係者5人)

Details:

各学生が子ども1人と組み、自由に海で遊びました。

Thoughts:

ヤドカリや貝殻を集めたり、海藻を拾って身にまったりするなど、学生と子どもが一緒になって全力で遊ぶ姿がみられ、充実した1日となりました。暑い中での活動でしたが、こまめに水分補給や休憩の声かけを行い、安全にも十分配慮しました。



### 全体の振り返り

新しい試みであったホテル観察と水鉄砲づくり、そして昨年度も人気があった海イベントを今年も実現することができて嬉しく思います。各活動において、学生と子どもと一緒にさまざまな体験を共有できたことは大きな成果でした。参加者双方からは「楽しかった」「よかった」といった感想が多く寄せられ、活動を有意義なものにすることができました。

課題としては参加人数が不安定だった点です。通常、一度の活動に学生10人程度、子ども5人程度が参加していますが、水鉄砲づくりの企画は学生と子どもの両者の人数が少ない結果となりました。その原因として、学生のスケジュールを十分に考慮できなかったことや、子どもの募集先であるフリースクールへの告知が十分に行き届かなかった点だと考えています。今後、大学の新しいスケジュールに十分考慮すること、また、連携先であるフリースクールへの訪問や連絡をより積極的に行い、つながりを強化することでより良い活動につなげたいと考えています。



### About Us

Piece of Natureは、不登校経験者の学生が、授業だけではなく体験学習の機会も少なかった経験から、似た状況にある子どもたちに学校によらない体験学習の機会を作りたいという思いから始まりました。この考えに共感する他の明学生が集まり、2023年度から活動を開始しました。

月に1-2回、舞岡公園を中心とした近隣施設で、自然体験を中心とした体験学習を実施しています。



Piece of Nature

## 音楽の国際交流～中華と日本～

明治学院大学愛好会吹奏楽部

【活動実施日】 2024年8月26日

【活動実施場所】 学校法人横浜山手中華学校 体育館

### 【活動内容】

私たちは、夏季休暇中に演奏を聴いてもらう機会がないことをきっかけに、普段吹奏楽に触れ合う機会の少ない子どもたちに演奏を行いたいと考え、中華学校向けの演奏会を企画した。

当日は、アフタースクールの一環として演奏会を開催した。まずは、ディズニーやジブリの楽曲を演奏することで、それぞれの楽器やその奏でる音、特徴などを知ってもらい、またクラシックの曲を実際に聴いてもらうことで吹奏楽とはどういうものか知ってもらった。次に事前に作成してもらった手作りのマラカス（ペットボトルにビーズなどを入れたもの）を用いて一緒に演奏をし、また演奏に合わせて体を動かしてもらうことで、音楽や吹奏楽が楽しいということを感じてもらった。普段とは異なり小学生に楽しんでもらえるように意識した。

演奏会までの練習期間では、私たちも子どもたちに喜んでもらえるように、まずは私たち自身が楽しんで演奏することを意識し、良い演奏を届けられるように練習に励んだ。

### 【活動を通して得た学び】

演奏会を通して、まずは子どもたちに喜んでもらえたことが何より喜ばしいことで、成功したのではないかと感じた。聞いてくれた様子を見て、子どもたちは私たちが想像していたより元気で、曲に乗って楽しんでくれていた。また、私たちもいつも以上に観客に楽しんでいただいていることを実感できて、より活気あふれる演奏ができた。自分たちの演奏が届けばこんなに喜んでもらえると学び、この雰囲気を感じてこれからもよい演奏を心掛けたい。



子どもたちも手を挙げて  
元気にお返事頂きました！

楽器を上に挙げて

アピール！



とても楽しい演奏会になりました！

中華学校の皆さまありがとうございました！！

# まつりで HAPPY !

## 新体験

団体名「子どものカプロジェクト」

2024年8月24日(土)・10月12日(土) 魚籃寺・港区立芝公園

### — 活動内容 —

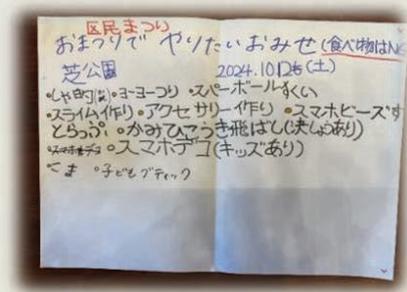
社会学部社会福祉学科金子ゼミと交流のある白金・高輪地域の小学生たちがもっと地域や大学とつながれるイベントを開催したいと考え、企画した。都会の学校生活で生きづらさを抱える子どもたちも含めて、大学生や地域の大人との協働した経験により、学校や家庭とは違う自分や、仲間とつながる楽しさを発見できる場所づくりを目指して、2つのイベントを開催した。「夏休み宿題大作戦」と「みなと区民まつりで新体験！」である。

#### (1) 「夏休み宿題大作戦」

8月には、子どもたちを地域のお寺に呼び、夏休みの宿題のサポートや学習教材を使った学習支援を行った。学習時間のあとは、レクリエーション時間や軽食タイムも取りながら、次回のみなと区民まつりの出し物について話し合った。



勉強する様子



話し合いで出た案



## 教科書を寄付してタンザニアへ支援しよう！！

STUDY FOR TWO 明治学院大学支部

活動日時：2024年7月23日～7月29日（27、28日除く）

活動場所：明治学院大学横浜校舎 ボランティアセンター

### 活動内容

私たち STUDY FOR TWO はタンザニアの女子教育をよくするため、また大学に通う学生が教科書を買ひ揃え、誰でも勉強ができる世界にしたいという思いで活動しています。その活動の一環として、大学生から教科書を寄付してもらい、それを販売し、出た売り上げを途上国の支援金としてタンザニアの女子教育に充てています。そこで今回、「**明学生にタンザニアの教育課題や国際的な女子教育の問題について伝え、国内にいても教科書を寄付することで、タンザニアに支援ができる国際ボランティアに触れてもらいたい**」と思い立ち、いつでもボランティアチャレンジに応募しました。具体的な活動としては、使い終わった教科書を寄付していただき、その際にタンザニアの早期結婚による女児の教育からのドロップアウトや中等教育に上がる際の言語の切り替わりなどの問題点を伝えながら、寄付された教科書が女子教育者の講師派遣や教科書代などの支援に繋がっていることをお話させていただきました。また、支援や活動の内容をパネルやポスターにし、ボランティアセンターの外に展示することで、来場した学生だけでなく、通りかかった学生にもこの活動が分かるように工夫しました。

### 活動を通して得た学び

今回のいつでもボランティアチャレンジは、私たちの活動をもう一度見つめ直すきっかけになったと思います。学生に支援先の状況や団体の活動を説明するために、タンザニアの教育制度を調べ直し、会議も開きました。当日は教科書の寄付してくださった学生さんとお話をさせていただき、この活動を少しでも広められたと実感できて、とても嬉しかったです。また、当日の来場者数が少ない日が多かったことから、次回の回収に向けて広報のやり方などを見直したいです。今後、STUDY FOR TWO としては一人でも多くの人に私たちの活動を届けること、そしてタンザニアへの年内1000万円の寄付を目標にして活動しています。それに向けて明学支部もグローバルフェスタやボランティアに関係する展示会等に参加し、知名度の向上を図ります。

## 6. いつでもボランティアチャレンジ



(寄付してくれた学生さん)



(外で宣伝したときの様子)

こんにちは！  
私たちは  
**STUDY FOR TWO**  
です！

教育で人生が、  
世界が、  
未来が変わる

私たちの活動について

- ① 使い終わった教科書を回収する
- ② 寄付していただいた教科書を安価に販売
- ③ 教科書販売の利益で途上国の子どもたちを支援

教科書を半額以下の価格で提供し  
大学生の学習のハードルを下げる

寄付による  
教育機会の提供

明治学院大学支部では、  
春と秋に教科書販売、夏と冬に  
教科書回収を行っています。  
日々話し合いを重ね、  
よりよい活動のため奮闘中です！

Volunteer Center  
本プロジェクトは「明治学院大学ボランティアファンドいつでもボ  
ランティアチャレンジ」の実施を助けています

**STUDY FOR TWO 明治学院大学支部**

(展示したポスター画像)



### 【活動概要】

現在、都会に人口流入する一方で、地方は人口減少が進んでいます。しかし、「何もない」とされがちな地方には豊かな自然や文化がたくさんあります。こうした価値あるものを持つ地方がそのまま廃れていくのはとても残念なことです。そこで、これまでの活動で私自身たくさん「いいとこ」を見てきた高知県四万十町を題材としながら、都会の人にこそ地方の「ええとこ」（いいとこ）を伝え、地方活性化に貢献すべく活動を展開しています。

今回の活動内容としては、現地住民の方にインタビューを実施し、「四万十ええとこ通信」として地方暮らしPRのフリーペーパーを作りました。また、明治学院大学白金キャンパスと横浜キャンパスにて「四万十ええとこフェア」を開催し、四万十町の魅力を学生教職員にPRしました。

◎活動日時:2024/08/20～2024/10/28 ◎活動場所:高知県四万十町、東京都港区、神奈川県横浜市など

### 【フリーペーパー制作】

四万十町PRフリーペーパー「四万十ええとこ通信」制作にあたり、現地で以下の皆さまにインタビューを行いました。



#### ・高取眞一さん (Vol.1)

四万十町に移住し米農家となった高取さんに「田舎暮らしの魅力」について伺いました。「不便が幸せ」という言葉に象徴されるように、不便さが人と人のつながりや助け合いを生むこと、自然の豊かさや厳しさを共有する仲間の存在が、都会にはない幸福感をもたらしていることが伝わりました。

#### ・那須詩音さん (Vol.2)

四万十町役場で地域活性化に取り組む那須さんに、「若者に求められる役割」についてインタビューしました。同じ20歳（取材時）ということもあり、若い時期に多くの経験を積む重要性を学びました。「チャンスがあったらやってみる」という姿勢が柔軟な発想で地域活性に貢献する鍵であることを感じました。

#### ・島岡和子さん (特別編)

無農薬栽培を実践する島岡さんに、農薬使用が主流の現状への危機感や「食」への意識の重要性について伺いました。また、四万十の郷土料理「椎茸のたたき」と「生姜ごはん」のレシピを特別編に掲載し、読者が四万十の食文化を自宅で楽しめるよう工夫しました。

・その他、インタビューした方に教えて頂いた「四万十町のええとこ」と、当団体が見つけた「ええとこ」をフリーペーパーに掲載しました。掲載にあたって松葉川温泉さま、四万十町観光協会さま、スカイヒルグランピング四万十の星空さま、四万十町地域おこし協力隊さま、道の駅めぐり窪川さまにご協力をいただきました

### 【四万十ええとこフェア開催】

四万十町の「ええとこ」をより多くの人に楽しくPRするために明治学院大学白金・横浜両キャンパスにて「四万十ええとこフェア」を1週間ずつ開催しました。四万十町の魅力を「川」「森林」「海」「文化」など様々な面から写真パネルや展示品でPRしたほか、四万十町銘菓「芋けんぴ」の配布やミニコンサートを開催しました。以下、各展示ブース/イベントの詳細です。



・ **川の魅力** 四万十川の魅力を写真パネルやパンフレット、天然水などの展示品でPRしました。四万十川について既知っている学生も多くいましたが、実際の写真を見て「こんなに綺麗だとは思わなかった。」「川で遊びたくなった。」という感想を話していました。こうして関心を持ってくださった方が観光で訪れやすいように、川の観光についてまとめた「四万十町 水の旅」などいくつかのパンフレットも展示しました。

・ **森林の魅力** 四万十町の森林について、写真パネルやヒノキ原木、ヒノキおがくず工芸品等の展示品でPRしました。特にヒノキおがくずは匂いを楽しんでいた来場者が多くいらっしゃいました。また、四万十ヒノキなどをまな板などの商品に加工して販売している、高知県須崎市株式会社土佐龍さまの展示も併せて行い、伐採から実際の商品として身近な形となるまでの過程を示しました。

・ **海の魅力** 四万十町の水について写真パネルでPRしました。海水浴でにぎわう様子などを映した写真やカツオ丼の写真が特に好評でした。また、この展示にあたってはクラインガルテン四万十さまよりいくつか写真提供を頂きました。

・ **文化の魅力** 「四万夢多」の演舞や郷土料理を写した写真パネルや四万十町名産品「仁井田米」や「天日塩」、街歩きパンフレット等で豊かな四万十町の文化をPRしました。

・ **守られた自然** 展示の終盤は「ここまでの美しい自然は守られたものだった」ということを示しています。窪川原発立地騒動です。反対運動の旗手となった島岡幹夫さんに取材を行い、豊かな自然の尊さを来場者に伝えました。そのうえで、守られた尊い自然をどう生かすかという問いかけをこれからの時代を作っていく皆様にできたのはよかったですと感じています。



・ **予土線コーナー** 四万十町を走る風光明媚なローカル線「予土線」を写真パネルやパンフレット等でPRしました。四万十川を右に左に眺めながら走る予土線の旅は大変魅力的です。観光や地域の足として愛されながらも、経営が厳しい予土線を応援するため、南予地方局さまよりご提供いただいた「YODOSENサポーター」のパンフレットも配布しました。

・ **各種イベント** 常設展示以外にも様々なイベントを行いました。四万十町名物「芋けんぴ」や四万十ヒノキの「香り袋」の配布イベントをはじめ、四万十川での川遊びを疑似体験できるVRイベントや、四万十町のええとこを伝えるオリジナルソングを作り、ミニコンサートをを行いました。これらイベント開催日には多くの方に参加していただき、大変盛り上がりしました。

### 【活動を通じた学びとこれからの展望】

冊子制作やフェア開催を通じて、多くの方に四万十町の魅力をPRできただけでなく、活動を通じてメンバー自身も四万十町の良さを再発見することができました。この活動の中で、地域が持つ多彩な魅力や可能性に気付かされ、地方には多くの人を惹きつける独自の力があると改めて実感しました。四万十町で感じたのは、掘り下げれば下げるほど新しい発見があり、地域の奥深さが尽きないということです。この豊かさが失われることなく次世代へと引き継がれるよう、引き続きその魅力を発信し続けたいと思っています。

具体的な展望としては、四万十町の街をもっと楽しんでもらうための街歩き案を作成し、それを効果的に発信していくことを計画しています。また、地域ならではの自然や文化を体験できる体験型ツアーの実施も視野に入れています。例えば、地元の特産品を活かした料理教室や、伝統工芸の体験、さらには四万十川流域の豊かな自然を活かしたエコツアーなど、多様な形で地域の魅力を感じてもらえる仕組みをつくりたいです。こうした取り組みを通じて、訪れる人々に四万十町の魅力を深く味わってもらわなくても、地元の人々自身がその価値を再認識し、誇りを持てるようなきっかけを生み出したいと考えています。

地方には、まだ多くの人に知られていない宝物のような魅力が眠っています。その魅力を掘り起こし、発信し、訪れる人々と地元の人々との交流を生み出すことで、地方の未来をより豊かなものにしたというのが私の目標です。四万十町での経験を基に、今後も地域の魅力を最大限に活用し、持続可能な地域づくりに取り組んでいきたいと思っております。

2024年11月18日

## 活動報告書

藤井ゼミ

活動実施日：2024年10月18日

活動実施場所：介護老人保健施設 相川愛広苑

活動内容：高齢者施設での傾聴・レクリエーションボランティア

## ～活動に至った経緯～

ゼミ合宿の企画をする際に「高齢者の方と実際に関わりを持ちたい」「実習で得た経験を生かした活動をしたい」とゼミメンバーから声があった。担当教員の藤井先生の紹介で、佐渡市で医療と介護の連携を支援する方の協力のもと、ゼミ合宿を行うことになった。

実習を通して、施設で暮らす高齢者にとって人と会話をする時間が、業務の多様化や職員の人手不足によって、確保できていないという課題が多くのメンバーから挙がった。それを受けて、高齢者施設での傾聴ボランティアの発案に至った。

## 【ボランティア活動内容】

## ◎自己紹介 14:00～14:15

- ・各テーブルに3、4人の利用者と学生1名ずつがつき6グループに分かれる。
- ・自己紹介のとき名前はメモ用紙などに書き、伝える。



\*利用者は、「どこの大学から来たの?」「出身はどこ?」と、積極的に話してくれていた。東京や神奈川に行った時のことや、佐渡と比べた印象などを話してくれた。

## ◎漢字連想ゲーム 14:15～14:25

- ・利用者Aさん(男性)に出題漢字を考えてもらい、「金」を選択した。(このとき、「誠」も選択肢に挙げてくれた。理由は聞かなかった。)
- ・5チームに分かれて行った。
- ・最大で15個の言葉を連想することができた。

例)「佐渡金山」「金鶴(日本酒)」「金メダル(オリンピック選手などに派生)」

「鉾山祭り(7月にある地元の祭り)」「金魚」「キンメダイ」「金曜日」など

## ◎傾聴

- ・各テーブルを4、5分ごとにローテーションしながら、傾聴を行う。
- ・住んでいる地域や、出身地、佐渡のおすすめの場所などの話を振ると、過去に住んでいたところを順番に教えてくれたり、小さな頃の話などをしてくれた。
- ・佐渡で19日に行われる相川まつりについて、佐渡金山の歴史、「海鮮がおいしいからぜひ食べてほしい」と教えてくれた。

\*世界遺産に認定されたばかりということもあり、旅行客が増えていることを喜んでいる人もいたが、外出の機会が少なく施設外の様子があまり分からないと言っている人もいた。

### 【利用者との関わりから学んだこと】

- ・地域への誇りと愛着が、この地域にずっと住んでいたいという思いを生んでいると感じた。利用者と接するときにはそれらを意識して、本人に自発的に話してもらえるように努める。そこから広げて個別的な話に繋げていけると、警戒心を軽減できると学んだ。



- ・利用者は独居であってもなくても、多少の孤独感を持っていると感じた。それには、施設を利用するに至った経緯が関連している。佐渡の高齢者の傾向として、自分の力で生活していくことにこだわりがあり、サービス利用に積極的ではないことが挙げられる。そのため家族の勧めや、やむを得ない身体的な理由で利用を開始している人が多かった。施設を利用することに罪悪感を持っているのかもしれないと感じた。

### 【反省点】

- ・傾聴の際、質問項目を役割分担しておけばより多く話ができたとと思う。6人のメンバーで各机のローテーション形式で順番に活動を行ったので、全員が同じような質問や話を振り内容を深めることが難しくなってしまった。出身地や家族についてなど、大まかにでもテーマを決めて、傾聴できるとよかったと思う。このときそれぞれが利用者とは初対面であることも考慮し、質問内容を考える必要がある。



## パタゴニア “Worn Wear College Tour”

申請者： 林公則（国際学部教員）

活動実施日・場所： 2024年11月6日（水） クラララウンジ

### ○活動内容：

社会的企業として有名なパタゴニアに勤める国際学部の卒業生から、横浜キャンパスで「Worn Wear College Tour」を実施したいという相談があった。話を聞いたところ、明学生、明治学院大学、ボランティアセンターなどにとっても貴重な機会になると思い、イベントの開催をお手伝いしたいと考えた。イベントの実施に際して、明学生と連携しながら独自の取り組みをしていきたいということであり、関わる学生の学びにつながる点もこのイベントをサポートしたいと思った理由である。

パタゴニアとの調整、学内での調整など、準備段階では紆余曲折あったが、パタゴニアに企画を実施していただくだけでなく、現役生・卒業生も企画を考え実施することができた。

イベント当日は、パタゴニアによるリペアサービス、MGCによる古着のアップサイクル、国際学部卒業生や現役生による発表、そして私がファシリテーターとなつての哲学対話（テーマ：「服って何着必要？」）などが実施された。上記を通じて、環境に対するインパクトが大きいアパレル産業界において、いかに消費を抑えられるか、修理やリユースを増やして一着を長く使い続けられるか、リサイクルを最後の手段として消費のサイクルに戻していけるかなどをみんなで考えることができた。





○活動を通して得た学び：

「パタゴニアと学生・大学・ボラセンとを結びつけるきっかけをつくり、今後の新たな取り組みの出発点とする」ことを本活動の目的としていたが、実施後にパタゴニア担当者から「今回のイベントを通じてさらに関係性を築けることができました」との言葉をいただいたことから目的を達成できたと考えている。今後、今回生まれたつながりを大学全体として維持・発展させていけるかが課題である。

私個人としては、明治学院大学の卒業生や現役生が数多く関わって今回のイベントを成功させる姿を見られたことが嬉しかった。このような機会をまた作れればと思う。ボランティアセンターの協力なくしてはこのような場を生むことはできなかったもので、感謝したい。



### 第3回映画上映会「ガザ＝ストロフ-パレスチナの吟（うた）-」 社会派映画同好会

2023年10月7日以降、イスラエルによるガザ住民の虐殺が続き、停戦の兆しも見えない状況にも関わらず、自分を含め多くの人が無力感あるいはどこか遠くのこととして感じている。しかし、私たちが無関心・無力感の中に閉じこもっている間にも、虐殺はつづき、そればかりか消費行動や投票行動、無行動等を通して知らず知らずのうちに私たちも虐殺に加担している。パレスチナ/イスラエル問題を学ぶうちにそのことを意識させられ、微力ではあるが虐殺を止めるために、一市民として、何か行動を起こしたいと思うとともに、同じ問題意識を持っている人がいることを可視化したいと考え、パレスチナ/イスラエル問題に関する映画の上映会と、トークセッションを企画した。

2024年11月8日に横浜校舎8号館822教室で、映画「ガザ＝ストロフ-パレスチナの吟（うた）-」を上映した後、感想や考え・思いなどを共有するトークセッションを行った。上映にあたって注意したのは、当日の上映会に、学年・学科を超えて様々な人が参加できるように、口コミだけに頼らず、学内でのビラ配りや、国際学部全体に情報が回るように教員に告知をお願いするなど幅広く宣伝をした。

企画には23名の方が参加してくれた。映画鑑賞を通じて、イスラエルによる封鎖と軍事侵攻が行われているガザで生活する住民の声や思い、表情を見ることができた。また、学外者の方の参加も多く、トークセッションでは、各々がそれぞれ問題への思いを語るとともに、ガザのために実践している活動を共有することができた。

ビラ配りや宣伝を工夫したが、口コミからの参加者が多かった。おそらく多くの学生が授業やアルバイトなどに勤んでいる時間帯に上映会を設定してしまったので、今後は実施する時間を考える必要がある。また、新しい人が入りやすい雰囲気を作るためにより工夫する必要がある。この企画を単発で終わらせるのではなく、ガザのためにできることを多方面から行いたい。



## 認知症についての理解を地域住民に広めよう！

### いつでもボランティアチャレンジ報告書

活動日:10月31日「認知症とともに生きるまちへ！」地域ミーティング

企画者:金ゼミ

#### 【活動内容】

ゼミナール活動の話し合いの中で「地域住民全員が認知症について正しい理解をすることが重要」「認知症に関する情報取得が難しいことが課題」という意見が出ました。そこで、私たち学生に何かできることはないか考え、認知症に関する情報を載せたノベルティを作成し、「認知症とともに生きるまちへ！」地域ミーティングにおいて配布することを決定しました。

ノベルティ表面にはゼミ生が作った認知症に関する4コマ漫画を載せ、裏面には認知症オレンジカフェと認知症パンフレットの情報をQRコードにして掲載し、直接情報にアクセスできるように工夫しました！



👉ノベルティは330個作成しました！



👉4コマ漫画の1例です！

#### 【活動から得た学び】

地域ミーティングに参加した住民の方々や専門職の方々に配布を行い、たくさんのお褒めの言葉をいただくことができました。特に4コマ漫画が好評で、これをきっかけに少しでも認知症を身近に感じて正しい理解が深まればよいなと思いました！



一方で、裏面の認知症オレンジカフェと認知症パンフレットの情報に飛ぶことができるQRコードは、読み取り回数がほとんどなく、難しさを感じました。

今後も認知症の正しい理解を広める活動を行っていきたいと思います！

## A week for Palestine

### Students for Justice in Palestine at MGU

“A Week for Palestine”は、ガザで進行中のジェノサイドについての認識を広めるために11月25日から29日に開催した対話形式の展示会です。この問題は日本国内や本学内でほとんど語られることがなく、私たちは来場者が展示を通じてパレスチナの現状を学び、より多くの人々がこの問題について考え、支援の方法を模索するきっかけとなることを目指しました。

イベントでは、ガザで犠牲となった方々の名前リストや詩、殉教者の物語などをまとめたポスターを展示しました。また、より参加型のアクティビティとして「パレスチナ国旗ピン作りワークショップ」を実施し、来場者が連帯の意を示す場を提供しました。さらに、パレスチナ文化を身近に感じてもらうために、パレスチナ風の紅茶とデザート（ナツメヤシの実を乾燥させたドライフルーツ）を振る舞いました。事前準備として、キャンパス内でのポスター掲示やSNSでの告知を行い、多くの学生にイベントを知ってもらうよう努めました。また、8名のチームメンバーでシフトを組み、イベント期間中は常に対応できる体制を整えました。イベントでは多くの新しい来場者が訪れ、展示内容について質問をする姿が見られました。会場のクララ・ラウンジは人通りも多く、ポスターを読んで足を止める学生がいたり、写真を撮ってSNSで発信する人も多く、特に国旗ピン作りワークショップは、座って学びながら連帯を示せる良い機会になったと好評を得て、成功を収めました。

このイベントは、団体として初めてのイベントであり、ボランティアセンターと協力できたことはとても嬉しかったです。企画の段階では、多くの教職員の方々から温かい支援をいただき、励みになりました。

しかし、いくつかの課題にも直面しました。メンバー全員が多忙なスケジュールの中で計画を進めるのは難しく、放課後などを利用して調整しました。また、パレスチナ産のデザートを提供したかったのですが、ガザの封鎖により輸入が困難だったため、これを学びの機会とし、パレスチナの人々が直面している現実を伝えるきっかけとしました。

来場者が少ないかもしれないと心配しましたが、予想以上の方がお越しくださいました。参加者の反応は非常に前向きで、多くの方が共感を示してくれました。特に、犠牲者の名前リストの長さに驚き、ガザでの殺戮の実態を初めて知ったという声が多く聞かれました。このイベントを通じて、チームとして協力し合うことの重要性を学びました。それぞれ異なる強みを持っていることを理解し、それを活かすことでチームをまとめ、成功させることができました。また、変化を生み出すためには、互いに支え合い、一緒に行動することが不可欠であると実感しました。



## 持とう！自信！守ろう！体！明学コンドーム設置プロジェクト

明学生による明学生のための性の健康グループ

### 【活動内容】

この企画を実施するに至ったのは、昨年いつボラを利用して開催した、性感染症に関するコンドーム配布とワークショップがある。コンドームの身近さを感じてもらい、それを通して性に関する会話のきっかけを作ってもらう目的があったが、学生に配った際、様々な反応があった。これを踏まえて、避妊目的だけでなく性感染症の予防にも役立つことを学生に知ってもらうことに加え、より気軽に手に取れるようにすることを目標として、健康支援センター・ボランティアセンター協力のもと、コンドームを自由に受け取れるようBOXを設置、合計で200個のコンドームを配布した。また、明学生にコンドームを身近に感じてもらいつつ男性が持つ物というイメージの緩和のため、パッケージを①ボランティアセンターロゴ②「It's better than nothing」の2種類をプロジェクトメンバーと一からデザイン、また普通のMサイズとフレーバー付きMサイズを用意した。さらに設置場所での案内ポスターには、職員に声をかけなくても受け取りが可能なことや性感染症に関する簡単なPOPを掲示するなど、学生目線で受け取りやすさや抵抗感の払拭を工夫し、企画を実施した。結果として、設置開始から2週間ほどでコンドーム200個が明学生の手に渡り、明学生の性意識向上に貢献することができた。



ボランティアセンターに設置した様子



健康支援センターに設置した様子

## 【活動を通して得た学び】

昨年に引き続き、いつボラ実施の許可を頂き、ボランティアセンターの職員の皆様には大変感謝申し上げます。また、今回学生企画として condom 設置の許可と管理を快く受けてくださった健康支援センターの皆様にもご協力いただいたこと、感謝いたします。昨年のいつボラでの経験を活かし、学生の condom に対する、表で話すべきではない・話にくいといった雰囲気や少しでも緩和したく、ポスターの文言や極力人の目線を感じずに受け取るにはどうしたらよいか、をプロジェクトメンバーの本間と何度も話し合いをしました。職員の皆様にも「なるべく受け取りに来る学生を見ないでほしい」というプロジェクトの想いをご理解いただきました。そのご協力もあり、当初設定していた設置期間よりも1週間ほど早く、全200個が学生の手に渡りました。パッケージ裏には本間が作成した簡単な意識調査アンケートを印刷しましたが、「友達から聞いて受け取りをした」と回答してくれた学生や女子学生からの回答も見られ、学生同士での性に関する会話の突破口になり、抵抗感、特に女性からのものを緩和することができたのではないかと考えております。また、特に印象に残っている内容としては私生活で気になっていることとして「値段が高い」がありました。必要になったタイミングで、condomを購入するにはコンビニが手軽ですが、3個で¥700ほどかかり、確かに人によっては出しにくいと感じる学生もいることを改めて課題として認識しました。このアンケートを踏まえ、値段や人の視線、男性が使うものといったイメージなど、考えるべき問題の多さを実感しました。とはいえ、今回の企画で明学生にとって condom が必要とされていること、無料且つ無人で受け取れる condom の需要を強く感じ、来年度も引き継ぐ学生か職員がいることを1明学生として願い、この企画を終了とさせていただきます。(プロジェクトリーダー 21ks1159 松田実久)



ご協力いただきました、ボランティアセンターの方々、健康支援センターの方々、本当にありがとうございました。そして、誘ってくれた松田にもとても感謝しています。パッケージやポスターの、無関心無関係ではない、いつかは今日かもしれない、こうした想いを込めた、「あったほうがいい」というキャッチコピーは二人で夜な夜な案を出し合って生まれた言葉でした。アンケートも興味深い反応がたくさんあり、今後校内で企画をすることができないのが心残りですが、在学生に少しでも性感染症や、condomの役割について考えを巡らせるきっかけとなっていれば嬉しいです。

(サブリーダー 21ks1129 本間のどか)

## 1923年関東大震災時の虐殺を「記憶」するためのプロジェクト

社会学研究科社会福祉学専攻

博士前期課程1年

佐伯 賢

訪問日：2025年3月14日

訪問先：記憶と平和のための1923歴史館

(韓国・天安市)

## 活動内容

小池百合子都知事をはじめとして、現在の日本社会では関東大震災時の朝鮮人虐殺を否定する言説が流布している。『記憶と平和のための1923歴史館』を私が知ったのは、そうした潮流に抗うために開かれた「関東大震災の朝鮮人虐殺から101年：パレスチナとともに」というプロテスト・デモにおいてである。館長の金鐘洙(キム・ジョンス)氏はこの集会にメッセージを寄せた。2020年に開館した1923歴史館は、日韓市民団体連帯の場となり、虐殺の歴史に関する資料を保存し、広く市民に公開する拠点となった。

本プロジェクトの目的は以下である。

「歴史修正主義に抗い、植民地主義に根差したレイシズムに対抗するため、この問題に取り組む日本および韓国の人々との連帯の基礎を深めること。」

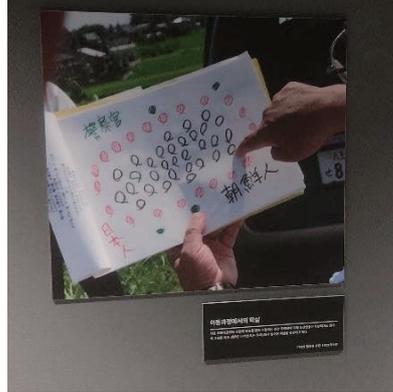
私はソーシャルワーカーである。それは反差別と社会変革に特徴づけられる職業だ。現地では私がなぜ1923朝鮮人虐殺の問題に関心を持つのかを説明した。金鐘洙氏の息子であり歴史研究者としてこの問題に取り組む金剛山(キム・ガンサン)氏は、「なぜ福祉を研究する人が虐殺の歴史に関心を持つのか疑問だった。」として、私の説明に納得を示してくれた。展示室には、震災発生当日(1923年9月1日)から虐殺が終息していく9月8日までを示した図と、当時の新聞社が虐殺を報じた記事、生存者や目撃者の手記、虐殺が起こった各地域での証言収集活動の様子などが紹介されていた。最後の部屋では、虐殺の犠牲となった人々を悼む追悼碑の拓本、各地での記憶や追悼の活動の記録が展示されていた。

## 活動を通して得た学び

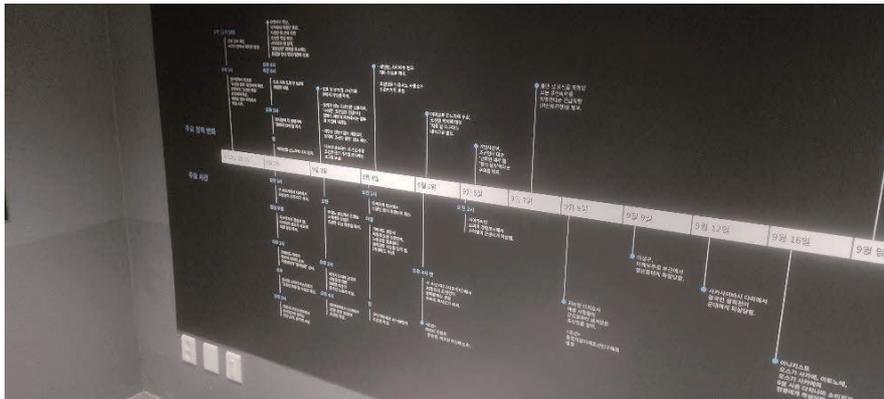
記念に頂いたトートバックの文字を翻訳する—『覚えていないことは繰り返す』。今の日本社会は積極的に忘れようとしている。いかにして忘却に抗うか。この旅でほかにも、植民地主義の暴力を記録するミュージアムを訪問した。そこでは決まってある考えが呼び

## 6. いつでもボランティアチャレンジ

起こされる—『なぜ日本にないのか』。展示物の多くは日本側が残したものである。なぜそれが日本で容易に見られないのか。加害を忘れれば繰り返し、被害を生む。「ただ見るだけでは忘れてしまう。」金鐘洙氏はそう語り、今日のように交流が生まれる場にしたいと述べた。私は日本で語る責任がある。



【証言収集活動の様子や当時の新聞報道が展示されている】



【虐殺の実態と、軍・警察・政府の行動を上下に分けて整理している】

506894101744411111



報告書



# ニューヨークから 横浜キャンパスへ 一核兵器禁止条約を知る

KNOW NUKES TOKYO MGU 主催  
明治学院大学ボランティアセンター ボランティア・カフェ 協力  
明治学院大学国際平和研究所 共催

概要

企画者：国際学科4年 本間のどか、安田大地  
実施日：3月1日～9日（本間：核兵器禁止条約締約国会議参加）、12日13:30-16:00（報告会）  
※本間は、3月3日から7日までNY国連本部で行われた、核兵器禁止条約第3回締約国会議にNGO枠（KNOW NUKES TOKYO）として参加しました。帰国後は共同企画者の安田の司会で、帰国報告会を横浜キャンパスで開催しました。

現地活動



現地時間3月2日に、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）が主催する、ICAN Campaigners Forumに参加しました。その際に、Peaceと書かれた帯を長崎で被ばくされた、被爆者の福島富子さんからお借りしました。世界中から集まった参加者と、福島さんに想いを馳せるひとときを過ごしました。



本会議の傍聴はもちろん、NGO枠として会議内で発言と質問の機会もいただきました。核兵器の部分的な使用を疑問視し、警鐘を鳴らしました。また、核兵器を本気で無くそうと世界中から集まった人々との交流は、勇気をもらうだけでなく、新たな視点からこの問題を捉えるきっかけとなりました。

渡航中、日本の若者に、会議の様子を届け、条約の認知度やこの問題への注目度を高めたいという思いで、毎日30秒程度の動画を作成し、KNTインスタグラムで発信しました。帰国後開催した報告会ではインスタグラムを見て足を運んでくれた人もいて、その効果を実感しました。



国際会議に出席する大学生の1日

本会議と同時並行で行われた、サイドイベントでは、主にグローバルヒバクシャの補償と権利に関するものに参加しました。日本の被爆者と比べ、研究が進んでいないことや、ほとんどその存在が知られていないことなどを実感しました。また、そこには潜在的な差別構造が潜んでいることもわかりました。



報告会



報告会は春休み中にも関わらず、対面では20名ほど、オンラインでも20名前後の方にご参加いただきました。私と安田だけの力ではここまで多くの人にリーチすることはできませんでした。共催いただいた国際平和研究所の方、ご協力いただいたボランティアセンターの方のおかげです。本当にありがとうございます。また、少しでも多くの方に会議の様子を届けたいという思いからメディアリリースを行い、神奈川新聞、東京新聞、毎日新聞、中国新聞に記事化していただきました。

かねてから安田との会話の中で、大学卒業後も平和活動が続けていくことは、様々な障壁があり、難しさを感じていました。そこで、同じ国際学科の卒業生で、長崎で「平和を伝える」を仕事にされている林田光弘さんをお呼びした、ボラカフェも同時開催しました。報告会のアンケートで、本間の会議のレポートについて、核問題に関心のない同世代との関わり方や、差別構造の上に成り立つ核産業についての反応をいただき、さらに学び続けていきたいと感じました。全体に関しては、双方向性や、進行への課題を指摘するご意見をいただきました。今後に活かしていきたいと思います。最後に、この度は多大なるご支援を賜り、誠にありがとうございました。現地にそもそも行けるのか、報告会の集客は望めるのか、不安ばかりでしたが、ボランティアセンター、平和研をはじめとした皆様のおかげで無事やり遂げることができました。本当にありがとうございました。

ポスター作成：安田大地

## 新生活

# スタートダッシュプロジェクト

2025年3月27日(木曜日)@磯子地域ケアプラザ

## smile

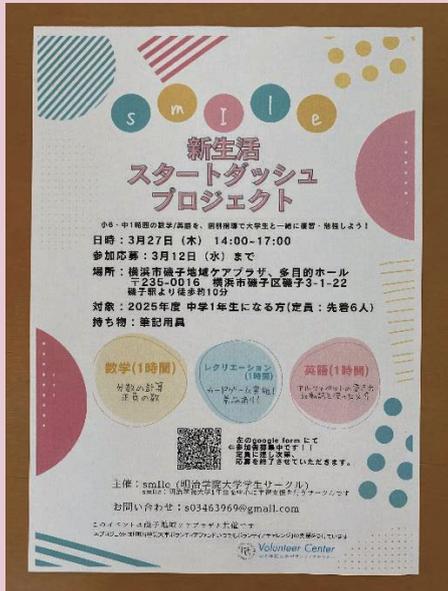
### 活動内容

磯子地域ケアプラザと共催で、新中学1年生向けの学習支援イベントを開催しました。磯子地域ケアプラザの方や、そこで行われている学習支援ボランティアの方に「新中学1年生向けのイベントを開催してほしい」とお話をいただきました。事前準備として、イベントを広告するチラシを用意して印刷し、様々な場所に配架させていただきました。また、無料学習プリントの印刷や景品の買い出しを行いました。当日は印刷したプリントを使用し、英語はアルファベットの書き方やbe動詞の肯定文、否定文、疑問文、数学は分数や正負の数の足し算、引き算を一緒に学習しました。加えて、参加者の希望に合わせ、国語の漢字プリントを学習しました。更に、アイスブレイクやレクリエーションとして、カードゲームを使用して皆で遊びました。英語や数学、レクリエーションを各1時間、合計3時間実施しました。イベントの最後に、参加者の方に景品をプレゼントしました。参加者は2名でした。

### 活動を通して得た学び

共通の趣味の話題で参加者と打ち解けることができ、皆と一緒に勉強するなど、楽しく和やかな雰囲気イベントを開催できました。また、参加者が学びたい内容に合わせて、柔軟にプリントを印刷して実施できました。一方、もっとたくさんの方がイベントに参加していただけるように、次回はイベントの広報をより工夫したいと思います。そして、当日焦ってしまった部分もあるため、事前準備をもっとしなければならぬと思いました。

配架したチラシ



当日の会場の様子



景品

蛍光ペン・ボールペン・付箋





### 活動を通して得た学び

今回の活動で特に印象的だったのは、輪島市にある重蔵神社での活動である。土曜日に行われる物資配布に参加し、列に並ぶ方々とコミュニケーションをとることができた。あるご夫婦は2人で4畳半の仮設住宅で過ごし、あるご家庭では崩壊した家の解体作業が未だに行えていないという。また地震を機に職を失い、現在も無職だという人もいた。そうした現地の人の声を聞くことで、復興の遅れを感じた。

また、大学のプログラムで参加するボランティアとは違い、活動や交通手段の手配を自分たちで行う必要があったので、準備がとても大変だった。メンバーで作業分担をしたからこそ、自分の担当以外の情報を把握できていなかったことが反省点である。

しかし、自分たちで準備したからこそ、活動先で関わった人の笑顔に達成感を感じ、目に見えない復興の遅れといった課題を見つけることができた。これは、今後の活動をよりよいものにするきっかけとなった。

今後はこの活動を活かして、戸塚まつりや報告会などで、明学と能登をつなぐ活動を継続することが我々の目標である。





## 四万十町雁皮紙再生プロジェクト

四万十ええとこ発信隊

22LA1116 田畑宏基

23JP1153 竹内聡汰

### 【活動概要】

「雁皮（ガンピ）」という植物をご存じでしょうか。雁皮はジンチョウゲ科ガンピ属の落葉低木で、高さは1.5～2mほどに成長します。四国や九州に多く分布し、暖かく山中の日当たりの良い場所に自生しています。古くから和紙の原料として利用されており、樹皮の繊維がきめ細かいため、高級和紙の素材として重宝されています。しかし、人工栽培が難しく、現在も主に自然に自生するものを採取して紙に加工する方法が一般的です。

かつて、高知県四万十川流域では雁皮の採取が盛んに行われていました。しかし、戦後のスギやヒノキの植林による自然環境の変化に伴い、四万十川流域での雁皮採取は次第に衰退していきました。それから半世紀以上を経た現在、NPO 法人朝霧森林倶楽部が中心となり、人工栽培を含めた雁皮生産の復活が目指されています。

本プロジェクトは、朝霧森林倶楽部さまのご協力のもと、雁皮の生産に直接貢献するとともに、雁皮紙の活用を通じて四万十町に息づく豊かな文化や産業の振興に寄与することを目的としています。今回は、雁皮の苗の植え付けをお手伝いし、持続的な雁皮紙の生産基盤を整えました。また、雁皮紙の活用に関する意見交換会を開催し、地域住民や関係者と共に新たな活用方法を模索しました。

このプロジェクトを通じて、四万十町の歴史や文化を未来へと継承し、地域活性化の一助となることを目指しています。

◎活動日時：2025/03/13～2025/03/17 ◎活動場所：高知県四万十町、高知県の町など



### 【雁皮の定植作業】

朝霧森林倶楽部さまが育苗された雁皮の苗、約140本を四万十町内の山中に定植しました。作業では、1m間隔で穴を掘り、空気をなるべく含まないように丁寧に苗を植え付けました。雁皮の適切な植え方については、朝霧森林倶楽部のメンバーの方々が丁寧に指導してくださいました。

私たちの役割は、すでに整地された土地に苗を定植することでしたが、そこに至るまでには多くの苦労があったと伺いました。雁皮を苗まで育てるには台風や高

温の影響を受け、大変な手間がかかったとのこと。また、日当たりの良い環境が必要な雁皮のために、山林を切り開きながら定植地を整備する作業も非常に困難だったと聞き、朝霧森林倶楽部の皆さまの雁皮栽培にける強い想いを感じました。

さらに、今年は苗の強度がやや弱いことに加え、イノシシによる害が発生しているとのことでした。雁皮栽培には、土壌との相性や動物による被害といった課題が伴うことも実感しましたが、苗が順調に成長し、今後の雁皮紙の生産につながることを願っています。



### 【雁皮紙活用の意見交換会】

朝霧森林倶楽部メンバーの方と明治学院大学メンバーで雁皮紙活用を目的とした意見交換会を行いました。まず、雁皮紙が他の和紙に比べて虫がつきにくく、長持ちする特性を活かし、四万十町の自然や文化・人など「忘れたくないもの」を雁皮紙にプリントし、何千年先までこれらの記憶を残すというアイデアが提案されました。さらに、これらの雁皮紙を展覧会で展示し、四万十町のPRに活用するという構想も浮上しました。



また、朝霧森林倶楽部のメンバーからは、四万十町で雁皮をブランド化し、地場産業として確立することを目標とする意見が出ました。これにより、製紙業界に安定的に供給することが可能となりますが、産業化のためには現在よりも収量や人手を増やすことが課題となります。そのため、まずは展覧会を通じて文化・芸術面から雁皮紙の認知度を高め、その上で地場産業（経済面）としての需要や生産協力者を開拓するアプローチが有効ではないかという提案もなされました。

近年、デジタル化の進展により、膨大な写真や文献がデータとして蓄積されていますが、データは必ずしも恒久的なものではありません。保存先のサービスが終了すれば消失するリスクがあり、ファイルの破損によって閲覧できなくなることもあります。一方で、紙という物理媒体は、焼失や汚損などのリスクこそあるものの、丁寧に保存すれば何千年先にも残すことができます。すべてをデジタルにするのではなく、紙として記録することも重要だと感じます。そのためにも、雁皮紙の長持ちする性質は大いに有効であると考えます。

こうした背景から、四万十町産の雁皮紙の活用方法として、「忘れたくない四万十町の記憶を雁皮紙に託す」という考え方は非常に価値のあるものだと感じました。文化・芸術面、経済面の両面から雁皮紙の活用方法を模索し、具体的に実行可能なアイデアが生まれるなど、活発な意見交換の場となりました。

### 【製紙工場での意見交換会】

意見交換会で出たアイデアの実現に向けた課題を探るため、私たちは朝霧森林倶楽部のメンバーとともに、高知県の町にある鹿敷製紙株式会社さまを訪問しました。ここでは、和紙の製紙技術に精通した専門家の方々から貴重なご意見をいただき、実際の製紙工程も見学することで、雁皮紙の可能性と課題を具体的に理解することができました。



まず、雁皮紙の製紙自体が非常に難易度の高い技術であることが分かりました。特に、大判サイズの紙に写真をプリントすることには技術的な制約があり、現在の製造技術では難しい面があるとのことでした。一方で、雁皮紙はカラー写真の印刷には適しているという意見もあり、四万十町の美しい自然風景をカラーで記録するなど用途によっては有効活用できる可能性が見えてきました。

また、雁皮紙そのものは何千年も保存できる耐久性を持っていますが、そこに印刷する写真や文字がどれほど長期間維持できるのかという問題が指摘されました。特に、使用するインクの種類や印刷技法によっては、時間とともに色褪せたり、劣化したりするリスクがあるため、紙の品質だけでなく、適切な印刷技術の開発や選定も今後の重要な課題となります。

今回の訪問を通じて、雁皮紙を活用したプロジェクトの実現に向けては、まだ多くの課題があることを認識しました。しかし、専門家の意見を参考にしながら、一つひとつ丁寧に解決策を模索し、実現可能な形に落とし込んでいきたいと考えています。

### 【活動を通じた学びとこれからの展望】

今回の活動を通じて、雁皮紙の生産や活用に関する課題と可能性を深く学ぶことができました。雁皮紙の定植作業では、自然環境の変化や動物による被害など、栽培の難しさを実感しました。また、意見交換会では、雁皮紙の文化的・経済的価値を高めるためのアイデアが多く出されました。特に、「四万十町の記憶を雁皮紙に託す」という考え方は、デジタル化が進む現代において、紙媒体の価値を再認識する契機となりました。

製紙工場訪問を通じて、実際の製紙工程や技術的課題も明らかになりました。雁皮紙への写真印刷や耐久性の向上など、実現に向けた課題は多くありますが、一つひとつ解決しながらプロジェクトを前進させたいと考えています。今後はさらに雁皮紙の活用方法を探求し、地域活性化に貢献できるよう努めていきます。

## 7. 1 Day for Others (通称：1Day)

### (1) 総括

2024年度の「1 Day for Others(1日社会貢献プログラム)」は、年間105プログラムを企画し、延べ371名の学生が社会貢献活動を体験した。新型コロナウイルス拡大の影響から「1 Day for Others」も、2022年度までは縮小せざるを得ない状況が続いていたが、2024年度にはコロナ禍以前も含め、年間プログラム数は過去最多を更新した。様々な現場で学生が活動させていただく機会をいただけたことは、受入団体の皆様のご尽力があったからこそであり、この場を借りて感謝申し上げたい。

2024年度のプログラム内容について、企画の段階で意識をして受入団体の皆様と検討したことは、学生が現場でリアルな社会課題に触れることができるかという点である。さらに、少人数でのプログラムを多く実施することで「明治学院大学から来た大勢の中の一人」と埋もれてしまうのではなく、「活動を自分事」として捉えてもらうことを意識し、一人ひとりが主体性を持って活動することにつながったと考える。その結果として、活動後に、受入先での活動を継続している学生や、活動をきっかけとして将来の進路が見えてきた学生も見受けられた。

また、2024年度は、16団体の皆様とプログラムを新設した(延べプログラム数:28プログラム)。うち、4団体は学生団体であり、3団体は教員・コーディネーター・他部署からの紹介で新たに関係構築した。ここまでの受入団体の皆様との関係性が基盤となりプログラム新設に至ったケースが多く、学内での連携も着実に実になっていることが伺える。

今後は、プログラム数という“量”の追求のみならず、一つひとつのプログラムの“質”の追求も視野に入れ向き合っていく。学生に提供できるプログラムの幅が広がるケースや、学生はじめ学内者が主体的に企画したケースなど、参加学生にとって魅力的なプログラムや今後の学内連携の活性化につながるようなプログラムは、新規プログラムとして積極的に取り入れる一方、既存プログラムについては、「学生が現場でリアルな社会課題に触れることができるか」などの観点で、受入団体の皆様ともご相談しつつ、適宜見直しを図っていきたい。

“量”と“質”の追求という、ときに相反する場面もあるかもしれないが、ここに向き合っていくことが、「はじめの一歩として1日だけボランティアに触れてみる間口の広いプログラム」という性質の「1 Day for Others」を、多くの学生にとってさらに魅力的なものへと進化させる要素だと考えている。2025年度も学生一人ひとりにとって「1 Day for Others」への参加がボランティアの楽しさを感じる機会、ボランティアの意義を考えるきっかけ、ボランティア受入団体の想いを知る一助になることを期待する。

(職員 熊澤 瑞)

### (2) プログラムの様子



スペシャルオリンピックス日本・神奈川



久地円筒分水サポートクラブ



マドレボニータ



ふれあい運動会

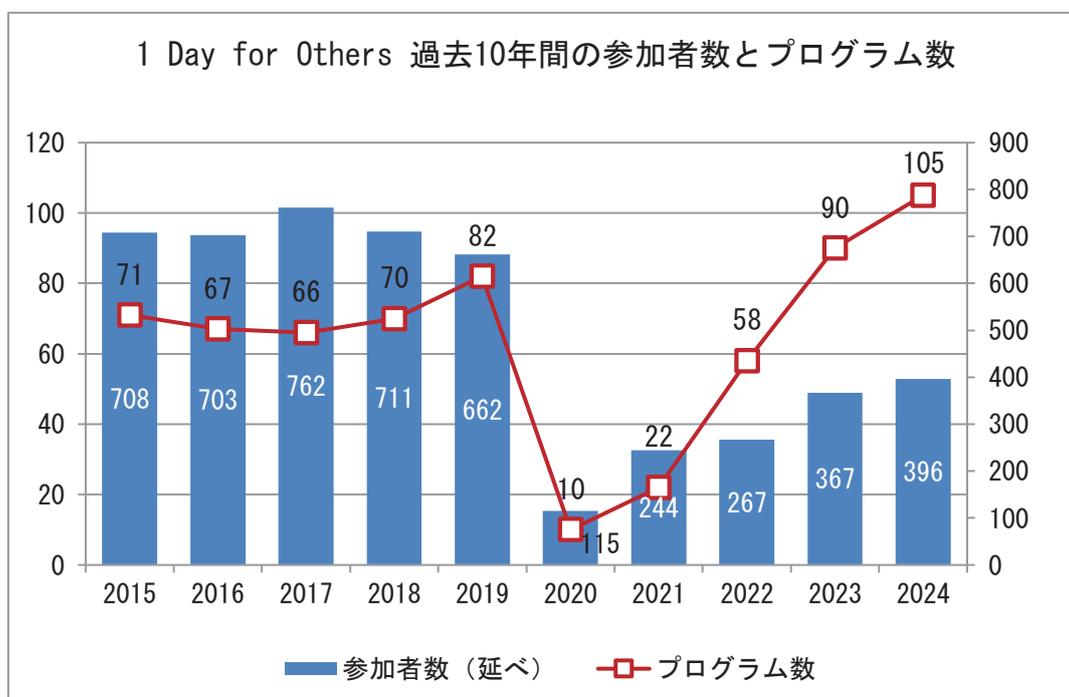
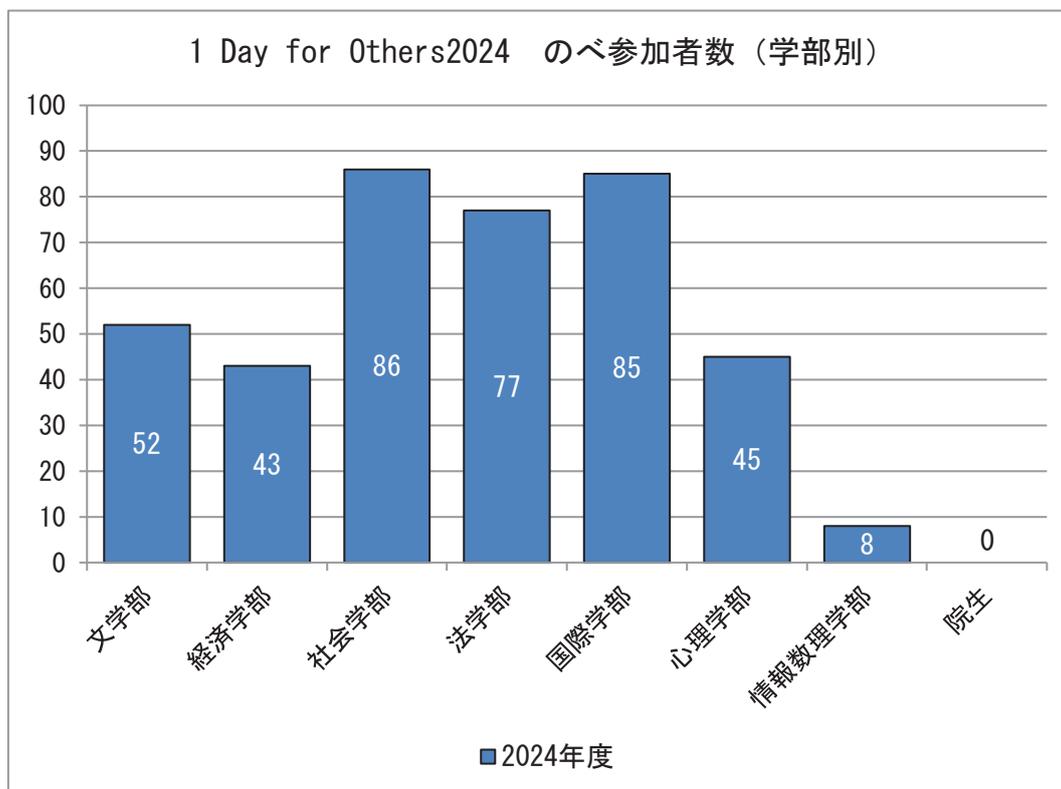


銀座ミツバチプロジェクト



港区立エコプラザ

## (3) これまでの参加者数



## 7. 1 Day for Others

### (4) 実施プログラム一覧

NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
1	認定NPO法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ①田おこし編	4/27	5
2	ふれあい運動会実行委員会	白金地域の大運動会で地域交流「第36回ふれあい運動会」運営ボランティア	4/29	5
3	認定NPO法人 舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」でこども谷戸まつりのサポート!	5/5	9
4	柏尾川魅力づくりフォーラム	みんなで川をきれいに!「第35回戸塚駅周辺魅力アップキャンペーンin 柏尾川」	5/11	4
5	有限会社ネバリ・バザール	フェアトレードの現場を体験!	5/13	2
6	横浜市立倉田小学校	小学校の遠足をお手伝いしよう!	5/16	3
7	逗子フェアトレードタウンの会	フェアトレードを通したまちづくりに参加しよう	5/18	6
8	港区立エコプラザ	エコライフ・フェア	5/18	4
9	特定非営利活動法人ワールドランナーズ・ジャパン	第16回チャリティーリレー for Africaをサポートしよう!	5/19	6
10	社会福祉法人 興望館	学童の子どもたちと思い切り遊ぼう!①	5/21	1
11	社会福祉法人 興望館	学童の子どもたちと思い切り遊ぼう!②	5/22	4
12	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを植えよう!	5/22	9
13	戸塚まつり準備会	一緒に戸塚まつりを盛り上げよう!～緑日企画のサポート～①	5/25	9
14	戸塚まつり準備会	一緒に戸塚まつりを盛り上げよう!～緑日企画のサポート～②	5/26	10
15	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク①	5/26	2
16	芝の家(地域をつなぐ!交流の場づくりプロジェクト拠点)	多世代交流拠点「芝の家」を体験! 世代を超えたコミュニティづくり	5/29	2
17	認定NPO法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ②苗取り・田植え編	6/1	8
18	認定NPO法人舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」で公開田植えイベント!	6/2	9
19	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク③	6/2	2
20	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク④	6/5	1
21	久地円筒分水サポートクラブ	住宅街にも国の登録文化財はある!円筒分水の美化活動に参加しよう。	6/8	10
22	戸塚桜セーバー	柏尾川プロムナード花壇の花植え	6/8	6
23	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑤	6/9	3
24	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑥	6/12	1
25	麻布子ども中高生プラザ	子どもたちとインラインスケートを楽しもう!	6/12	2
26	麻布子ども中高生プラザ	子どもたちと日常遊びを楽しもう!	6/12	2
27	特定非営利活動法人マドレポニータ	エクササイズを通して、育児の課題やライフプランについて考えよう!	6/15	8
28	横浜市栄区役所	スマホ相談会で高齢者と交流!～高齢者の困りごとやコミュニケーション方法を知ろう～①	6/15	4
29	特定非営利活動法人MERRY PROJECT	MERRY SDGs ART GARDEN ～田植え～	6/15	5
30	Piece of Nature	子どもたちと一緒にホテル観察をしよう	6/16	16
31	多文化まちづくり工房	多文化共生のまち「いちょう団地」で、中学生の学習サポートをしよう!①	6/18	2
32	社会福祉法人のびのび福祉会	障がい者支援の現場に出て、1日活動に参加しよう	6/19	4
33	平塚バプテスト教会	教会の会堂で「こひつじ食堂」のサポートをしよう!	6/21	1
34	特定非営利活動法人 国際交流ハーティ港南台	日本語学習ボランティア～様々な国の方々と国際交流をしよう～	6/28	7
35	横浜市栄区役所	スマホ教室で高齢者と交流!～高齢者の困りごとやコミュニケーション方法を知ろう～②	6/29	6
36	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	男女平等参画フェスタinリーブラ ジェンダーニュートラルなおもちゃブースボランティア	6/29	2

37	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	男女平等参画フェスタinリーブラ 展示コーナー運営サポート	6/30	3
38	横浜市栄区役所	スマホ相談会で高齢者と交流！～高齢者の困りごとやコミュニケーション方法を知ろう～②	7/3	4
39	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	10周年記念感謝デー 運営サポートボランティア	7/6	3
40	横浜市栄区役所	スマホ教室で高齢者と交流！～高齢者の困りごとやコミュニケーション方法を知ろう～②	7/10	5
41	多文化まちづくり工房	多文化共生のまち「いちょう団地」で、日本語学習のサポートをしよう！	7/13	4
42	特定非営利活動法人MERRY PROJECT	MERRY SDGs ART GARDEN ～夏野菜収穫～	7/27	3
43	横浜市港南国際交流ラウンジ	外国につながる子どもたちの夏休みの宿題をサポート！①8/17	8/17	2
44	横浜市港南国際交流ラウンジ	外国につながる子どもたちの夏休みの宿題をサポート！②8/24	8/24	2
45	高輪共和会	高輪共和会による祭りサポートボランティア②	9/15	3
46	港区高輪地区総合支所	子ども防災フェスで活躍！防災ブースのお手伝いで子どもたちと交流しよう	10/5	3
47	認定NPO法人舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」で公開稲刈りイベント！	10/6	8
48	チャレンジコミュニティ・クラブ	チャレンジコミュニティクラブ(港区社会福祉協議会バリアフリーマップ作成)	10/10	1
49	寿みんなの落語会実行委員会	日雇い労働者の町で落語を楽しむ「寿寄席」を盛り上げよう！	10/12	2
50	下倉田地区連合会	2024年度第23回下倉田地区連合会スポーツレクリエーション大会	10/13	5
51	高輪地区高齢者相談センター	高齢者を支える地域活動について考えてみよう！	10/16	5
52	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを掘ろう！	10/17	2
53	明治学院大学ボランティアセンター&高輪ホッププロジェクト	「フェスティバルーン」での明学出店ブースお手伝い！	10/18	1
54	認定NPO法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ③稲刈り・稲架掛け編	10/19	5
55	公益財団法人 横浜市スポーツ協会 戸塚スポーツセンター	オリンピック・パラリンピック種目を体験しよう！	10/20	4
56	NPO法人 みなと外遊びの会	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期①	10/20	2
57	NPO法人 みなと外遊びの会	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期②	10/23	2
58	神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぶらざ）	ハロウィンイベントで子どもたちと遊ぼう！「仮装deハロウィン2024」	10/26	10
59	MOA美術館 神奈川県児童作品展 戸塚児童作品展実行委員会	「戸塚児童作品展」をギャラリースタッフとしてサポート！	10/27	5
60	認定NPO法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ④脱穀編	11/2	7
61	学生団体OPENROOM（合同会社結びめとのコラボ）	知的障がいのある子どもたちが楽しく白金祭を回れるようサポート！	11/2	8
62	公益財団法人横浜YMCA 湘南とつかYMCA	YMCA祭・い〜とつか祭「キャンドルホルダーライトづくり」	11/3	1
63	チャレンジコミュニティ・クラブ	チャレンジコミュニティクラブ(みなとパーキンソン友の会支援活動)	11/10	2
64	NPO法人 みなと外遊びの会	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期③	11/10	3
65	NPO法人 みなと外遊びの会	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期④	11/13	2
66	とつか宿駅前商店会	「とつか宿こんびら市～秋の収穫祭～」を盛り上げよう！	11/16	3
67	上倉田地区連合会	上倉田地区連合会主催の防災訓練でこどもとあそぶ！	11/16	2
68	NPO法人 みなと外遊びの会	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期⑤	11/17	3
69	NPO法人 みなと外遊びの会	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期⑥	11/20	2
70	認定NPO法人舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」で収穫祭イベント	11/23	12
71	認定特定非営利活動法人JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）	多摩の森・大自然塾	11/23	2
72	認定NPO法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ⑤荒起こし・炊き出し編	11/30	5
73	芝の家（地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト拠点）	多世代交流拠点「芝の家」で世代を超えたコミュニティづくりを体験しよう。	11/30	4
74	あーすフェスタかながわ企画委員会 ステージ部会	あーすフェスタでかながわの多文化共生について考えてみよう！①	11/30	4
75	あーすフェスタかながわ企画委員会 ステージ部会	あーすフェスタでかながわの多文化共生について考えてみよう！②	12/1	7
76	上倉田キャンドルナイト実行委員会	「上倉田キャンドルナイト」～地域活動にボランティアで参加しよう～	12/6	3

## 7. 1 Day for Others

77	神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぶらざ）	キャンドルナイト2024	12/7	9
78	放課後等デイサービス くまさん横浜	🎵放課後等デイサービスで、知的障害のある子どもたちとの1日を過ごそう！🎵	12/8	9
79	戸塚桜セーバー	柏尾川プロムナード花壇の花植え	12/14	6
80	チャレンジコミュニティクラブ地域連携部会「昔遊びの会」	2024年度 「昔遊びの会」（赤羽小学校授業協力）	12/17	1
81	下倉田地区連合会	2025連合まつり防犯・防災フェスティバルの運営サポート	2/2	2
82	横浜山手中華学校	横浜中華街で春節を飾ろう！	2/4	10
83	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	芝浦港南ふれあいまつり①	2/8	2
84	たかなわ子どもコミュニティカレッジ（高輪子ども中高生プラザ）	みんなで昔あそび名人をめざそう！（チャレンジコミュニティクラブ×明治学院大学学生）	2/8	5
85	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	芝浦港南ふれあいまつり②	2/9	2
86	NPO法人エイブル・アート・ジャパン	【展示準備】エイブルアート芸大作品展	2/15	2
87	NPO法人エイブル・アート・ジャパン	【展示見守り&ギャラリートーク準備】エイブルアート芸大作品展	2/16	2
88	NPO法人エイブル・アート・ジャパン	【展示見守り①】エイブルアート芸大作品展	2/17	2
89	NPO法人エイブル・アート・ジャパン	【展示見守り②】エイブルアート芸大作品展	2/18	2
90	NPO法人エイブル・アート・ジャパン	【展示見守り&片付け】エイブルアート芸大作品展	2/19	1
91	戸塚区民文化センターさくらプラザ	さくらプラザ 春の芸術祭2025 ①ホールイベント	2/22	1
92	戸塚区民文化センターさくらプラザ	さくらプラザ 春の芸術祭2025 ②全体イベントのサポート	2/22	3
93	特定非営利活動法人 コミュニティセンター akta	HIVについて考えるイベント「Living Together のど自慢」をサポート	2/24	3
※企画した105プログラムのうち、悪天や受入先事情、申込なし等の理由により実施は93件となった。			計	396

## 8. ボランティア・カフェ（通称：ボラカフェ）

### （1）総括

2020年度コロナ禍中にオンラインで始まったボランティア・カフェ（以下、ボラカフェ）であるが、現在は、オンラインのみの開催はなく、横浜校舎コラボレーションスペースを活用した対面実施を中心に、白金校舎の教室を使用した開催や白横の校舎をオンラインでつないでのハイブリッド開催が増えている。

開催数は、2024年度は9件（2023年度10件、2022年度7件）、参加のべ人数は、2024年度150名（2023年度114名、2022年度107名）であり、長期休暇期間を除いてほぼ月1回ペースでの開催、各回10名前後の参加が見られる。

2024年度の特徴の一つは、学生や教員による持ち込み企画が半数以上を占めている点である。昨年度まではテーマが多分野にわたるように「SDGsカフェ」というサブタイトルをつけて、様々なSDGs(持続可能な開発目標)と関連させた内容でコーディネーターが企画をしたが、広報や集客に課題があった。その点、教職員や学生による持ち込み企画の場合は、教員の授業内での開催や、学生の友人達が参加するなど、一定の参加者数を確保することができた。一方で、2024年度は半数が能登半島地震に関連した内容になっており、これまで多かった国際協力や多文化共生、環境問題等の社会課題を取り上げることが少なかった。

（ボランティアコーディネーター 磯野 昌子）

開催日	タイトル	ゲスト・話題提供	場所	参加数
5/16 (木) 昼休み	能登はまだまだこれからです～能登半島復興支援ボランティアについて語ろう～	大坂 颯汰（法学部政治学科2年）	横浜 コラボ	10名
6/3 (月) 昼休み	災害と人権：能登半島地震の女性たちの支援を通じてみてきたもの	仁藤 夢乃（一般社団法人Colabo 代表）	白金1302 教室&横浜 コラボ	14名
6/17 (月) 昼休み	今さら聞きづらいLGBTQの基礎知識（レインボーフェス）	砂川 秀樹（ボランティアコーディネーター）	横浜 コラボ	18名
7/1 (月) 2限 11:00-12:30	障害と共に生きるとは	瑞宝太鼓夢大使：Zoom 公演 OPEN ROOM（学生団体）	白金1302 教室& Zoom	12名
7/3 (水) 5限 17:00～18:30	能登半島地震を考える～能登半島と原発	日置 一太（NHKプロデューサー、本学非常勤講師）	横浜821 教室	21名
10/24 (木) 昼休み	明学生が見た能登の今～夏季能登半島地震復興支援ボランティア報告会～	夏季能登ボランティア参加学生	横浜420 教室	34名
12/13 (金) 昼休み	学校現場の今～学校ボランティアだから見えること、できること～	江口 拓（法学部政治学科2年）	横浜 コラボ	11名

## 8. ボランティア・カフェ

12/19 (木) 昼休み	障害者が自立して生活することのリアル～横浜に暮らす障害当事者の実践から～	磯部 浩司、岩切 玄太 (自立生活センター 自立の魂)	横浜 コラボ	20名
3/12 (水) 13:30-16:00	ニューヨークから横浜キャンパスへー核兵器禁止条約を知るー	本間 のどか (国際学部国際学科4年)、林田 光弘 (一般社団法人 Peace Education Lab Nagasaki)	横浜 821 教室	33名

## (2) 各回報告

## 能登はまだまだこれからです～能登半島復興支援ボランティアについて語ろう～

企画・話題提供：大坂 颯汰（法学部政治学科2年）

2024年5月16日（木）12:35-13:25

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：学生7名、教職員3名

## 内容

能登半島の復興支援ボランティアに行ってきた大坂さんから、自分の経験を他の学生と共有したいとの希望があり、コーディネーターと共にボラカフェを企画した。普段はサッカーに打ち込んでアルバイトをかけもつ大坂さんは、ボランティア学の授業を受けてボランティアをやってみたいと思い、春休みに能登半島（内灘地区）のボランティアに友人と行ってきた。

石川県の災害ボランティア情報のサイトから、応募可能な地域を選び、内灘町ボランティアセンターに応募したという。誰もが参加できるように、その経緯を実際のサイトの画面をスライドで映しながら説明し、災害用のボランティア保険の加入の仕方についても具体的な説明があった。

当日は朝4時半に家を出て、新幹線で金沢駅に9時頃着き、さらにバスに乗って内灘町ボランティアセンターに行った。そこでボランティアの割り振りが行われ、大坂さんは高齢者一人暮らしの家の片付けを行った。使用できなくなった家具を外に運び出しトラックの荷台に乗せるという作業を行う中で、自分にとってはただの冷蔵庫だが、おばあさんにとっては「ずっと一緒にいた冷蔵庫」であることを思うと切なくなったという。そこで行われていた炊き出しのお昼ご飯をいただいた。夕方に作業が終わり、夜に金沢に戻ってきたため、ネットカフェで一泊して帰ってきた。新幹線で行ったために3万円くらいかかったとのことだった。



## 参加者の声

- ◎自分も能登のボランティアの申込ページまでは行ったけれど、その先に進めなかった。今回の話を聞いて勇気もらったので、やってみたいと思った。
- ◎「力仕事ができなくても役に立ちますか？」→「服やハンガーなど、身近なものがたくさんあるので、重いものでなくても片付けられるものがたくさんある」
- ◎「人手不足だけれど、道が混んでしまうので来ないで欲しいという報道があったが、実際はどうだったのか？」→「めっちゃめちゃ人手不足だった。ボランティアは70代くらいの高齢の人が多いで、大学生が行くと喜ばれる。高齢者が多いので、一緒に将棋をするなどもよいと思う。」
- ◎ボランティアセンターから災害支援の助成があると、学生にとってとてもハードルが下がるのでありがたい。そのことを知ったらもっとやりたい人も増えるのではないかな。
- ◎高校生の時に東日本大震災の復興支援ボランティアとして大川小学校に行った時に、「あの大川小学校」と言わないで欲しいといわれたことが印象に残っている。能登も「あの能登」ではなく、元の元気の街であった能登をしっかりと継承して伝えていくのが大事なのではないかと思いました。
- ◎自分も当時受験生だったので、被災地の受験生のことが心配だった。質問「スポーツなどでできることがあったらやりたいと言っていたが、学習支援など他にもできることはありますか？」→「共通テストなどで受験したばかりの大学生が学習支援をするのは意味がある。」

### 災害と人権：能登半島地震の女性たちの支援を通じてみてきたもの

ゲスト：仁藤 夢乃(一般社団法人 Colabo 代表／社会学部社会学科卒業生)  
 応答：宮崎 理 (ボランティアセンター長補佐／社会学部教員)  
 進行：猪瀬 浩平 (ボランティアセンター長／教養教育センター教員)

2024年6月3日(月) 12:35-13:25

白金キャンパス 1302 教室

参加者：学生9名、教職員5名

#### 内容

災害は、人びとの人権が守られない状況をつくりだす。温かい食べ物をたべ、温かい場所で寝られること、プライバシーが保障されること、好きな服を着て、好きな人と、好きな場所にいくこと、そんな自由が奪われる。そして、その深刻さは、その人が震災以前に置かれていた構造的・社会的状況——年齢や国籍、言語、経済状況、家族や友人の有無、そしてジェンダーやセクシュアリティなどの違い——によって大きく変わってくる。

一般社団法人 Colabo は、能登半島地震で被災した女性たちを対象とした活動を震災発生直後から進めてきた。今回のボラカフェでは、Colabo 代表の仁藤夢乃さんが見てきた能登半島の震災の状況と、被災地において見過ごされがちな少女達の声を代弁し、必要とされる支援グッズの内容やその配給について具体的に語っていただいた。さらに、震災時においてもすべての人の人権を保障するために、平時においても何が必要なのかについて議論した。



#### 参加者の声

- ◎避難所のナプキンの配給問題はメディアで取り上げられることなどで注目されていたが、根本にある男性中心の避難所の物資管理や避難所生活での家父長制はもっと問題視されるべきことなのに…と悔しくなりました。
- ◎物資の集積所だと実際に届けたい人たちに届かない、避難所での権力関係で物資を受け取ることができない (Colabo のカフェで年配者が若者向けのものを取ってってしまうなどが起きたことなど) というのは被災地支援で見落とされる点であると初めて知りました。
- ◎被災者には「被災者」らしい振る舞いの規範、「贅沢は敵」の暗黙のルールが「欲しいものを欲しいと言えない」状況を作り出すのではないかと考えました。そこでは社会のマジョリティによる個別性の排除が発生し、マイノリティが廃されてしまう公平ではない状況が作り出される負の環境がなかなか知られていない、そしてそれはマジョリティ (仁藤さんの言葉を借りると“おじさん”) には理解されないというのも問題であると考えました。
- ◎能登半島地震により被災した現地では、未だに衣食住が整っていないにも関わらず避難所が閉鎖の方針で、国や行政の支援も被災者に寄り添っておらず (行政のアパートの高額な家賃など) 仁藤さんが高齢女性から言われた「長生きなんてするもんじゃなかった」という言葉がとても印象的でした。災害時の対応は地方自治体だけの問題ではなく国家政策の問題であり、災害時におけるパフォーマンスではない適切な対応は何かというのがマクロなテーマであると考えました。

<レインボーフェス企画>

## 今さら聞きづらい LGBTQ の基礎知識

進行・講師：砂川 秀樹（ボランティアコーディネーター）

2024年6月17日（月）12:45～13:20

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：学生16名、職員2名

### 目的

2010年代以降、日本でも LGBTQ という言葉が広く使われるようになった。LGBTQ という言葉が人口に膾炙する一方で、詳細を知る機会が少ないため、誤解したり、あいまいなイメージでわかったつもりになっていたりすることも多い。また、LGBTQ が、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、キア/クエスチョニングという多様な人たちの頭文字をとった言葉であるにもかかわらず、その多様さ、内的差異への理解は乏しい。一般的な用語となってしまったがゆえに聞きづらくもなっている、LGBTQ に関する基本的な知識を共有する。

### 内容・所感

このボラカフェは、6月17日（月）～29日（土）の期間にボランティアセンター主催で開催する明治学院大学レインボーフェスの一環として開催された。フェスの一部として広報はおこなっていたものの、このボラカフェ単独としては広報していなかったため、参加は少ないのではないかとされた。しかし、授業とのコラボではないボラカフェとしてはかなり多い16名の参加を得た。この企画を知ったきっかけを挙手で聞いたところ、砂川が講演をおこなった授業や、レインボーフェスを宣伝させてもらった授業で知った人とポートヘボンで知った人が、それぞれ三分の一だった。

砂川が、自身がゲイであることをオープンにしていることを話した上で、L/G/B/T/Q のカテゴリーについて基本的な説明したあと、質疑応答をおこなった。

自身がアセクシュアルであることに触れたうえで、砂川自身の恋愛経験について知りたいという質問があった。その質問に答える中で、少し緊張感のあった場の雰囲気が和らぎ、学生も楽しく聞いているように見えた。「基礎知識」的な話だけでなく、講師が自身の経験を率直に語ることで、学生がより身近に感じ、話やすくなると感じた。

終了時間が過ぎてからも残る学生もおり、「BL」（ボーイズラブ）についてどう考えるかという質問が出た。それに対し、「BLでよく描かれるような、同性愛の男性が他の男性から熱烈に好かれて性的指向が変化する」という展開は実際にはどちらかというと珍しいが、それが中心的に描かれていることなどに疑問がある」と説明したところ、質問した学生は「そういうものだと思っていた」と驚いていた。こうしたやりとりから「当事者」の経験と異なる、世間に流通しているイメージの根強さに気づかされた。

こうした「当事者」経験について多くの人が知らないまま、最近では、トランスジェンダーへのバッシングなどが激しさを増している。SOGIE（性的指向・性別アイデンティティ・性別表現）の多様性と LGBTQ について、さらに取り上げていく必要があるだろう。



### 障害と共に生きるとは（瑞宝太鼓／夢大使）

ゲスト公演：社会福祉法人 南高愛隣会 瑞宝太鼓 夢大使  
企画・進行：OPENROOM（学生団体）

2024年7月1日（月）11：00～12：30

白金キャンパス 1302 教室

参加者：大学生 8 名、職員 3 名、外部 1 名

#### 内容

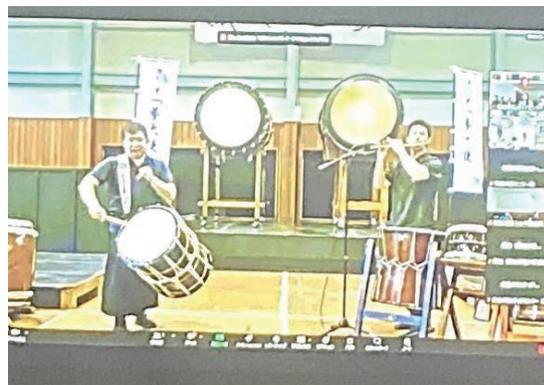
長崎県にある社会福祉法人南高愛隣会の瑞宝太鼓／夢大使を講師に招き、「障害と共に生きるとは」をテーマにした講演と、夢大使による太鼓の演奏をしていただいた。もともと OPENROOM（学内任意団体、障害児支援サークル）内部研修の予定だったが、学生たち自身が公開のボラカフェとして企画し、司会から質疑応答まで通して実施した。しかしながら最終的に OPENROOM 以外の参加学生がなかったため、学内での広報が課題となった。

#### ※瑞宝太鼓とは

1987 年、知的障がい者の余暇サークルとして発足。楽しみながら練習と演奏活動を続けてきたが、「プロになりたい」とたくさんのクラブ員から希望の声が上がり、その夢を叶えるため 2001 年に 4 名の団員で構成する「瑞宝太鼓」を結成。

今では日本全国、時には世界を舞台に年 100 回以上の公演や講習活動を行う。また全国の少年院・刑務所での演奏や学校公演、日本大震災での支援活動を通して社会貢献活動も行っている。「希望し、努力し、感謝して生きる」をテーマに、特技・特性を活かした活動を展開している。

（URL：<https://x.gd/tyD8S>）



## 能登半島地震を考える～能登半島と原発

ゲスト：日置 一太（NHK グローバルメディア報道番組センター エグゼクティブプロデューサー  
／明治学院大学非常勤講師）  
企画・進行：猪瀬 浩平（ボランティアセンター長／教養教育センター教員）

2024年7月3日（水）5限 17:00～18:30  
横浜キャンパス 821 教室  
参加者：大学生 16名、教職員 5名

### 内容

2024年の元旦に大きな地震が襲った能登半島には、志賀原発が立地している。また震源地に最も近い珠洲市には、かつて原発の建設が計画されていた。地震発生直後、道路が寸断され、支援がなかなか進まないことが報道され、ボランティアに入ることは慎重にあるべきであるというメッセージも、政府や県から発せられた。

そうした場所に、原発がある／計画されたということはどう考えればいいのか？

当日は、本学で非常勤講師を務める日置一太さんがNHKディレクターとして取材・制作したドキュメンタリー「原発立地はこうして進む奥能登攻防戦」（1989年制作）を視聴した後、珠洲市・高屋町の住民たちがどのように原発立地を食い止めたのかなど、膨大な取材をまとめた映像から当時の状況を知り、また今年1月に発生した能登半島地震後の取材映像を視聴するなどした。その後、能登半島に原発が立地する意味について日置さんをお話いただき参加者と議論した。

### 参加者の声

- ◎能登半島の過去について知るきっかけになった。
- ◎昨年度猪瀬先生のボランティア学入門で、窪川の原発設置と市民のリコール活動についての授業を受けたのだが、今回そこにつながる点が多く、学びを深められたように思う。窪川も、珠洲も、小さな町が大きな権力に飲まれそうになった点や、国からの交付金で過疎化の打開を図ることを提示された点が共通していると思った。それを、市民の濃い話し合いという方法で乗り越え、結果として地域の強い結びつきを生み出した点においても、対話を通して合意を形成することで生まれる力は大きいものだと感じた。今年度、日置先生の授業で、成功した学生運動の例としてひまわり運動が扱われたが、それと今回扱われた珠洲の人たちの運動では、非日常的な運動を日常の中に入れ込んだ点が共通していると感じた。
- ◎私も実家が山形県で東日本大震災を体験したのですが、当時はまだ幼稚園生だったのと、私が住んでいた地域は被害が少なかったため、何が問題なのかがあまり分かっていませんでした。10年以上たった今でも復興支援を受けている人が居るということを知ったとき、怠惰な人だと思ったのですが、今回の動画を見てその過酷さを知りました。他にも様々なことをしれたのがとても良かったです。



ゲスト：日置一太さん（NHKグローバルメディア報道番組センターエグゼクティブプロデューサー／明治学院大学非常勤講師）  
進行：猪瀬浩平（ボランティアセンター長／教養教育センター教員）

明治学院大学で非常勤講師を務める日置一太さんが、NHKディレクターとして取材・制作したドキュメンタリー「原発立地はこうして進む奥能登攻防戦」（1989年）を視聴します。

詳細&申込はボランティアポータルサイトから ▶ 申込はこちら ▶

主催/明治学院大学ボランティアセンター  
TEL 03-5421-5131 携帯 049-863-2056

## 明学生が見た能登の今 ～夏季能登半島地震復興支援ボランティア報告会～

話題提供：夏季能登半島地震復興支援ボランティア参加学生  
進行：田中 悠輝（ボランティアコーディネーター）、奥田 時生（社会学研究科1年）

2024年10月24日（木）12:35～13:25、13:00～15:00  
横浜キャンパス 420教室

参加者：学生28名、教員2名、外部（他大学ボラセン職員、横浜市内の高校教員）4名

### 内容

2024年1月1日に石川県能登半島で発生した地震被災地の復興支援のために、本学ボランティアセンターでは8月と9月の2回にわたって引率型のボランティア活動を行なった。第一クール（8月5～8日）に参加した学生6名と第二クール（9月3～6日）に参加した学生4名、両クールにアシスタント学生として参加した大学院生1名、引率者2名（コーディネーター）により、「明学生が見た能登の今」と題して活動報告会をおこなった。

初めに、田中コーディネーターが撮影・編集した記録映像（約10分）を上映した。その後、両クールの参加学生が活動現場ごとに5つのチームに分かれ、そこで見たこと、自分たちがした活動、各自が感じたこと・考えたことを発表した。

①**仮設住宅**について、大坂（政治学科2年）と富平（社会福祉学科1年）が、珠洲市と能登町の仮設住宅の現状（小学校敷地に建設されることで子どもたちの遊び場がなくなること等）、カフェにおける地元の人々との交流によって自分たちの方が励まされたことなどを報告した。

②**重蔵神社**について、今（心理学科1年）と平岡（政治学科1年）が、輪島市街の被災の様子や全国から集まった支援物資の内容、300人以上が数時間前から行列している現状、他大学や高校生ボランティアと協働したことなどを報告した。

③**被災住宅**について、阿部（社会学科4年）が、地震により道が寸断され孤立し家屋に甚大な被害を受けた町野町若桑地区の区長さんの話と、全壊判定を受けた納屋の片づけの様子を報告した。再建するには不十分である公費解体制度の課題や震災を境に地域を出ていく人が増える中で過疎地域の将来について考えたことを話した。

④**輪島塗**について、酒井（法律学科3年）と山岸（社会福祉学科2年）が、能登地震復興サポート（のとサポ）による輪島塗食器の救出活動、能登の人々にとっての輪島塗の存在、実際の洗浄作業の様子を話した。輪島塗を手にして話を聞いた学生は、似たように見えても一つ一つにストーリーがあり、どれも捨ててはならない大切なものだと実感したという。

⑤**児童館**について、志村（教育発達学科3年）と細川（政治学科3年）が、能登町立柳田小学校学童での子どもたちの様子と交流（宿題、レゴ、積み木、ドッチボール、ギター演奏等）について話した。職員の方から、愛着形成の仕方が不器用で、必要以上に抱きつく、物へ過剰に当たるなどの子どもが増えていると聞いたが、実際の子どもたちは無邪気で活発に遊んでいて安心したという。

昼休みの報告会終了後、「今後の能登支援を考える」をテーマに、報告した学生たちと継続して会に参加した学生達とでフリートークをおこなった。参加した学生達は、自分たちも現地で活動したいという意向を強め、豪雨災害ボランティアの受入れを特別募集していたパルシック（夏季本学ボランティア受け入れ団体）に依頼し、11月初旬に本学の災害ボランティア助成金を申請して現地で活動をした。

また、外部から参加していた横浜市の高校より依頼があり、12月に学生達が高校に「出前授業」として能登の話をしに行った。その後の展開につながるインパクトのある報告会となった。



## 学校現場の今 ～学校ボランティアだから見えること、できること～

企画・話題提供：江口 拓（法学部政治学科2年）

2024年12月13日（金）12:35～13:25

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：学生10名、職員1名

### 内容

普段、公立の中学校でボランティア活動を行っている江口さんは、昨今の学校現場に見られる変化（部活動の地域移行、不登校生徒のための登校場所づくり、外国にルーツを持つ子供たちの増加）について、学生ボランティアには何ができるのかを、他の人たちと意見交換したいという希望があり、コーディネーターと共にボラカフェを企画した。

初めに、江口さんが行っている活動（部活動の外部指導員、不登校生徒への支援、外国につながる生徒への支援）について、新しい制度の説明と共に紹介があった。その後、今日の中学校と生徒たちの抱える問題について、2つのテーマ；①今後、学校はどのようになっていくと思うか（将来的にどのような学校が望ましいか）、②大学生が学校に対してできること、について、グループワークを行ないながら、参加者同士の意見交換を行なった。

残念ながらボランティア・サティフィケート・プログラムの登録学生の参加はなかったが、江口さんとつながりのある政治学科の学生や教職課程を履修している学生の参加があり、部活動の外部指導員は有償ボランティアでアルバイトにもなるからお勧めだといった意見など、ボランティアをしたことがない学生たちも関心をもっていた。



日時  
2024年12月13日(金)  
12時40分～13時20分

場所  
4号館ボランティアセンター  
[当日参加可、昼食持ち込み可]

・自己紹介(企画者)  
「子どもが大好きな方」  
「学校ボランティアを考えている方」

・こんな方におすすめ！

① 将来教員志望の方

② 子どもが大好きな方

③ 学校ボランティアを考えている方

<https://volunteer.meiqakuin.ac.jp>  
申し込みボランティアポータルサイトへ  
※事前申し込みなしでも参加できます！  
主催:明治学院大学ボランティアセンター



皆さんこんにちは！  
法学部政治学科2年生の  
江口拓（えぐちひろく）  
と申します。毎週末曜日  
と土曜日に都立区内の中  
学校でボランティア活動  
をしています。趣味はス  
ポーツ観戦。座右の銘は  
「自ら動いて誰にやらせ  
ない」。皆さんの貴重な時  
間を捧げたいです。参加  
できれば幸いです！た  
くさんのご参加お待ちしております！

### 参加者の声



◎参加者の中で意見を交換できたのはすごく楽しかったし、学びになりました。学校関連のボランティアをしている人の話をもっと聞きたいです。

◎今日聞いた現場の人手不足については、把握していたものの具体的解決策等については全く知らなかったため、実際に携わっている人の意見を聞くことができ非常に有意義であった。

## 障害者が自立して生活することのリアル ～横浜に暮らす障害当事者の実践から～

ゲスト：磯部 浩司、岩切 玄太（自立生活センター 自立の魂）

2024年12月19日（木）12:40～13:25

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：学生13名、教員5名、職員2名

### 内容

横浜市内で「自立生活」をしている障害当事者の岩切玄太さんのヘルパーを、縁あって本学合気道部の部員が担ってきたが、部員の減少により継続が難しいためボランティアセンターで呼びかけて欲しいという依頼が、顧問の教員からあったことで、今回のボラカフェ企画が持ち上がった。単に募集チラシを配架するだけでなく、障害者の自立生活とはどのようなものなのか、また、それを支えるヘルパーの実際についても直接お話を聞きたいということで、岩切さんとヘルパーさん、また、岩切さんがスタッフとして所属している「自立生活センター 自立の魂」代表の磯部浩司さんとヘルパーさんの4人をお迎えしてお話を聞いた。

初めに、磯部さんから、ご自身が事故により重度障害者となってから十年近く引きこもりの生活をしてきたことや、その後尊敬する介助者と出会うと同時に「自立生活センター」の理念を知り、本格的な自立生活を始めたこと、ご自分の経験を活かして、障害者が障害者をサポートする「自立生活センター 自立の魂」を設立された経緯についてお話しいただいた。

次に、宮崎県生まれで脳性麻痺の当事者である岩切さんの子ども時代の話や磯部さんとの出会い、現在のアパートでの一人暮らしの様子についてお話を聞いた。岩切さんは、「どんな障害があってもヘルパーがそばにいれば、どこへだって行けるし、自分の家を持って自分らしい生活を営むこともできます。私たちはそんな人と人が結びつくことでお互いから湧いてくる生きる力、可能性を信じて活動しています。ヘルパーは特別な仕事でなく、他者と向き合う根気強さが少しでもあれば誰でもできる仕事です」と言っています。

お二人の話の後、参加した学生や教職員からの質問を受けてのフリートークとなった。ヘルパーさんへの質問もあり、障害当事者とヘルパーさんとの自然な信頼関係を垣間見ることができ、「障害者の介助者」へのハードルが下がった人も多かったのではないだろうか。

### 参加者の声

◎ 一番は、当事者の方とお話しできたことがよかった。参加前は、障がいのことにとどこまで触れて話してもいいのかわからなかったが、実際にその疑問を聞いてみると、「基本的にはなんでも聞いてくれてかまわない」と言ってくれた。こちらが、センシティブに考えすぎているのかもしれないと思った（当然リスペクトを持っていることが前提になるが）卒論のテーマについて、話すことはできてよかった。とても興味深い話が聞けた。

◎ 今回のボラカフェの前に授業で障害当事者の方の話を聞いていました。しかし、授業となると直接お話をすることは難しく、ボラカフェに参加した事で直接何気ない会話をすることができ、小規模だからこそ話やすい環境であったと感じました。



## ニューヨークから横浜キャンパスへ—核兵器禁止条約を知る—

報告者：本間 のどか（国際学部国際学科 4 年）

ゲスト：林田 光弘（一般社団法人 Peace Education Lab Nagasaki）

2025 年 3 月 12 日（水）13:30～16:00

横浜キャンパス 821 教室&オンライン

参加者 33 名：学生 13 名、教職員 5 名、一般 10 名、新聞 5 社

### 内容

初めに、今年 3 月 3～7 日にニューヨークで開かれた「核兵器禁止条約第 3 回締約国会議」に参加した本間のどかさんの報告が行われた（いつでもボランティアチャレンジ採用事業）。本間さんは、KNOW NUKES TOKYO のメンバーとして NGO 枠で参加、団体紹介の後、核兵器禁止条約について説明し「2021 年に発効したばかりの条約を市民社会で育てる必要がある」と語った。また、傍聴した本会議の様子や、関連集会で出会った核実験やウラン採掘に伴うアルジェリアなどの被爆者との交流についても報告があった。質疑応答では、オブザーバー参加のなかった日本政府とユースを含めて熱心な参加が見られた市民団体との乖離についてなどが話し合われた。



後半は「平和を伝える」を仕事にする、と題して、国際学部卒業生であり、長崎で一般社団法人を立ち上げながら平和活動を行っている林田光弘さんにお話しいただいた。昨年 12 月にオスロで開催された、日本被団協（＝日本原水爆被害者団体協議会）のノーベル平和賞授賞式に同行した際の撮影動画上映の後、被爆者が高齢化して語り部が少なくなる中でどのように平和を語り継ぐかについて、Peace Academy や地球市民フェスなどの若者を巻き込むご自身の活動を紹介していただいた。国際学部の現役生から、卒業後も平和活動を続けることについて多くの質問があり、アーティストなど、どのような職業を通して平和を伝えることはできるというアドバイスがなされた。

時間終了後も会場では本間さんへの新聞社からの取材が殺到し、国際学部の教員や卒業生を含めて活発な情報交換がなされていた。

### 参加者の声

- ◎ 本間さんの仰っていた「活動はライフワーク」というのがキーになるのかなと思いました。無理なく継続的に行うには、普段の生活に入っていれば堅苦しくなく比較的気軽に行えると思いました。
- ◎ 平和活動と言っても一つではないと感じました。日々、食べる物、買う物、使う物、選挙へ行くなど、私たちの選択を通して表現、体現できるのではないかと。失敗を恐れすぎない、完璧を求め過ぎないことも始める時に大事ですね。

## 9. 災害ボランティア助成金

### (1) 総括

災害ボランティア助成金は、災害復興活動を行う学生・教職員を対象に、活動時に生じる交通費等の経済的負担を緩和するための助成金制度である。従来の「災害遠征助成金」制度をより使いやすく、また学生だけでなく教職員も活用できるようにリニューアルし 2024 年 5 月より本制度の運用を開始した。

申請要項は、以下の通りである。

助成対象者	本学学部生・院生、教職員（非常勤講師を含む）
助成対象となる活動	災害救助法の適用を受けている地域における、自治体、NPO 法人等の諸団体が募集する災害復興支援活動を対象とする。
助成金額・助成回数 ・助成金の対象費目	<p>(1) 助成金額は 1 回 30,000 円上限（実費）とする。</p> <p>(2) 助成回数に制限は設けない。</p> <p>(3) 助成金の対象費目は、交通費、宿泊費、社会福祉協議会の「ボランティア保険※天災に対応するプラン」加入料、および当該募集団体が定める参加費を助成金の対象費目とする。</p>
手続	<p>(1) 事前手続 「明治学院大学ボランティアセンター災害ボランティア助成金申請書（様式 1）」「保証人承諾書（様式 2）」※学生のみ、および参加する活動の募集要項等の活動内容がわかるものをボランティアセンター代表メールアドレスに提出する。</p> <p>(2) 活動中の手続 「ボランティア活動証明書」（様式 3）を受入先に依頼し取得する。</p> <p>(3) 事後手続 以下を速やかに提出する。 ア「ボランティア活動証明書」（様式 3） イ「明治学院大学ボランティアセンター災害ボランティア助成金報告書」（様式 4） ウ「振込依頼書」（様式 5） エ 領収書（原本） ※添付台紙に貼付</p>

### (2) 実績

2024 年度は、台風、大雨、大雪、火災、道路陥没事故など、災害救助法が適用されるような災害が各地で発生した。なかでも 1 月に発生した能登半島地震、そして 9 月に発生した能登半島豪雨に対しては、被災地の力になりたいという学生・教職員の声が多く寄せられ、本年度採用となった 21 件（申請 21 件）全てが能登での災害ボランティア活動であった。

以下、報告書より抜粋する。

- ・地震発生から 6 カ月たったにも関わらず、想像以上に状況が変わっていなかった。現地の混乱を避けるために、発生直後にボランティアを募らなかったことがメディアで大きく報道されたため思うようにボランティアが集まらないという課題が現地の社会福祉協議会の方から挙げられていた。
- ・災害ボランティアの経験は人生で初めてで、自分は自己満足でこの活動をしてしまっているのではないかとこのことを何度も考えました。きっとこの意識を持って考え続けることが大切なのだと思います。だからこそまた現地に行って、考えることから逃げないで自分にできることを探していきたいと思いました。

（職員 菊池 範子）

## 10. ボランティアフェア

### (1) 総括

夏季の長期休暇中にボランティア活動をしたい学生たちのために、毎年7月上旬に学内に多様なボランティア団体を招聘し、ブース出展していただく機会を設けている。コロナ禍後、2022年度より再開し、本年度は3度目の開催となった。会場は例年通り、横浜校舎のボランティアセンター、コラボレーションスペースと学生ラウンジの2会場に分かれて開催した。

企画学生を公募したところ7名が集まり、昨年度から継続して参加してくれた学生がリーダーとして全体を統率しながら、1か月半をかけて準備を進めることができた。しかし、昼休み+3限という時間帯での開催にも関わらず、3限に空コマのある学生が一人しかおらず、当日はボラセン職員総出でチラシ配布や団体対応等を行うことになり、運営体制が不十分であった。次年度以降は、開催時間帯に検討を要する。また、チラシ配布は当日だけでなく一週間前から行うなど、広報の仕方も再検討が必要である。昨年度は集客効果のあった七夕飾りを今年度も行ったが、当日は酷暑のせいか功を奏しなかった。7月上旬は猛暑の始まりとなり、開催日程の検討も必要である。

出展団体は企画学生が呼びたい内容に合わせて、多様性ができるようにコーディネーターから団体を紹介したり、既に学生自身が活動している団体には学生から呼びかけてもらう。団体との交渉はコーディネーターが行い、決定した各団体に企画学生の担当を決める。学生が事前に団体訪問し、団体紹介とメッセージをまとめてSNS等で広報を行う。こうしたプロセスそのものが、企画学生にとって学びの機会となっている。

フェア参加者のべ人数は昨年度102名に対して今年度は97名にとどまった。各団体でのブース来訪者数は約10名であったが、それぞれゆっくり話をすることができ、出展団体にとっても学生達と話せたことの満足度は高かったようだ。実際にフェアでの出会いから長期的にボランティアとして関わるようになる学生もおり、学生達にとっては、それまで自分が関心のなかったような様々な団体とも出会える貴重な機会となっている。

### (2) 開催概要

日時	2024年7月4日(木) 12:30-15:00 *昨年度7月7日(金) 同時間
場所	横浜校舎4号館ボランティアセンター(学生ラウンジ、コラボレーションスペース)
参加団体	9団体(スタッフ18名) *昨年度8団体12名 <ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO法人 Connection of the Children(初): 多文化共生</li> <li>・学生団体 NAMIMATI(初): 環境、SDGs</li> <li>・NPO法人 横浜こどもホスピスプロジェクト(初): グリーフケア</li> <li>・NPO法人 コースコミュニティ(初): 学習支援</li> <li>・プライドハウス東京(2回目): LGBTQ</li> <li>・放課後等デイサービス くまさん横浜(2回目): 障がい児支援</li> <li>・NPO法人 NICE 日本国際ワークキャンプセンター(3回目): 国際協力</li> <li>・神奈川骨髄移植を考える会(初): 医療</li> <li>・戸塚区社会福祉協議会(初): 中間支援</li> </ul>
参加者数	学生ラウンジ44名、コラボ53名(のべ97名) *昨年度102名
企画学生	1年生5名(心理3、英文1、社会1)、2年生2名(英文1、心理1) *事前ミーティング…5/23~6/30(6回) 対面、LINEグループでの連絡
	磯野コーディネーター、田中コーディネーター

●企画参加学生のふりかえり、成果

- ・すごく楽しかった。
- ・授業で宣伝したら効果があった。友達をさそったら来てくれた。
- ・SNS 広報が中心だったが、manaba のお知らせのほうが落とさずに見ると思う。
- ・準備の期間をもう少しゆとりを持ちたい。
- ・チラシ配布を橋の場所などで1週間前くらいから配っていてもよかった。
- ・授業の履修の関係であまりいられなかったのが残念だったが、学びがあった。
- ・ポスターの製作時間をもう少し欲しかった、団体とのやりとりを丁寧やりたかった。
- ・外部の大人の人のやりとりがいい経験になった。
- ・開始の時間、開催時間を調整してはどうか？  
→12時スタート 15時半終わりにする、5限にやるなど。または、2日間開催する。
- ・ひとつの団体当たりの説明時間の目安みたいなものがあつたらいい。
- ・自分の活動している団体にすぐにボランティアの応募があった。
- ・こどもホスピスに友人が見学に行きたいと話していた。
- ・参加者アンケートを用紙で作成したが、今後は二次元コードで作成してはどうか。

●各団体からのフィードバック

- ・意欲的な学生に出会えた (Connection of the Children)
- ・自分が通っている大学のボランティア・フェアに参加することができ、とても光栄でした。興味をもってくれる学生たちが多く、とても嬉しかったです。(NAMIMATI)
- ・昨年より参加団体も増え、規模が拡大していることを実感しました。10名ほどの熱心な学生さんが訪れていただき、こちらとしても出展しがいのある催し物でした。骨髄移植や海外のボランティアなど、私どものような障害福祉以外の団体さんもいらしており、貴学の幅の広さを改めて実感いたしました。(くまさん横浜)
- ・学生さんたちの、やってみたいけど、それにはどんな意味があるのか？といった疑問だとかやってみたいけど、どうしたらよいのか？の悩みなどをお聞きすることができた。また、そこでどうやって背中を押してあげるのかといった所に、ボランティアセンターの方々の日々のお仕事が少し見えたような気がしました。日常の、一歩を踏み出せない学生さんと交流させていただくことは貴重な機会だと思っています。(NICE)
- ・(骨髄移植は) 献血とセットでやっていることの認知がなかったことがわかった。(神奈川骨髄移植を考える会)
- ・様々な地域活動をされている団体さんから、学生の皆さまと一緒に活動したいという希望を伺っております。今後とも、学生の皆さまの活動を応援したいと考えております。(戸塚区社会福祉協議会)

(ボランティアコーディネーター 磯野 昌子)



## 11. 国際機関実務体験プログラム

### (1) 総括

国際機関実務体験プログラムは、横浜・みなとみらい地区の国際機関で45時間から100時間の実務体験を行う、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と本学を含めた6大学との協働事業である。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で修得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質をもって活躍することのできる人材育成を目的とする。

実務体験は、夏期と春期に行われ、派遣国際機関は6大学で割り振られている。2024年度は夏期にアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）で1名、春期にITTO（国際熱帯木材機関）で1名、合計2名がプログラムを修了した。

国際協力の現場での体験が自主性を伸ばし、また、第一線で活躍する方々や仲間との出会いが、学生自身のキャリアや目標をより明確なものとする貴重な機会になっている。様々な経験を通して、現状に縛られない広い視野をもってさらに飛躍していく学生たちの今後に期待したい。

#### ◇2024年度夏期プログラム実績

派遣人数	1名
派遣先	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）1名
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生情報のデータベース入力</li> <li>・ 新学期準備</li> <li>・ 新学期オリエンテーション、授業への参加</li> <li>・ 学生の会話練習補助</li> </ul>

#### ◇2024年度春期プログラム実績

派遣人数	1名
派遣先	ITTO（国際熱帯木材機関）1名
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ SNS記事の執筆</li> <li>・ ニュースレターの作成、テンプレートの改善</li> <li>・ 高校での講義補助</li> </ul>

（職員 杉山 佳奈）

## (2) 派遣学生生活動報告

1. 派遣学生	法学部グローバル法学科3年 磯辺 那奈
2. 実務体験先機関	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (IUC)
3. 志望動機	外国人として過ごしたイギリスでは、生活環境の違いから問題に直面することがあった。特に困ったのは、寮で深夜に突然鳴った火災報知器の対応だ。英語力には問題なかったが、咄嗟に行動できず、まして言葉が通じなければ、恐怖は何倍にも膨れ上がったと思う。結局は誤作動だったが、対応が遅れば手遅れになった可能性さえある。この経験から、現地の言葉を理解する重要性を再確認した。そこで、日本語教育を行う機関では実務としてどのような活動を行っているか知り、また外国人にとって不安に感じる要素はどのようなものか知り、探求テーマに活かしたいため。
4. 実習テーマ・達成度	<p><b>実習テーマ（興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど）</b> 異国で外国人として暮らす学生が抱えているであろう不安を取り除き、安心して自身の勉強に励む時間を確保して欲しい。緊張気味の学生がいたら話し掛けて不安を取り除こうとしていた。</p> <p><b>達成度（実習を振り返って）</b> きっと誰しもが緊張していたと思うが、入学式やその直後には学生同士で打ち解け合っているように見え、あまり不安を感じていそうな学生を見つけられなかった。数日後から主に昼食時に話すことが多くなった。しかし、来日/通学初日が最も緊張していたと思うため、その日の様子を注視していれば良かった。ただ、初日に比べ学生との距離が縮まったことを考えると、会話を通していくから効果はあったのではないかと思う。</p>
5. 実務体験内容	<p><b>スケジュール、内容等</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・8/26 教職員会議出席/新入生データベース作成</li> <li>・8/27 メールボックス・ロッカー名札準備/新入生データベース作成</li> <li>・8/29 データベース入力/学生証作成/教職員会議参加</li> <li>・9/2 入学式&amp;オリエンテーション/インタビュー試験案内/クラス写真作成</li> <li>・9/4 漢字&amp;コンピュータオリエンテーション</li> <li>・9/10 授業参加</li> <li>・9/11 データベース入力/メンタルヘルスオリエンテーション</li> <li>・9/12 卒業生データベース更新</li> <li>・9/13 授業参加/卒業生 Name 索引検索/日本財団フェローデータ更新</li> <li>・9/17 日本財団フェローデータ更新/授業見学/奨学金の振込口座の確認</li> <li>・9/19 日本財団フェローデータ更新/授業見学/最終報告書作成準備</li> </ul>
6. 学び・気づき	<p><b>新たに学んだこと</b></p> <p>8/26 IUC の概要をご説明いただき、学生のことを必ず名字で呼んでいることを知った。海外では名前と呼ぶ方が一般的だが、日本では名字で呼ぶ方が一般的であるため、このルールを採用しているようだ。日本語を学ぶだけでなく、日本の習慣をも学べる場だと分かった。</p> <p>8/27 学生の呼び方だけでなく、ロッカー等の名札も名字を入力して作成。ロッカーは毎日利用するものであるから、視覚的にも日本の習慣に慣れることができるだろうと思った。</p> <p>8/29 「寺子屋」と呼ばれる学生が主体的に学べるようにする環境があると知った。思い返せば、留学先では最初知り合いがおらず、自分から動き出すのが難しいと感じる時間があったため、このような場合は言語を学ぶ学生にとって有意義な時間</p>

	<p>になるだろうと思った。</p> <p>9/2 新入生の日本語のレベルが実際どのようなものかあまり理解していなかったため、今考えれば難しい日本語を多用してしまったと思う。同日、私は入学式に来た新入生に検温してもらい、名前を伺って学生証を渡す係をしており、教室に来た学生に対して「検温お願いします」「お名前伺って良いですか」と言っていた。大抵の学生は聞き取ってくれ、検温し自身の名前を名乗ってくれたが、中には私が何を言ったか理解できていなさそうな学生もいた。私があたふたしている間に他の方が対応してくださったその時、自分が普段日本人に接するように日本語を使っていたことに気付いた。中には問題なく理解できる学生もいたが、「熱計ってください」「お名前何ですか？」というような易しい日本語に言い換えていけば、より伝わりやすかったのではと思った。学生それぞれ日本語のレベルは様々なので、場合にに応じて簡単な単語を選んで話そうと思った瞬間だった。</p> <p>9/4 パートン所長の「学びの環境を整える」というメッセージが印象に残った。なぜならば、この言葉を裏付けるように様々な学びの機会が提供されていることを知ったからだ。例えば、同日参加した漢字オリエンテーションでは、漢字そのものの意味だけでなくそれを使った熟語等を併せて学ぶことができると知った。単体の理解で終わらない「上級」日本語を学ぶ場だと再認識した。</p> <p>9/10 授業に参加させていただき、学生それぞれが日本語を学び始めたきっかけを聞いた。学術的な理由から趣味まで様々な理由があった。「日本語を上達させたい」という思いは全員共通だろうが、個々の目的は違う。そのため、例えば将来日本で働きたいと思っている人とは積極的に日本に関する話題を振るなどその人に合った話題提供がしたいと思った。</p> <p>9/11 日本と外国（特にアメリカ）のメンタルに対する向き合い方の差に驚いた。日本でメンタルについて話すことは、タブーとは言わずとも公の場で話すのには気が引けるが、同日参加したオリエンテーションでは自分の状況をオープンに話している学生がいた。同日は英語で会話していたため、異国の地で暮らすことへの率直な思いを知れた気がした。志望動機に書いた通り、私は留学先で困難を経験したことがあったため、経験者として精神面でのサポートもできたらと感じた。</p> <p>9/12 卒業生の Facebook や LinkedIn を記録しているのは、修了後の卒業生の「今」を知るためだと分かった。プログラムを修了してどのように活躍しているかを把握し発信することで、入学を希望する学生は将来像を描きやすくなるのではないかと思った。</p> <p>9/13 授業に参加させていただき、「言葉は今も生きており変化し続けている」ことを学んだ。</p> <p>9/17 日本財団フェローの現在を調べ、大学で教鞭を取っている人もいれば通訳者として活動している人もいるなど、卒業生は様々な分野で活躍していることを知った。</p> <p>9/19 同日が最終日だと伝えると何人かの学生が話に来てくれた。初めは勉強を中断させてしまい申し訳ないと思っていたが、「話すことでも勉強できるから」と言い、地元の話に専門分野など様々な話をした。それぞれが望む将来に向けて日本語の勉強を頑張りたいと思った。</p> <p><b>実習前と実習後の変化</b></p> <p>実習前は「日本語教育を提供する場」という文字上の理解だけであったため、教育機関と認識していた。しかし、実習を通して学生への接し方・場の提供・環境の整備・卒業生との繋がりなどを学ぶ中で、教育機関である上により日本を（横浜を）理解してもらえるような環境が整った場だと分かった。</p>
--	---

	<p><b>実習によって得た知識やスキルなど</b>                  相手の立場に立って考える姿勢と言語の勉強に向き合う姿勢が養われたと思う。                  前者は、例えば入学式での経験のように、自分が同じ立場に立たされた時にどう思うかを考え行動するスキルが身に付いた。また、「生きた」言語を学んでいるからこそ時代によって言葉は変化するため、微妙なニュアンスの違いで相手に誤解を与えないようにしたり相手が受ける印象を考えたりするようになった。</p>
<p>7. 特に印象に残ったこと</p>	<p>IUC で学ぶ目的は学生それぞれで違い、入学時の日本語レベルには個人差があるため、一人一人に合った対応が求められるということ。例えば、修了後修士/博士課程に戻った後の研究に役立てることを目的に掲げる人もいれば、翻訳者になる夢を持つ人もいる。翻訳者を目指す人に博士に進んだ場合の話をしてあまり意味がない。また、これから日本語を上達させようとする人に高度な単語を使えば、場合によっては勉強を嫌いになってしまうかもしれない。このような個々にニーズを充たすために、一人一人との対話を通じて相手が何を求めており、それに応じて対応するという経験が多くできたことが印象に残った。</p>
<p>8. 課題・改善点</p>	<p><b>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点</b>                  最終報告会において他機関で実務体験をしていた学生の発表を聞き、私は自分自身で何かを企画したりして作り上げた成果がない点が課題だと思った。JICA の実務体験生はベトナムフェスタを企画したり、YOKE の実務体験生は SNS の活用を提案したりしていた。与えられた仕事をこなすだけでなく、学生達に話し掛けるなど主体的に行動できた面もあるが、他の実務体験生が主体的に 0 から物事を創り上げている事実に対抗するものがない点に少し負い目を感じた。もし自分からやってみたくて提案できていれば、よりより実務体験ができていたのではないかと思い、この点が改善点として挙げられる。</p>
<p>9. 今後へ向けて</p>	<p><b>この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか</b>                  将来は国際機関で法分野に関わる職員になりたいと考えている。国際機関が扱う国際問題は多種多様であり、それに苦しむ人々が置かれている状況もまた一人一人違っている。このような多様性に富んだ社会で活躍するためには、様々な目的を持っている人々との対話が重要だと思う。そのため、今回の IUC での実務体験を通して様々な目的・将来像を描いて日本語を勉強する学生との対話ができただことは今後のキャリア形成に大きく役立つと考える。また、国際機関で働きたいという思いがより一層湧いた。そのため、ポジションに求められる役割を多いに果たせるよう、研究に一層励み専門性を高めたいと思う。</p>
<p>10. プログラム風景</p>	<div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;"> <p>事務局で作業をしている様子の写真。                      ここで様々な作業の手順を教えていただき、実際に手を動かして実習を行っていた。</p> </div> </div>



昼休みに学生とお昼ご飯を食べている写真。

何回か話すうちに誰がどのような目的で日本語を学び、将来どうなりたいと言っていたかを覚えられるようになった。それにより相手に合った話題を提供できた。

1. 派遣学生	国際学部国際学科2年 佐々木 野花
2. 実務体験先機関	ITTO (国際熱帯木材機関)
3. 志望動機	<p>①国際機関での仕事を体験したいと思ったから。私は将来途上国に住む貧しい人の支援をしたいと思っている。それができる職業・セクター (JICA や国連機関等の行政系、NGO・NPO 等の民間系、開発コンサルタントやソーシャルビジネス、CSR 部門等の企業系) はいろいろあり、それぞれにメリットデメリットがある。それらを全部経験して、自分自身が楽しく能力をより生かせる場所で働きたい。民間セクターの仕事は少しずつ経験を積んできたが、行政系でインターンシップをできる機会は希少だ。ITTO での仕事を通し、国際機関での仕事がどのような内容なのか、どのように進行しているのか、職員さんたちはどのような姿勢で仕事に取り組んでいるのか、どのような人生を歩んで今 ITTO にいるのか、などを知りたいと思い志望した。</p> <p>②環境保護と経済の促進の両立に興味があったから。一年前にフィリピンの NGO でインターンシップをさせていただいていた際、上司にこんなことを言われた。「政府はここにコンクリートの展望台を建てた。これは持続的ではなく良くないことだ。何かを作る際は木を使うべきだ。」この時私は完全に同意できなかった。確かに持続性を考慮することは大切だが、コンクリートを全否定すると発展が妨げられるのではないか。コンクリートは使用に十分注意しつつ、臨機応変に使っていくべきなのではないか。私はその時から環境保護と経済促進の両立に興味があった。ITTO は熱帯林の保護と貿易の促進を行っている団体だ。この両者をどのように両立させているのか、学んでみたい ITTO を志望した。</p>
4. 実習テーマ・達成度	<p><b>実習テーマ (興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど)</b></p> <p>志望動機①に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ITTO の仕事内容にはどのようなものがあるのか</li> <li>・ ITTO の仕事はどのように進行しているのか</li> <li>・ 職員さんがどのような姿勢で仕事に取り組んでいるのか</li> <li>・ 職員さんはどのようなキャリアを築き今 ITTO で働いているのか</li> </ul> <p>志望動機②に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 環境保護と経済促進の両立をどのように行っているのか</li> </ul> <p><b>達成度 (実習を振り返って)</b></p> <p>志望動機①に関して…75 点</p> <p>できるだけ多くの職員さんに、「あなたはどのような仕事を行っているのですか?」「どのようにしてこの仕事を見つけたのですか?」など聞いた。それでも半分くらいの人にしか聞けなかったと思う。特に日本語話者でない人に話を聞くのは (自分の語学力の低さもあって) 難しかった。オフィスが2つに分かれており、自分が活動していた側の人とは比較的話ができたが、向かいサイドのオフィスの人と話すのは難しかった。より多くの人と話せたらよかったと思う。小さな会議に参加させていただいたこともあり、会議の内容はあまりわからなかったが、どのように仕事が進められているのかなんとなく掴むことができた。しかしこれも、1回参加しただけだったので、より多くの会議を逃さず参加できたらよりよかったと思う。</p> <p>志望動機②に関して…65 点</p> <p>SNS 記事のドラフトを書くにあたって、少しずつその方法を学んだ。でも2か月かけて3つのコツしか学べなかった。プロジェクトの記事が、英語やスペイン語で書かれておりプロジェクトを把握するのに時間がかかったせいだと思う。英語4技能</p>

	<p>の中で、リーディングが一番苦手、今回はそれが仇となった。スペイン語の記事しかないときはもうお手上げだった。改めて振り返ると難しい仕事だったと思う。</p>
<p>5. 実務体験内容</p>	<p><b>スケジュール、内容等</b></p> <p>2月は5回、3月は8回出勤した。(YOKEのオリエンテーションや中間・最終報告会、事務所訪問を入れるともっと多い。)すべて10:00~17:00の時間で働いた。個室の中で記事の執筆をするのがメインだったが、職員さんが気を利かせてランチの時間を多めにとってください、その中で学べたことがたくさんあった。個室から出ると、普段話さない職員さんや来客の方と話す機会、会議に参加する機会が転がってくるため、個室に居続けないようにすることも大切にしていた。(個人作業だと集中力が切れやすいという自身の特徴もあったが。)私が行った業務は大きく分けて4つ。</p> <p>①SNS記事の執筆</p> <p>ITTOのホームページからプロジェクトを探し、プロジェクトを学び、記事のテーマを決めて200英単語以内で執筆を行った。全部で4つの記事を作成した。</p> <p>②Newsletter templateの改善</p> <p>4年ほど前に作成されたものを、新たに“編集者からのメッセージ”“最新の熱帯林ニュース”“最新のイベント情報”などを新たな要素として改良し組み込んだ。</p> <p>③The International Day for biodiversity (IDB) (国際生物多様性の日)の記事作成</p> <p>5月22日の記念日に記事を出すため、IDBとは? ITTOが多様性を守るためにしているプロジェクトは?などの内容を調べて記事にした。</p> <p>④サイエンスフロンティア高校での講義補助&amp;記事執筆</p> <p>出前講義のお手伝いをした。まずどのようにワークショップを進めるのかを話し合い、当日の準備をした。授業中は、紙やペンを配る、グループ作りを手伝う等の補助や、ITTOがどのような講義をしたのか、生徒からどのような意見が出たのか、等を記録した。オフィスに戻ってからそれらのメモと写真をもとに記事を作成した。</p>
<p>6. 学び・気づき</p>	<p><b>新たに学んだこと</b></p> <p>途上国の支援は、いろいろな分野からの支援が考えられる。例えば、食料、医療、インフラ、女性、子供、など。いろいろある中で、今まで森林面での支援を考えたことがなかった。しかし熱帯林地域に住む何億もの住民たちが熱帯林を生活の糧にしている以上、森林面からの支援を考える必要があると学んだ。さらに、熱帯林を取り扱うことは、そこに住む住民のためだけでなく、世界中すべての人にとって必要だ。熱帯林は多くの二酸化炭素を貯蓄し、様々な自然災害を防いでいる。</p> <p>また、環境保護と経済促進の両立のために必要なことを3つ紹介したい。まず、トレーサビリティ。これは、追跡能力と訳せる。木材が生産されてから、伐採、加工、輸送、販売されるまでの過程で違法がないかを追跡する能力のこと。これによって、熱帯林を使用しつつも持続可能性が高まる。ITTOはトレーサビリティを向上させるためのプロジェクトをいくつか行っている。次に、地域コミュニティをエンパワメントすること。何か物資を支援するのではなく、地域コミュニティを活性化させることによって、ITTOがプロジェクトから身を引いた後でも、そこで受け継がれたノウハウは永続する。それによって森林経営は持続的になる。最後に、付加価値をつけること。ただシンプルに加工したものを販売するよりも、少し難しく加工してその木材により多くの価値をつけることによって、少量の伐採で多くの利益を生むことができる。</p> <p>以上が、仕事を通してITTOの内容面について学んだことであるが、ITTOで働くスタイルについて学んだこともいくつか紹介したい。まず最初に感じたのは、資金力</p>

	<p>だ。ITTO の職員さんで、「ITTO は国際組織の中では小さい方で予算は限られている」とおっしゃっていた人もいたが、NGO でインターンシップを行ってきた経験が多い私にとっては、比較すると潤沢な資金があるように見えた。例えば、初日に ITTO デザインの USB を頂き、たった 2 か月のインターン生にこんなにいいものをプレゼントしてもいいのかと思った。他にも、先週はバンコク、来週は仙台、といったように出張が多いことも（仕事柄出張が必須といえども）、資金力が高いと感じた。すべての部屋が個室で電気コードが敷かれ、モニターと内線があることもすごい。次に、日本の企業と比べだいぶフレキシブルだと思った。休憩を取り始める時間は自由で働きやすいと思った。そして、採用方法に関しても意外な気づきがあった。求人情報を見つけて応募する人が多いと思っていたが（もちろんそういう人はいたが）、別の会社で働いていて、ITTO とかかわった時にスカウトされた、という人も意外と多かった。最後に、行政との関わり方。NGO はどちらかという行政に訴えかける、という形でかかわることが多いが、ITTO では行政と一緒に活動を進めているような印象を受けた。</p> <p><b>実習前と実習後の変化</b> 国際機関での仕事がどのように進んでいるのか、内部から見ることによって、以前より鮮明にわかるようになった。特に職員が働くスタイルが一番実感できた部分であった。</p> <p><b>実習によって得た知識やスキルなど</b> 実習にて得た知識は上記のとおりである。情報をうまくまとめて記事にする能力が少しは上がったと信じている。</p>
<p>7. 特に印象に残ったこと</p>	<p>職員さんが優しく、何度も仕事で何か問題が発生していないか見に来てくれたこと、ランチに連れて行ってくださったことが印象に残っている。私もこんな上司になりたいと思った。また、きれいな景色を独り占めしながらベランダで仕事をした午後は思い出深い。</p>
<p>8. 課題・改善点</p>	<p><b>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点</b> まず初めに、言語の壁が課題だった。読むことが苦手なため翻訳機を多用しないと歯が立たなくて効率性が落ちた。比較的得意なはずの聞く能力も、ビジネスレベルになると難しく、理解に齟齬が生じるときがあった。しゃべることもうまくいかず、自分の理解があっているのか確かめることも億劫になっていた。今まで幾度となく自分の英語能力に障害を感じていたが、今回も負けず劣らず、修行がもっと必要だと感じた。</p> <p>また、忙しい上司とのかかわり方については、私が初めて直面した課題だった。フィードバックをもらって初めて完成するドラフトも、なかなかフィードバックがもらえず苦労した。メールでデータを送っても、印刷して直接見せに行っても見てももらえず、どうすればいいのかわからなかった。将来、きっと同じような場面に遭遇することは大いに考えられるため、忙しい人にどのようにアプローチしたら仕事を見てくれるのか、考える必要がある。</p> <p>最後に、私は本当に集中力が低いと感じた。特に個室にて一人で仕事をするのは、著しく自分の集中力を低下させると感じた。でも将来甘いことを言ってもらえないので、集中力を鍛えなければと思った。</p>

9. 今後へ向けて	<p><b>この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか</b></p> <p>国際機関での働き方がどのような感じなのか、今回の実習で多少理解することができたので、将来就職先を決めるときの判断材料にしたい。</p> <p>経済発展と森林保護の両立に関しても、確実な方法はなく、両者どちらも得られるように試行錯誤してやっていく必要があるという意識をもって今後も支援について考えていきたい。</p>
10. プログラム風景	 <p>活動部屋の写真。</p>

## 12. キャンパス別プロジェクト 白金キャンパス:TAKANAWA HOP WAY (高輪ホップコミュニティ活動)

### (1) 総括

「TAKANAWA HOP WAY」は、一般社団法人高輪ゲートウェイエリアマネジメントが行う高輪ゲートウェイ駅周辺のコミュニティ活動である。ビールの原料となるホップを高輪地域の住民の方々、企業や学校などと協働しつつ育て、収穫したホップで高輪産クラフトビールやソーダをつくり、地域の絆やコミュニティの力を強め、高輪地域を盛り上げていく活動を行っている。

明治学院大学では、この活動を開始した2021年度より法学部のゼミ活動として、総合企画室社会連携課(現学長室社会連携課)とともに参加し、大学内でのホップ栽培を始めとし、ビールのラベルデザインやイベントでの商品販売の手伝い、地域の方々との交流など様々な活動に取り組んできた。3年目を迎えた2023年度はこのプロジェクトの管轄について本学学内で事業移管がなされ、ボランティアセンターが担当部署となり活動を行ってきた。そして4年目を迎えた2024年度は、全ての学部生・院生を対象に公募した結果、手を挙げた2年生1名、3年生7名、4年生3名の計11名の学生がプロジェクトメンバーとして活動に取り組んだ。

2024年度のプロジェクトの特徴として、過去3年間に行っていた学内でのホップの栽培育成やビールラベルのデザインなどに加えて、プロダクトデザインでご活躍されている一野篤氏をお迎えした「デザイン勉強会」や地域イベントでのブース出展、ホップを使った石けんづくりワークショップを実施するなど、ボランティアセンターで活動をする意味をプロジェクトメンバーで考え、地域交流やまちづくりとボランティアを結び付けながら、複数の取り組みに挑戦した。

2025年度も明治学院大学としては、継続してボランティアセンターが担当部署として「TAKANAWA HOP WAY」に参画することが決定し、新メンバーとして13名の学生が選出され活動が始まっている。それに加えて、当年度のプロジェクトメンバーも複数名オブザーバーとして活動に関わるようになった。2025年度もJR東日本をはじめ、地域の皆様や企業の皆様と連携し、高輪の街に関わる人、このプロジェクトに関わる人の想いを大切に、明治学院大学もプロジェクトの一員として、まちの活性化の一助となるべく、プロジェクトメンバー一人ひとりが主体性を持って活動に取り組むことを期待したい。

### (2) 活動の様子



2024年度メンバー集合



ホップ収穫



学生がデザインしたビールラベル



地域イベントでの本学ブース

ホップを使った石けん作りワークショップ  
(職員 熊澤 瑞)

## 横浜キャンパス：畑やろうじゃないか

### (1) 総括

「畑やろうじゃないか」は、大規模農業による環境負荷や大学と地域の関係の希薄さに着目し、ボランティアセンターに隣接する横浜校舎 4 号館の緑地スペースを活用して農作物を育てる学生企画である。

学生の声から始まった本企画も 2024 年度で 2 年目を迎えた。近隣の舞岡公園で農作業を行う農業技術者の皆様からのご協力もいただきながら、春学期はジャガイモやピーマン、秋学期は大根やキャベツなどを無農薬で育て、交代で管理し軌道に乗っている。収穫した野菜は学生たち自身で調理し、お世話になっている地域の方にお渡ししたり、学内で調理大会を開いて試食を行うなどして小規模農業や自給自足の意義を発信する機会になっている。

### (2) 活動報告

メンバー	10 名
収穫した野菜	ジャガイモ、ナス、ピーマン（春学期）、大根、キャベツ、春菊（秋学期）
1 年間の主な活動内容	定期ミーティング、野菜の管理・収穫（4～7 月、9 月～12 月）、調理大会の実施（6 月・12 月）



4 月 土づくり



6 月 調理大会



12 月 調理大会



5 月 収穫



11 月 収穫



通年 野菜の管理

(職員 杉山 佳奈)



## Ⅲ. 新入生アンケート



### Ⅲ. 新入生アンケート

#### 新入生のボランティア意識とセンターの課題 「2024 年度新入生ボランティア活動アンケート」

##### 1. アンケートの実施方法と回答者について

ボランティアセンターでは、2001 年度から毎年 4 月に新入生にボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを実施している。開始当初から 2019 年度までは、学科ガイダンス時に対面でアンケートを実施してきた。しかし、新型コロナウイルスの蔓延により 2020 年度はアンケートを実施できなかった。そして 2021 年度以降はポートヘボンのアンケート機能を利用して Web アンケートを実施している。

学科ごとに回答率を比較してみると、国際学科が 52.7%、国際キャリア学科が 47.1%、続いて教育発達学科 44.7%、心理学科 43.2%となっている一方で、経済学科 24.1%、経営学科 27.7% 国際経営学科 26%となり、この傾向はポートヘボンでの回答をするようになってから顕著であるが、コロナ以前は経済学科の回答率が全学科の中で一番高い時期が続いていた。

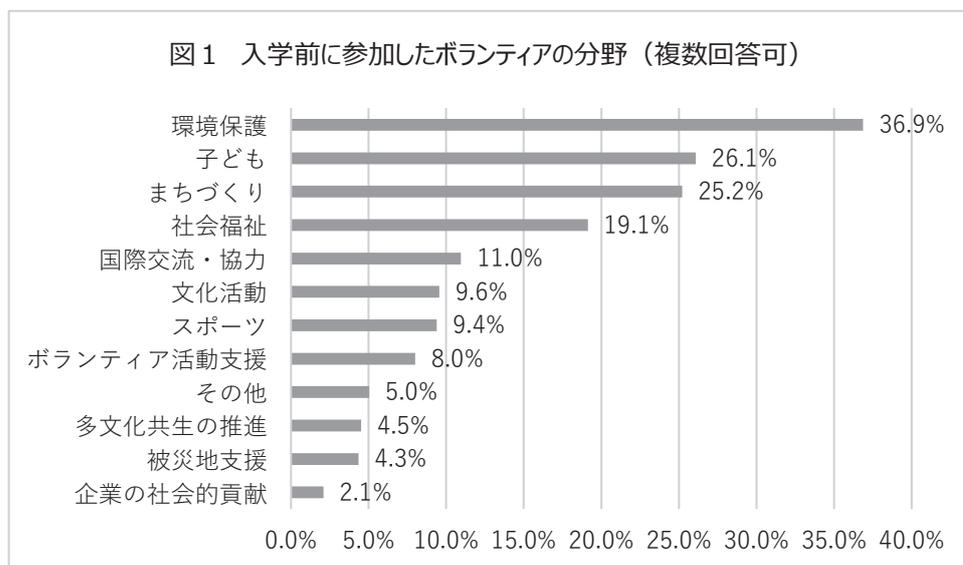
特に国際キャリア学科はその逆であるが、ちょうど国際学部の授業で春先にボランティアセンター活動紹介を組み込んだ授業も複数で行われ、その効果もあると思われる。

対面で実施していた頃のアンケートでは全入学者のうち 90%ほどが回答し、2,500 人前後の回答を得てきた。一方で、Web アンケートでは、最初の 2021 年度を除き、2022 年度以降は回答率が 30%台を推移して、ポートヘボンによる場合、その程度の回収率になることが明らかになってきている。

##### 2. 大学入学前のボランティア活動

2024 年度新入生の大学入学前のボランティア活動への参加については、参加経験のある人が 49.3% (575 人)、無い人が 49.4% (576 人) 等拮抗している。この傾向は若干の差はあれども、例年とあまり変化がない。

取り組んだボランティアの分野であるが、環境保護活動、子どもに関するボランティアは相変わらず多くの学生が参加しているが（経験ありの学生の内 36.9%、26.6%）、2014 年度の調査との比較では、まちづくり (25.2%←20.2%)、国際交流・多文化共生の推進合計\* (15.5%←7.4%) の増加が目立つ。\*2014 ではこれらが一つの項目のため



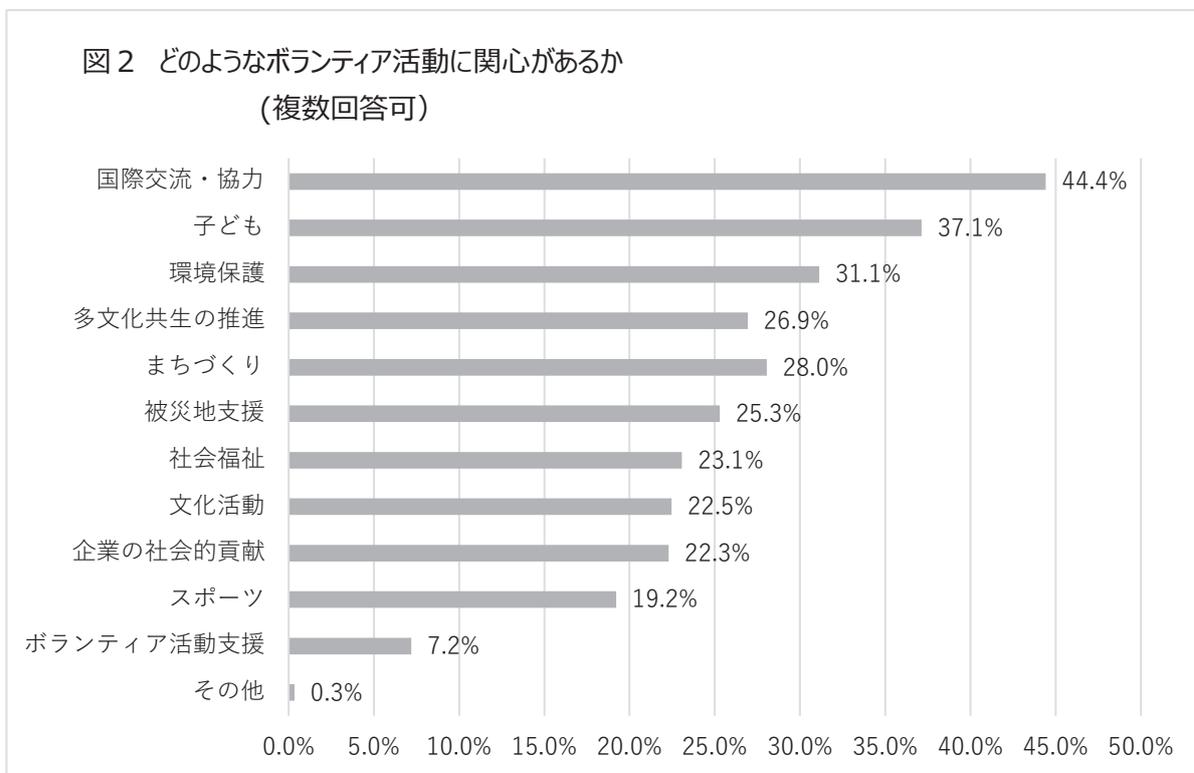
### 3. ボランティア活動に対する関心

ボランティア活動に参加してみたいか、という問いに対して 78.6%の学生が「はい」と回答している。この比率は例年と比べてそれほど変化がないが、「ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか」という問いに対して 2024 年度は、「大いに興味がある」「ある」の合計は 80%近くに上り、10 年前の 2014 年度が「大いに興味がある (18.5%)」、「ある (47.6%)」(計 66%) と比べると高くなっており、コロナ禍以降この傾向が続いている。

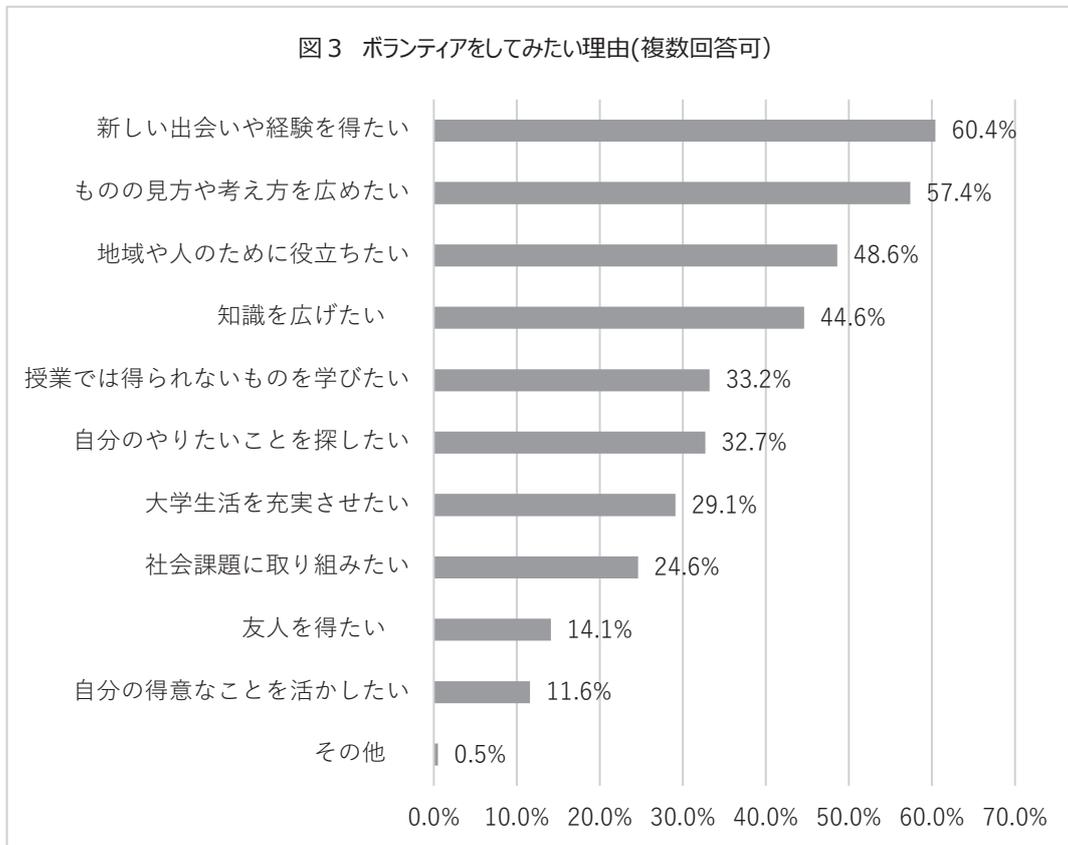
また、「ボランティアに関するニュースに興味がありますか」と聞いたところ、「大いに興味がある」が 15.1%、「興味がある」が 47.6%、「どちらともいえない」24.5%であった。これは、例年と同じ傾向であるが「ボランティア活動を通して学ぶこと」に比べニュースへの関心では、中間的な回答が多くなる。

「大学時代にボランティア活動に参加したいですか」という問いに対しては、「はい」が 78.6%、「いいえ」が 19%、未回答が 2.4%であった。アンケートを始めた 2008 年ごろからしばらくは 60%台から 70%に届くか届かないぐらいの割合であったが、2014 年以降はコロナ禍に見舞われた年も含めて 75%を大きく上回っている。

新入生が関心を持つ活動分野について、複数回答可の設問で尋ねた。図 2 は、回答者 1,166 人を母数とした関心分野の比率を示している。その結果、「国際交流・協力」が 44.4%と最も高く、多くの新入生が関心を寄せていることがわかる。一方で、図 1 で示した入学前のボランティア経験では「環境保護」が最も多かったが、関心分野としては相対的に低い位置にとどまっている点も注目される。こうした差異については、活動内容や参加のしやすさなど、より具体的な情報が得られれば、さらに踏み込んだ分析が可能となる。今回は関心の傾向にとどめ、各分野への関心の程度を示すにとどめておく。



またボランティア活動に参加したいと回答した 917 名を母数としてその理由について質問した結果は次の通りである。(複数回答可)



結果を見ると、「新しい出会いや経験を得たい」(60.4%)、「ものの見方や考え方を広めたい」(57.4%)「地域や人のために役立ちたい」(48.6%)と続いている。この傾向は例年と変わらない。一方で、「社会課題に取り組みたい」(24.6%)は、例年このぐらいの比率となっているが、「地域や人のために役立ちたい」を選択する人が多い割に連動が見られない。そこは、少し深掘りして、地域での活動とその背景にある課題を意識するような発信もしていきたい。

また、「どのようなスタイルでボランティア活動に参加したいですか。(複数回答可)」と聞いてみた。活動日については、「夏休み・冬休み等の長期休暇」と回答した人が 655 人(71.4%)で最も多かった。また頻度については「月に1~2回くらい」が 326 人(35.6%)、「2ヶ月に1回くらい」が 308 人(33.6%)、「一定期間に集中して」が 216 人(23.6%)となっている。

また、内容については、「一つの活動を続けていきたい」が 149 人(12.8%)に対して、「色々な活動に挑戦していきたい」が 758 人(65.0%)となっている。新入生ということもあり、定期的な活動に継続的に関わっていききたいというより、これからできる限り様々な活動を見聞きして、参加したい、という学生が多いのだと思われる。ボランティアセンターとしては、1 Day for Others を認知してもらい、多くの学生への参加を促す。また、活動日として長期休暇を挙げている学生が 655 人(71.4%)に上ることから、その間でのプログラムについても展開していくことは検討すべきことと考える。

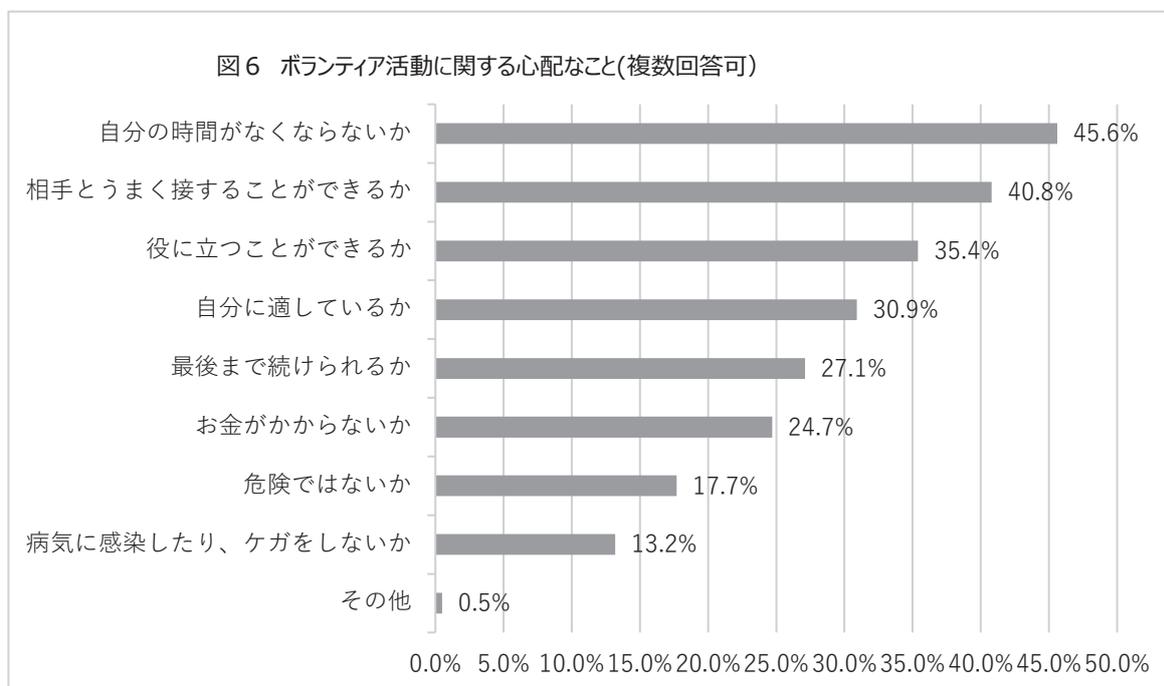
図4 ボランティア活動を希望する日(複数回答可)

	回答者数(人)	割合(%)
平日	231	25.2
休日	358	39.0
夏休み・冬休み等の長期休暇	655	71.4

図5 ボランティア活動を希望する頻度(複数回答可)

	回答者数(人)	割合(%)
週に1回くらい	52	5.7
月に1~2回くらい	326	35.6
2ヵ月に1回くらい	308	33.6
一定期間に集中して	216	23.6
その他	12	1.3
未回答	252	27.5

#### 4. ボランティア活動に関して心配なこと



ボランティア活動をためらうことはどんなことだろうか。より多くの学生が心配に思う気持ちをより小さくしていくこと、それもボランティアセンターは配慮していく必要があると思われる。そこで「ボランティア活動に対する心配なことはなにか（複数回答可）」をきいてみた。複数回答可のため、アンケート回答数 1166 を母数としてその項目ごとの割合を示した。

一番心配に思うことは「自分の時間がなくなるか」（45.6%）であるが、これは先ほどスタイルについての設問での回答で「色々な活動に挑戦していきたい」が 758 人（65.0%）ということだが自由記述で部活との兼ね合いなどの記載もあることから、まだ大学生としての生活そのものが時間的にどう配分できるか不明確であることにも通じていると思われる。

その他としては「相手とうまく接することができるか」（40.8%）、「役に立つことができるか」（35.4%）、「自分に適しているか」（30.9%）と続くが、活動の具体的な内容もできる限り学生に伝えていくことでこれらの心配事の払しょくにつながるとよいと思う。

## 5. 明治学院大学のボランティア活動

最後に、明治学院大学のボランティアについて触れてみたい。「明治学院大学のボランティア活動について知っていましたか」と聞いたところ、「はい」が 46.6%（543 人）、「いいえ」が 51.0%（595 人）であった。また、「はい」と回答した人に「どのように明治学院大学のボランティア活動を知りましたか（複数回答可）」と聞いたところ、「大学のホームページ」と回答した人が一番多く 75.0%（407 人）、次が「オープンキャンパス」36.3%（197 人）であった。大学のホームページへの情報発信を意識していく必要もあるが、併せて SNS の認知が低く（8.1%）、今後の広報戦略において検討すべき課題でもある。

図7 どのように明治学院大学のボランティア活動をしましたか（複数回答可）

	回答者数（人）	割合（%）
大学のホームページ	407	75.0
活動が紹介された新聞記事・テレビ記事	15	2.8
オープンキャンパス	197	36.3
先輩、家族、知人、友人に聞いた	40	7.4
学校の先生から聞いた	17	3.1
活動が紹介された Web 記事	27	5.0
SNS	44	8.1
その他	8	1.5

※明治学院大学のボランティア活動を知っていたと回答した 543 人を母数

年間 100 件程度のプログラムが組まれている、1 日社会貢献プログラム「1 Day for Others」は、これまでにボランティアを経験したことがない新入生にとっては比較的参加のしやすい機会だ。一方で、「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、3 年間かけて修了するプログラムであり、ボランティア実践と大学での学びを結びつけながら腰を据えて取り組みたい学生にとって魅力あるプログラムである。「1 Day for Others に参加してみようと思いますか」、「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケート・プログラムに参加してみようと思いますか」とそれぞれ新入生に聞いた結果を図 8 にまとめた。

図 8 明治学院大学のボランティアプログラムに参加したいか

	1 Day for Others		ボランティア・サティフィケート・プログラム	
	回答者数 (人)	割合 (%)	回答者数 (人)	割合 (%)
参加する	69	5.9	36	3.1
できれば参加したい	360	30.9	260	22.3
情報を確認してから参加を考える	644	55.2	731	62.7
参加しない	56	4.8	106	9.1
未回答	37	3.2	33	2.8
全体	1166	100	1166	100

「1 Day for Others」については、各プログラムともかなり具体的な内容で募集をかけるため、「情報を確認してから参加を考える」という回答者にとっても、伝わり、事前に参加判断ができると思われる。一方で「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」でも、同じく「情報を確認してから参加を考える」回答が6割にも上っており、情報をわかりやすく発信し、参加するとどういった成果が得られるのか、などプログラム自体の魅力を伝えていくことも重要であると思われる。

(プログラムディレクター 菅沼 彰宏)

## IV. ボランティアセンター資料



## IV. ボランティアセンター資料

### 1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

- ・ 明治学院大学保証人会
- ・ 明治学院大学校友会（現学友会）
- ・ 明治学院大学同窓会（ 〃 ）
- ・ 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」

上記皆様より、ご支援を頂戴いたしました。

### 2. 2024年度マスコミ報道一覧

日付	媒体名	内容
7月21日	カトリック新聞	明治学院大学初のレインボーフェス 多様な性尊重する取り組み（6頁参照）
2月9日	NHK（Eテレ）	こころの時代～宗教・人生～すれ違う こそれ合う 「わからない他者」とどう生きるか？ ※猪瀬浩平センター長を取材、番組化
2月13日	中国新聞 （デジタル版は12日）	核兵器禁止条約第3回締約国会議 「市民が育てる実感」傍聴の大学生が報告会 （いつでもボランティアチャレンジ助成企画＋ボランティアカフェ 企画：ボランティアセンター「ニューヨークから横浜キャンパス へ」～核兵器禁止条約を知る～76頁参照）
2月13日	神奈川新聞 （デジタル版も13日）	核禁止条約会議報告会 「今生きる全ての人の問題」 （いつでもボランティアチャレンジ助成企画＋ボランティアカフェ 企画：ボランティアセンター「ニューヨークから横浜キャンパス へ」～核兵器禁止条約を知る～76頁参照）
2月14日	毎日新聞神奈川版 （デジタル版も14日）	「市民社会と一緒に育てる」 （いつでもボランティアチャレンジ助成企画＋ボランティアカフェ 企画：ボランティアセンター「ニューヨークから横浜キャンパス へ」～核兵器禁止条約を知る～76頁参照）
2月19日	東京新聞 （デジタル版も19日）	締約国全体が科学的知見から抑止論否定。次のステップに」 （いつでもボランティアチャレンジ助成企画＋ボランティアカフェ 企画：ボランティアセンター「ニューヨークから横浜キャンパス へ」～核兵器禁止条約を知る～76頁参照）

### 3. 2024年度委員等一覧

#### (1) ボランティアセンター運営委員

副学長	森 あおい (委員長)
文学部	梅澤 礼
経済学部	洪 潔清
社会学部	稲葉 振一郎
法学部	波多江 久美子
国際学部	榎本 珠良
心理学部	杉岡 千宏
情報数理学部	宮寺 隆之
教養教育センター	吉岡 拓
宗教部長	尾畑 裕
教務部長	大野 武
学生部長	大木 満
事務局長	高辻 智長
センター長	猪瀬 浩平
センター長補佐	西原 博之
センター長補佐	宮崎 理
コーディネーター	磯野 昌子
コーディネーター	砂川 秀樹

#### (2) ボランティア活動推進委員

センター長	猪瀬 浩平
センター長補佐	西原 博之
センター長補佐	宮崎 理
コーディネーター	磯野 昌子
コーディネーター	砂川 秀樹

#### (3) ボランティアセンタースタッフ

センター長	猪瀬 浩平
センター長補佐	西原 博之
センター長補佐	宮崎 理
次長兼課長	高橋 千尋
コーディネーター	磯野 昌子
コーディネーター	砂川 秀樹
コーディネーター	田中 悠輝
プログラムディレクター	菅沼 彰宏
課員	菊池 範子
課員	熊澤 瑞
課員	杉山 佳奈
派遣スタッフ	近藤 なつみ
派遣スタッフ	永島 莉沙

## 4. ボランティアセンター 2024 年度基本方針

ボランティアとは、人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである。あらゆる職業、研究・学習、日常生活の中にボランティア・スピリッツは存在している。社会生活の多様な場面で他者への貢献を考えることのできる市民を育てることが、本学の教育理念である。

この教育理念を具現化するために、ボランティアセンターは、学内外のあらゆる関係者が「他者への貢献」について考え、実践し、交流する場を提供する。それによって、一人一人が社会課題と出会い、向き合い、共に考えるなかで、市民として成長し、誰もが生きやすい方へ社会を変えていくことを目指す。

2024 年度は、ボランティアセンターの人と人、人と現場とをつなげる役割の一層の充実を図る。横浜校舎では、ボランティアセンター内外のスペースを活用した学生の活動や、教職員、そして地域の方々と連携した活動を活発化させる。白金校舎では来室者を増やすための機能を見直していく。また災害の被災地での活動や、国内外のボランティア・市民活動の現場で働く人びととの交流を活発化する。

以上を踏まえて、次の 4 点を 2024 年度の基本方針とする。

### 1. 本学学生、教職員全員のボランティア活動への参加促進と支援

ボランティア活動への参加を促進し、積極的に支援するための方策として、以下の 4 点を行う。

- ① 社会課題に出会う場の提供。「1 Day for Others」や「ボランティア・カフェ」の実施。「1 Day for Others」については、一つひとつのプログラムの質の向上を図る。2023 年度に刊行した『まるわかり 1Day for Others』を活用しながら教職員・学外協力者と連携したプログラムづくりを引き続き行う。
- ② 「社会課題に出会い・向き合う場」の提供。「いつでもボランティアチャレンジ(以下、いつボラという。）」、「ボランティアファンド学生チャレンジ(以下、ボラチャレという。）」、「明治学院大学災害ボランティア助成金」、外部資金調達等による活動を促進する。「いつボラ」、「ボラチャレ」の利用を一層拡大するため、積極的に広報を行うとともに、学生の利用しやすい形になっているか随時見直しを行う。「いつボラ」についても、教職員への活用を拡大するため、適宜、情報発信とニーズ把握を行いながら、支援の在り方を検討する。
- ③ 学生による学生支援の展開を促進する。そのために、学生自らがボランティア活動を活性化、支援するための組織作りを行う。ボランティアセンターのスタッフだけでなく、学生自身が議論に参加し、ボランティアセンターの場としての充実や、学生による学生の支援の方法を考える。
- ④ 教職員との協働を一層深めていくために、授業や研究への支援や、ボランティア・市民活動についての情報提供を積極的に行う。ボランティア・市民活動にかかわる研究・教育・実践を行っている教職員と連携するためのネットワークを構築する。白金校舎での教員との連携の活発化を目指すとともに、活動推進委員の役割について検討する。

## 2. ボランティア実践と大学の学びの融合の活性化

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム(以下、サティフィケートという。)を「社会課題に向き合い、考え、自分が変わる・社会を変える場」と位置づける。より多くの学生が学びを深めるため、運営委員と連携しながら、実践・学びの双方の指導方法の改善とともに、広報の充実を図る。認証方法のスリム化についても、引き続き検討する。サティフィケート修了学生が、学習・実践をさらに発展させる場として、ボランティア大賞にチャレンジするなど、サティフィケートを修了した学生・卒業生が学びの成果を共有する場を広げていく。

## 3. ボランティアセンターの交流・活動・研究の場としての機能の充実

スタッフの専門的知識を高め、センターの以下の4つの機能の一層の充実を図る。

### ① 学生・教職員のボランティア活動支援機能

- ・ボランティアをしたい人と、ボランティアを必要とする現場を結び付け、双方にとって意味のある活動を生み出す
- ・学生・教職員の活動や交流を活発化させるため、作業・ミーティングスペース・収納スペースを提供するとともに、その機能を高めていくための検討・改善を行う

### ② 教員との連携機能

- ・授業支援や教員の研究支援を通してボランティアセンターの活用を促進する
- ・教員の研究知見をボランティアセンターのプログラム開発に活かす

### ③ 学内外の情報発信・交流機能

- ・学内のボランティア活動情報や、学外で団体登録を経た団体・機関からのボランティア情報を提供する
- ・ボランティアセンター内外のスペースを活用し、明治学院内外の関係者が協働する活動を提供する

### ④ 本学のボランティアを深化させるための研究・研修機能

- ・スタッフの専門性を高めるとともに、中長期的な視野にたってボランティアセンターの課題を検討するため、スタッフ研修を定期的に行う
- ・他大学のボランティアセンターなど外部の団体と連携しながら、ボランティアセンターの活動の成果と課題を考える場を持つ

## 4. ボランティアセンターにおける活動の発信・広報・情報保障の強化

社会に対する説明責任を果たし、活動を活性化するために、学内他部署と連携しながら、ボランティアセンターの活動について、ホームページ、SNS、映像、リーフレット、報告書、オープンキャンパスなどを利用して広く情報を発信する。多様な学生、教職員に十分な情報保障ができるよう、引き続きアクセシビリティを十分に意識する。

以上の活動を創造的に実行するため、ボランティアセンターのスタッフが立場を超えて活

発に議論する場を保障するとともに、働きやすく、働き甲斐のある職場環境をつくりだす。

## 5. 明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日	大学評議会承認
2004年 5月19日	大学評議会承認
2004年10月20日	大学評議会承認
2005年10月 7日	常務理事会承認
2005年12月 9日	常務理事会承認
2006年 1月13日	常務理事会承認
2006年 7月14日	常務理事会承認
2010年 3月12日	常務理事会承認
2014年 3月14日	常務理事会承認
2018年 5月11日	常務理事会承認

### (設置)

第1条 明治学院大学(以下、「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター(以下「センター」という。)を置く。

### (目的)

第2条 センターは、共通教育機関として、「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

### (業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、以下の業務を行う。

- (1) サービス・ラーニングプログラムの企画、実施
- (2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど、学生の自主的活動の支援と助言
- (3) 地域や国際社会への貢献を目指し、社会との協働によるボランティアプログラムの開発
- (4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
- (5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
- (6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
- (7) その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

### (活動)

第4条 センターは、第2条の目的を達成するため、以下の学生の活動を支援する。

- (1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
- (2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
- (3) 地震、津波、台風、洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
- (4) 海外でのボランティア等に関する活動
- (5) 学外の人道支援機関、特定非営利活動法人(NPO)、企業等との連携活動
- (6) ボランティア参加への啓発活動
- (7) その他

### (運営委員会規程)

第5条 センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため、明治学院大学ボランティアセンター運営委員会を置く。

2 センター運営委員会規程は、これを別に定める。

### (構成)

第6条 センターには次の職員を置くことができる。

- (1) センター長 1名
- (2) センター長補佐 若干名
- (3) ボランティアコーディネーター 若干名

- (4) 非常勤ボランティアコーディネーター 若干名
- (5) 事務職員 若干名
- (センター長)

第7条 センター長は本学専任教員の中から、学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長は、センターの業務を統括する。

(センター長補佐)

第8条 センター長補佐は、本学専任教員の中から、センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長補佐は、センター長の業務を補佐する。

(ボランティアコーディネーター)

第9条 ボランティアコーディネーターの任用等は、「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2 非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は、「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

(評価・評価委員会)

第10条 ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

2 非常勤ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3 前2項に基づき設置する評価委員会は、副学長、学生部長、センター長、センター長補佐、大学事務局長、その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

(活動推進委員会)

第11条 センターに、その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2 推進委員会は、センター長の諮問に応じて助言または提案を行い、推進委員によって構成される。

3 前項の推進委員は、ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生等、およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり、その任期は2年とし、再任を妨げない。専任教職員にあっては、所属長の推薦により、その他の者にあっては運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。

4 センター長は、必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

(学生メンバー)

第12条 センターの業務の遂行にあたって、センター長は、学生の参加と協力を求めることができる。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

#### 付 則

1 この規程は、2001年7月18日から施行する。

2 この規程の施行により、「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。

3 2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項、教養教育センター設置による。）

4 2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）

5 2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティア・コーディネーター、事務職員数の変更による。）

6 2005年11月1日一部改正施行（第7条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新

設による。第8条評価・評価委員会、新設)

- 7 2006年1月1日一部改正施行(コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。)
- 8 2006年1月1日一部改正施行(第7条2項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。)
- 9 2006年4月1日一部改正施行(第3条事務局職制変更による)
- 10 2010年4月1日一部改正施行(基本理念作成委員会の答申に基づき、第2条目的および第3条業務を見直し、第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除、第5条センター長補佐の人数を変更、第7条センター長補佐は専任教員の中から選する、第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記、3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加、第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加)。
- 11 この規程は、2014年4月1日から施行する。(第3条3項、第4条学生の活動内容の追加、第5条3項の削除、第11条2項、第11条3項推進委員の学外有識者・実務家を2名から若干名へ変更、第12条見出し変更)
- 12 この規程は、2018年5月11日から施行する。(第6条ボランティアコーディネーターの人数変更、第10条評価を受ける周期の変更)



明治学院大学ボランティアセンター報告書 第21号 2024

---

発行 2025年6月

発行者 明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

明治学院大学白金キャンパス 10号館 1F

TEL 03-5421-5131 FAX 03-5421-5144

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町 1518

明治学院大学横浜キャンパス 4号館 1F

TEL・FAX 045-863-2056

E-mail [voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp](mailto:voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp)

<https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/>

印刷 山口北州印刷株式会社

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、  
ネットワークにより転送することを禁じます。

